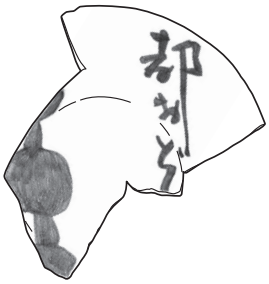
長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選

（十二）



２０２３

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選

（十二）

２０２３

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序　　文

本書、資料選（十二）は、令和４年度の最後を飾る刊行物として発刊しました。本年度は、当センターが長岡京市域の埋蔵文化財発掘調査事業などを実施するために設立されてから 40 年という節目の年度に当たりました。資料選は、多くの発掘調査成果がありながらも十分にその成果を公開し得なかった発掘調査を取り上げるための刊行物です。本書までに 11 冊の刊行を重ねてきましたが、それぞれに長岡京跡を始めとした、市内の主要遺跡における貴重な埋蔵文化財資料が収録されており、当センター 40 年の歩みと、これまでに取り扱ってきた資料の重みを物語るものと言えます。

本書には、古くは弥生時代と古墳時代の開田城ノ内遺跡における集落や環濠に関わる資料、長岡京期では左京域の五条大路と東二坊坊間西小路の交差点や右京域の西一坊坊間大路と宅地域に関する資料、より新しい時代では江戸時代の永井氏神足館と徳勝寺に関連する資料を掲載しています。いずれも、本市のみならず、本市を含む乙訓地域、山城盆地の豊かな歴史を理解する上で重要な資料であり、広く公開する機会が得られたことは大きな喜びでもあります。

当センターでは、今後も資料選など様々な取り組みによって、埋蔵文化財資料の公開と活用を図っていきたいと考えています。皆さまには、今後ともご支援ご協力賜りますようよろしくお願い申し上げます。

令和５年３月

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　山　本　和　紀

例　　言

1．本書は、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターがこれまでに実施した発掘調査、立会調査から、充分な成果報告がなされていなかった重要資料をまとめたものである。

2．本書収録の調査には、長岡京跡とその他の遺跡の調査がある。各遺跡の推定範囲は、京都府・市町村共同 統合型地理情報システム（GIS）の遺跡マップによった。調査次数は各遺跡の調査回数を示し、長岡京跡では右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977 年）収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。また、立会調査は、最初の２桁が調査年度の西暦表記、後半が年度内の通算立会調査次数を示す。

3．長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第 38 巻第４号（1992 年）の復原案に従った。

4．本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991 年）によった。

5．本文の参考文献、（注）に示した報告書のうち、使用頻度の高いものについては以下のように略記した。

・京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』○　→　『京都府概報』○

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第○冊
　→　『京都府センター概報』第○冊

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告集』第○冊
　→　『京都府センター報告集』第○冊

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第○冊
　→　『京都府センター報告書』第○冊

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第○号
　→　『京都府センター情報』第○号

・長岡京市『長岡京市史』○○編○　→　『長岡京市史』○○編○

・長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第○冊　→　『長岡京市報告書』第○冊

・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』令和○年度
　→　『長岡京市センター年報』令和○年度

・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第○集
　→　『長岡京市センター報告書』第○集

・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』（○）
　→　『長岡京市センター資料選』（○）

・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査概要』令和○年度
　→『京都市研究所概要』令和○年度
・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第○冊
　→『京都市研究所報告』第○冊
・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第○集　→『向日市報告書』第○集
・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター『向日市埋蔵文化財調査報告書』第○集
　→『向日市報告書』第○集
・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター『年報　都城』○　→『向日市センター年報』○
・大山崎町教育委員会『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第○集
　→『大山崎町報告書』第○集
・大山崎町教育委員会『大山崎町文化財年報』令和○年度　→『大山崎町年報』令和○年度
・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第○集
　→『長岡京跡研究所報告書』第○集
・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京跡発掘調査研究所ニュース　長岡京』第○号
　→『長岡京ニュース』第○号

6．本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数＋番号であるが、報告によっては煩雑さを避けるため調査次数を略している。「SD01」などの場合は、調査次数を冠した「SD ○○○ 01」が正式な番号である。

7．本書の挿図写真・付表は、各資料項目ごとに番号を付した。番号の重複を避けるために、まず、資料項目の順番を付し、次いで資料項目内での番号を記した。「1．長岡京跡右京第 370 次調査」に掲載した第 1 図の場合は、「第 1－1 図」と表記する。

8．本書で使用している方位と国土座標値は、世界座標系の第Ⅵ系によっている。なお、挿図では日本座標系を補助的に表した。

9．本書挿図・付表の土層名に示した記号は、『新版標準土色帳』（1997 年版）の JIS 表記法による土色である。

10．本書は山本輝雄、木村泰彦、原　秀樹、中島皆夫が執筆し、各調査報告に担当者名を示した。

11．遺物写真は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。

12．本書の編集は、技術補佐員・整理員の協力のもとに原、中島が行った。

目　　次

序　　文 …… i

例　　言 …… iii

1．長岡京跡右京第 370 次調査 …… 1
　～ 古墳・弥生時代　開田城ノ内遺跡　建物・土坑・溝等出土資料 ～

2．長岡京跡左京第 235・278 次調査 …… 29
　～ 長岡京期　条坊側溝等出土資料 ～

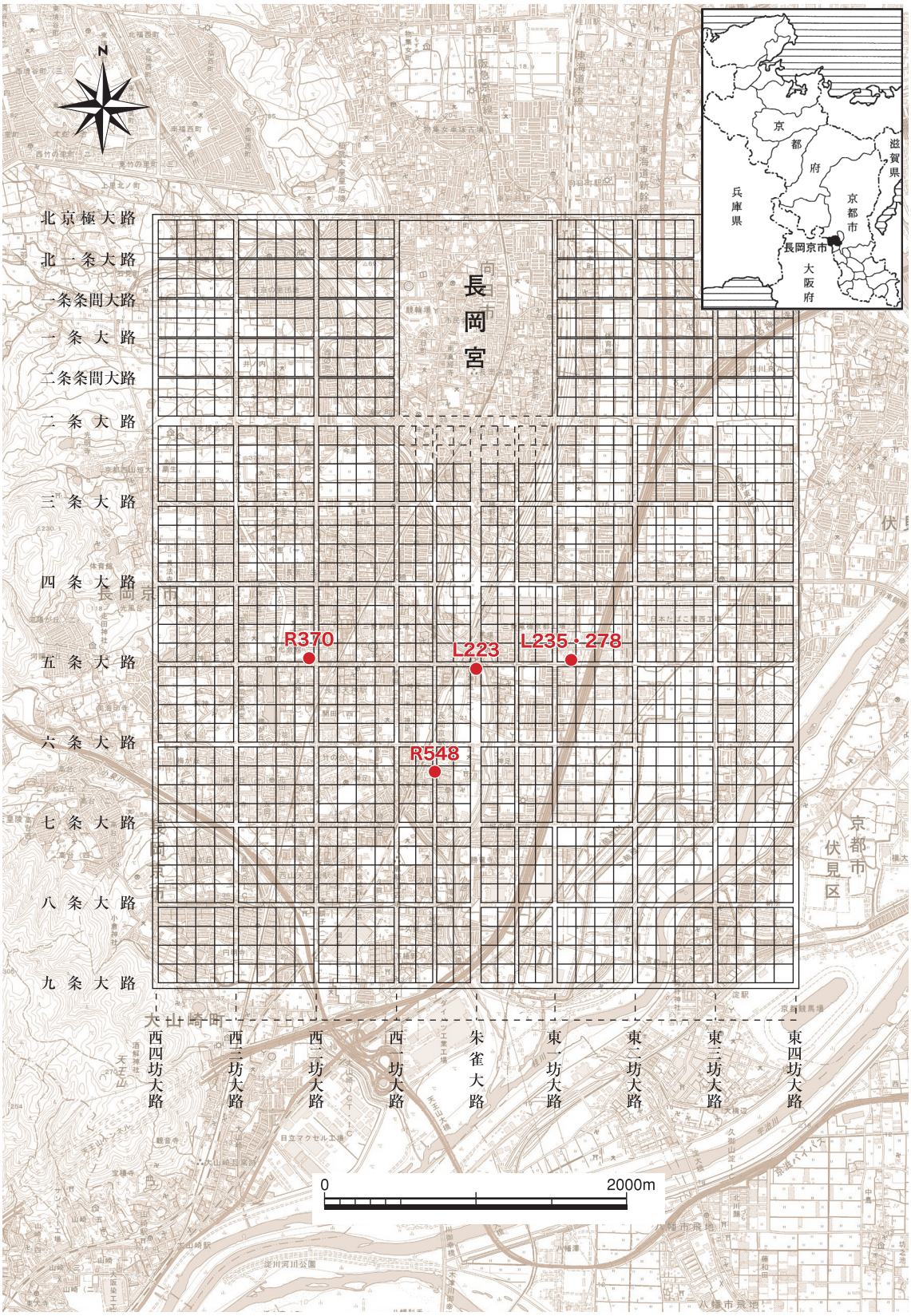
3．長岡京跡右京第 548 次調査 …… 61
　～ 長岡京期　条坊側溝、江戸時代　徳勝寺関連出土資料 ～

4．長岡京跡左京第 223 次調査 …… 85
　～ 江戸時代　永井氏神足館関連出土資料、時期不明　粘土採掘坑 ～

＊ 表紙カット　右京第 548 次調査　溝 SD01 出土の「都をどり」墨書土師器

本書報告調査地一覧表

調査次数	重複遺跡	住　　所	調査期間	面積
長岡京跡 右京第 370 次	開田城ノ内遺跡	長岡京市長岡二丁目 429	1991 年 4 月 22 日 ～ 6 月 28 日	365㎡
長岡京跡 左京第 235 次	雲宮遺跡、神田古道	長岡京市馬場六ノ坪 1 – 4	1990 年 1 月 8 日 ～ 5 月 2 日	1,019㎡
長岡京跡 左京第 278 次	雲宮遺跡	長岡京市馬場六ノ坪 1 – 4	1991 年 12 月 24 日 ～ 1992 年 4 月 17 日	926㎡
長岡京跡 右京第 548 次	神足遺跡、勝龍寺城跡	長岡京市東神足二丁目 36– 1 、 36– 2 、37–12	1996 年 10 月 24 日 ～ 12 月 26 日	317㎡
長岡京跡 左京第 223 次	神足遺跡、近世勝龍寺城跡	長岡京市東神足一丁目 4	1989 年 6 月 26 日 ～ 8 月 31 日	462㎡



長岡京と調査地の位置（1/40000）

1．長岡京跡右京第 370 次調査

～ 古墳・弥生時代　開田城ノ内遺跡　建物・土坑・溝等出土資料 ～

調 査 地　長岡京市長岡二丁目 429　　**地 区 名**　7ANKSN－5 地区

調査期間　1991（平成 3）年 4 月 22 日～ 6 月 28 日　　**調査面積**　365㎡

出土遺物　22 箱

立　　地　緩扇状地　　標高約 25.7 m

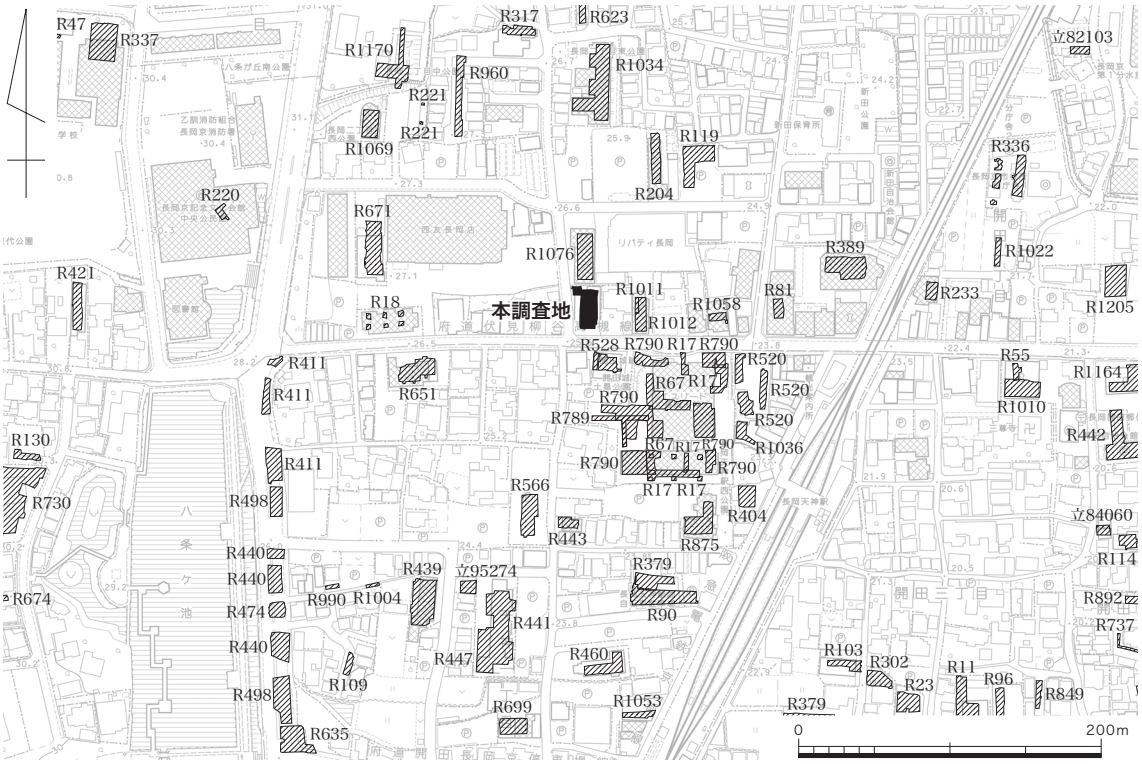
参考文献　「右京第 370 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 3 年度　1993 年

調査の概要

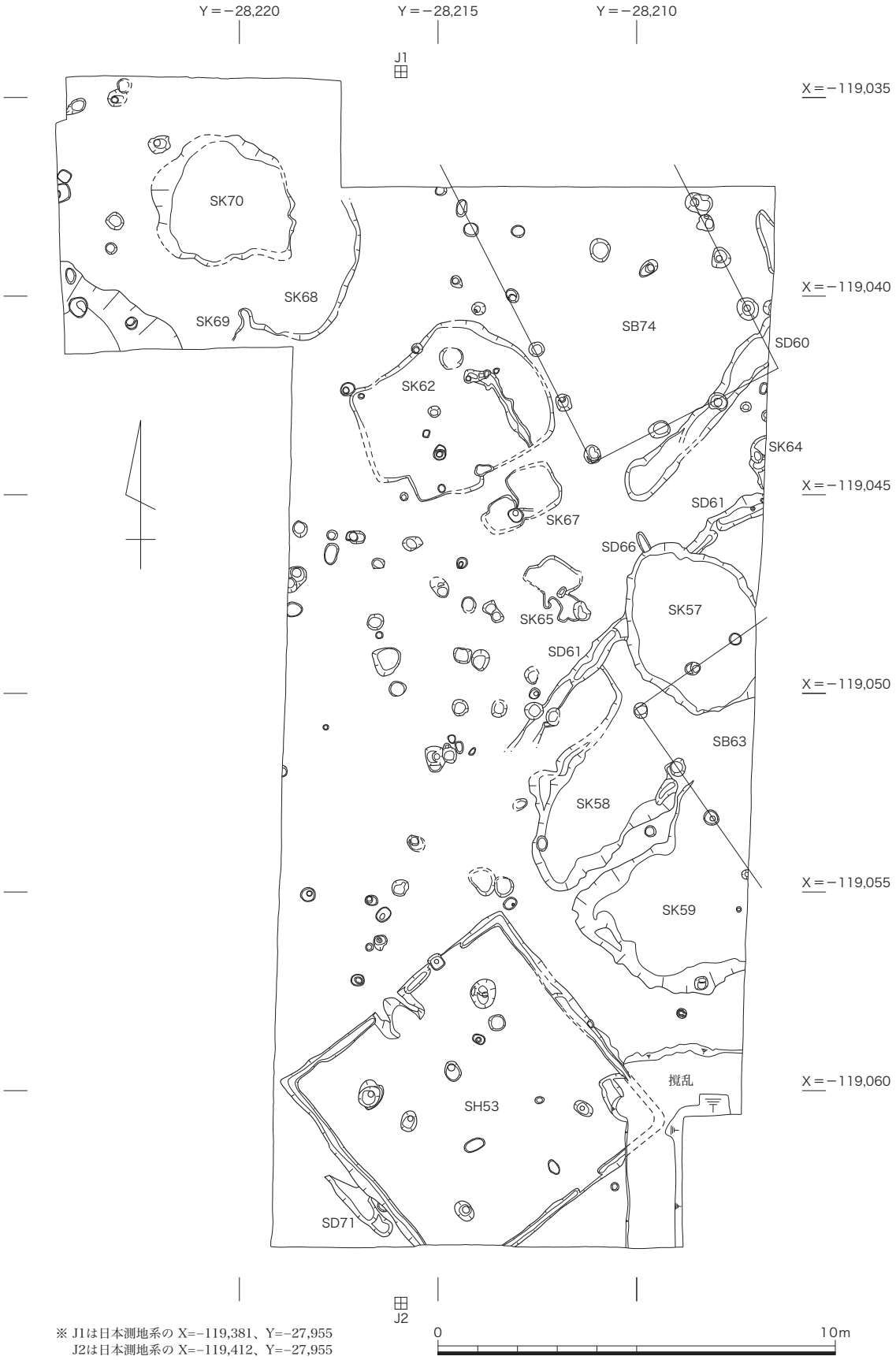
本調査は、店舗建設工事に伴って実施した発掘調査である。調査地は、阪急京都線長岡天神駅の北西約 150 mに位置する市街地の一角で、すぐ南側には府道伏見柳谷高槻線（愛称アゼリア通り）が東西方向に、また西約 190 mの地点には府道大山崎大枝線（愛称文化センター通り）が南北方向に走っている。当地を地形的にみると、おおむね西から東に向かって傾斜する緩扇状地上に立地しており、地表面の標高は約 25.7 mであった。

調査地は、長岡京の条坊復原によると、右京五条三坊四町にあたり、敷地の南部には五条大路が想定されていた。さらに、当地は縄文時代から中世までの複合遺跡である開田城ノ内遺跡の範囲に含まれる所であって、そうした重複する遺跡に関係する遺構、遺物の検出が期待された。

調査にあたっては、調査対象地に東西約 12 m、南北約 27 mの長方形を呈した調査区を設定し、



第 1－1 図　発掘調査地位置図（1/5000）



※ J1は日本測地系の X=−119,381、Y=−27,955
　J2は日本測地系の X=−119,412、Y=−27,955

第１−２図　古墳時代の遺構配置図（1/150）

※ J1は日本測地系の X=−119,381、Y=−27,955
　J2は日本測地系の X=−119,412、Y=−27,955

第１－３図　弥生時代の遺構配置図（1/150）

４月 22 日から重機で盛土、耕作土、床土などを除去することから開始した。そして、23 日から作業員を動員して遺構の検出を進めた結果、遺構面が２面あることが判明し、中世の小溝群をはじめ、五条大路北側溝や掘立柱建物・井戸など長岡京期の遺構群、奈良時代の総柱建物群、古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物、弥生時代後期の竪穴建物と溝などといった各時代、各種類の遺構、遺物を重複した状態で数多く検出することができた。さらに、遺構を追求するため調査区の北西部を北に約３m、西に約５m分を拡張して調査を進め、現地での調査を終了したのは６月 28 日であった。

調査区心の国土座標値は、X＝−119,050、Y＝−28,215 である。

遺　構

１．基本層序

調査区内の基本層序は、上からアスファルト、盛土、耕作土、床土、暗灰色砂質土層、暗灰褐色砂質土層、黒褐色粘質土層の順で堆積しており、地表下約 0.6 m前後で地山に至っていた。暗灰色砂質土層と黒褐色粘質土層は、前者が中世、後者が古墳時代の遺物を包含しており、この２層はおもに調査区の南半部に堆積していたのに対して、北半部ではおおむね床土の直下が地山面であった。地山は暗褐色粗砂層や暗茶褐色土層などに分層することができ、緩扇状地を形成する非常に硬質な土層であった。遺構は、この地山上面（第Ⅱ遺構面）と黒褐色粘質土層上面（第Ⅰ遺構面）において検出したが、後者は中世から奈良時代まで、そして前者は古墳から弥生時代に属す遺構であった。今回は、第Ⅱ遺構面において検出した弥生時代と古墳時代の遺構、遺物について報告するものであり、第Ⅰ遺構面の奈良時代以降の遺構、遺物については、機会を改めることにしたい。

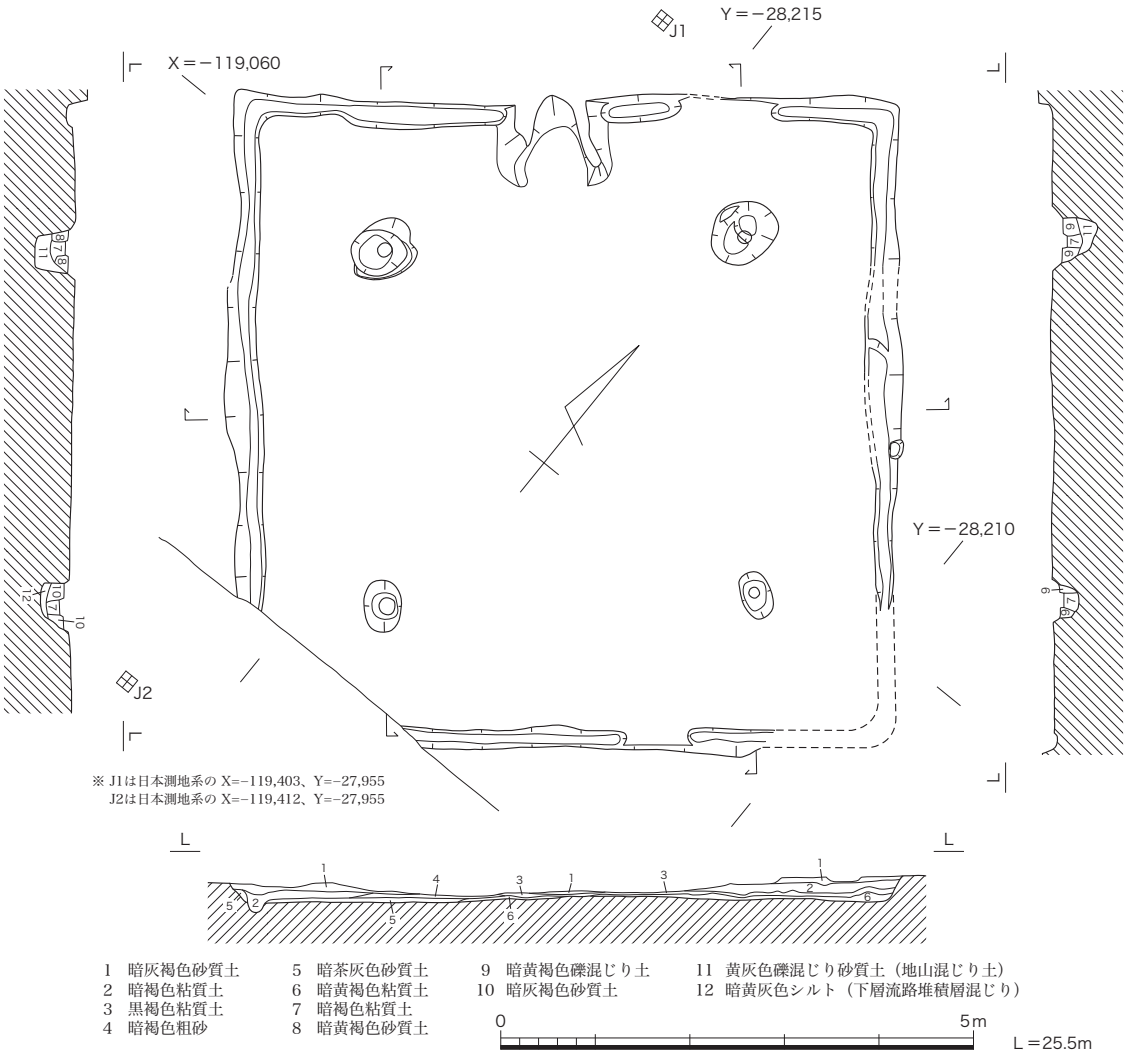
２．古墳時代の遺構（第１−２図）

この時代の遺構としては、竪穴建物１棟、掘立柱建物２棟、溝３条、それに土坑 10 基などがある。以下、主な遺構の概要を説明する。

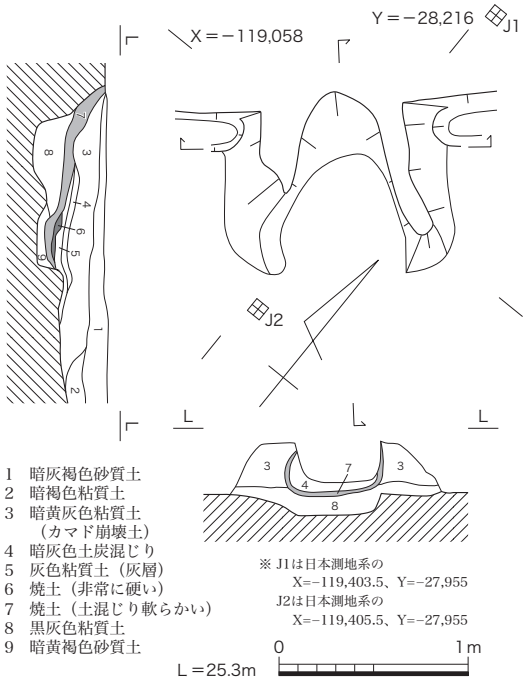
竪穴建物 SH53（第１−４〜６・17・18 図）　調査区の南部において検出した隅円方形を呈する竪穴建物で、建物の主軸の方位は北で西に 39° 程度振れていた。長岡京期の条坊側溝（五条大路北側溝）により破壊された箇所もあったが、遺存状態は比較的良好であった。建物の規模は、一辺が 6.9 〜 7.1 mほどあり、全体の深さは 0.25 m前後が遺存していた。建物内には、上から暗灰褐色砂質土層、暗褐色粘質土層、黒褐色粘質土層、暗黄褐色粘質土層などが堆積しており、土師器の甕をはじめ、須恵器の杯身・杯蓋・甕、それに製塩土器など各種の遺物が埋没していた。

建物の床面はおおむね平坦であり、四周には幅 0.2 〜 0.4 m、深さ約 0.1 mの周壁溝を巡らせ、建物の対角線上において４基の主柱穴を確認できた。主柱穴の掘形は、北西部の２基が径 0.6 〜 0.75 m、深さ 0.4 〜 0.5 mの楕円形、南東部の２基は径 0.35 〜 0.55 m、深さ 0.3 m前後の長楕円形を呈しており、柱痕跡の径はいずれも約 0.1 mであった。主柱穴の間隔は、東西方向が約 3.8 m、南北が約 3.9 mと大きな差はなかった。

北西辺中央部のやや西南寄りに造り付けられたカマドは、黄色系の粘土を馬蹄形に盛り上げて



第１－４図　竪穴建物 SH53 実測図（1/80）



第１－５図　竪穴建物 SH53 カマド実測図（1/40）

第１－６図　竪穴建物 SH53 カマド断ち割り状況（南から）

構築したもので、幅約1.2 m、奥行き約0.85 mの規模がある。カマドの内側や底面は、火を受けたために赤く変色していたが、煮炊に使用する甕などを保持するための支脚は無かった。

掘立柱建物SB63　調査区の中央東部で確認した東西２間以上、南北３間以上に復元できる建物で、方位は北で西に約35°程度振れている。土坑SK57・58・59と重複しているものの、新古の関係を確認することはできなかった。柱掘形は、径0.3～0.45 mの楕円形を呈し、深さは0.25～0.3 mであった。柱間寸法は、南北が1.6～1.7 m前後、東西は1.7 m等間に復元できた。

掘立柱建物SB74　調査区の北部で確認した東西３間、南北４間以上に復元できる南北棟建物で、方位は北で西に約27°程度振れている。溝SD60と重複しているが、新古の関係を確認することはできなかった。建物の柱掘形は、径0.35～0.6 mの楕円形で、深さは0.2～0.5 m程度遺存していた。柱間寸法は、桁行の南３間分が1.5 m等間、北が1.9 m、梁行は西から1.8 m、1.6 m、1.8 mと不揃いに復元することができた。

溝SD60　調査区の北東部で検出した北東から南西方向に延びる素掘り溝で、おおむね地形の傾斜に直交するように掘り窪められていた。溝幅0.5～0.8 m、深さは約0.2 mの規模があり、断面はU字形を呈している。掘立柱建物SB74と重複しているが、新古の関係を確認することはできなかった。

溝SD61　溝SD60の南約1.5 mで、それとほぼ平行する素掘りの溝。土坑SK57と重複し、それより古いことが知られた。幅0.35～0.6 m、深さ0.1～0.2 mの規模があり、断面はU字形を呈している。

溝SD71　調査区の南西隅部、竪穴建物SH53のすぐ西側で、それとほぼ同じ方位を向いた溝。幅0.4～0.7 m以上、深さ約0.35 mの規模があり、須恵器の杯蓋や高杯などの破片が少量出土している。

土坑SK57　掘立柱建物SB74の南側で検出した不整形な土坑で、溝SD61と掘立柱建物SB63と重複しており、前者よりも新しいことは明らかになったが、後者との新古関係は不明であった。土坑内からは、土師器や須恵器などの土器片が少量出土している。

土坑SK58　調査区の南東部で検出した不整形な土坑で、東西４m以上、南北約2.7 m、深さは0.15 mほどが残っていた。

土坑SK59　土坑SK58のすぐ南東で確認した不整形な土坑で、東側でSK58と一体のものになっていた。東西５m以上、南北4.1 m以上、深さ0.15 m前後の規模であった。

土坑SK62　掘立柱建物SB74のすぐ西側で検出した不整形な土坑である。東西約4.5 m、南北約3.9 mの規模があるが、深さは0.1 mしか遺存していなかった。

土坑SK65　調査区の中央部やや北寄りで検出した不整形な土坑で、東西約1.8 m、南北約1.3 m、深さは0.2前後の規模がある。

土坑SK67　土坑SK65のすぐ北側で確認した隅円方形を呈した東西約1.3 m、南北1.15 m、深さ約0.2 mの土坑である。

土坑 SK68　北西の拡張区で検出した不整形な土坑で、東西 2.4 m以上、南北 3.8 m以上、深さ約 0.1 mの規模がある。

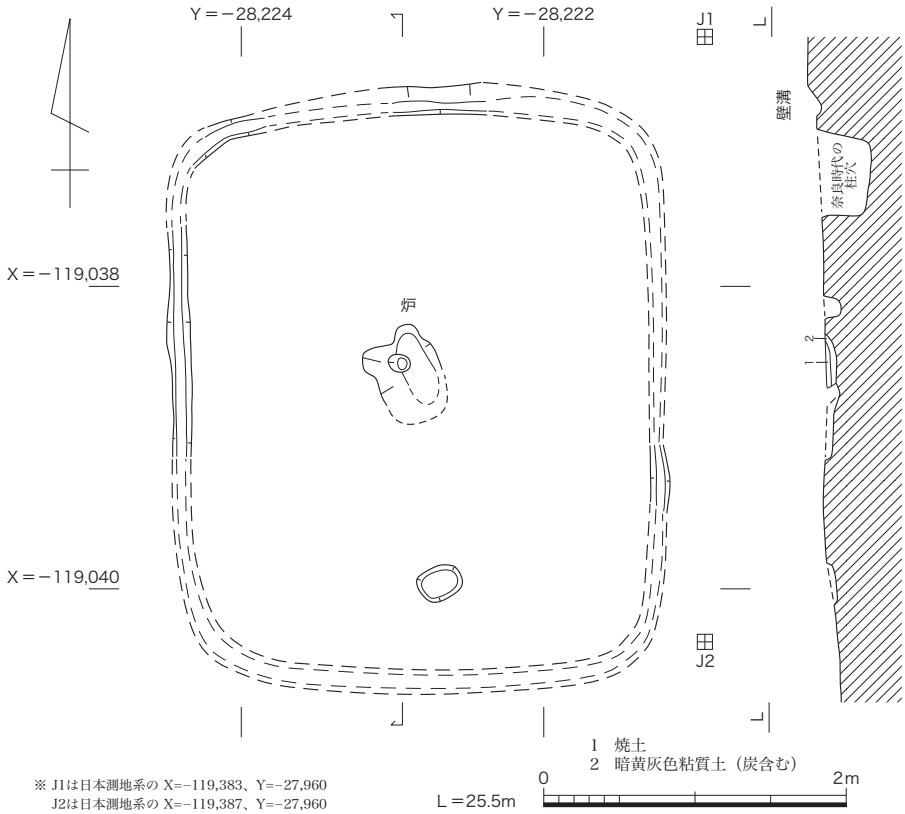
土坑 SK69　土坑 SK68 のすぐ西側で確認した不整形な土坑で、土坑内からは須恵器の杯身や甕などの破片が出土している。

土坑 SK70　北西拡張区で確認した不整形な土坑で、東西約 3.6 m、南北約 3.3 m、深さ 0.2 m前後の規模がある。土坑内からは、須恵器の高杯や把手付椀などの破片が出土している。

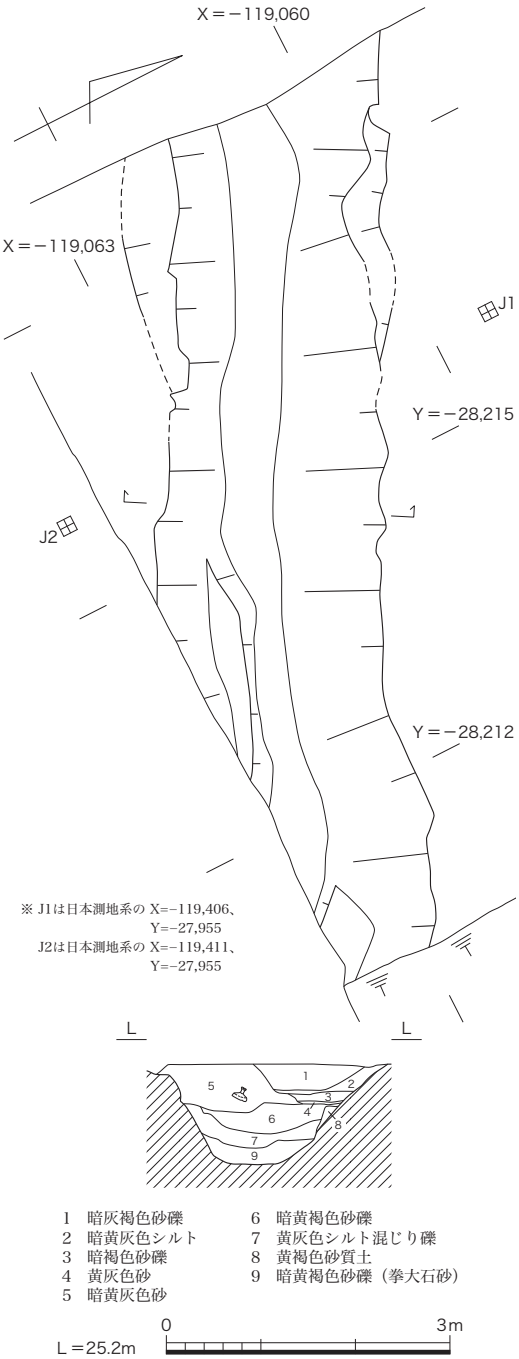
３．弥生時代の遺構（第１－３図）

この時代の遺構には、竪穴建物１基と溝１条がある。

竪穴建物 SH72（第１－７・19・20 図）　調査区北西の拡張区で検出した隅円長方形を呈する小型の竪穴建物であるが、上面を削平されていることに加え、中世の溝や奈良時代の建物、古墳時代の土坑などによって大きく破壊されていたため、残存状態は不良であった。建物の規模は、東西約 3.3 m、南北約４mに復元することができ、正方位に近い方位を向いている。幅 0.15 ～ 0.2 mほどの周壁溝を巡らせているが、南半部は削平を受けているため確認することはできなかった。建物の中央部に炉を設けていたが、炉跡は東西約 0.5 m、南北 0.55 m以上、深さは約 0.05 m分しか遺存しておらず、内部には上から焼土層と炭の混じった暗黄灰色粘質土層が堆積していた。炉跡の近辺では、主柱穴とみられる小穴を１基確認できた。小穴は、径 0.3 ～ 0.45 m、深さ 0.1 m程度の楕円形を呈している。建物内からは、壺、甕、鉢、高杯、器台など弥生時代後期後半の土器がまとまって出土している。



第１－７図　竪穴建物 SH72 実測図（1/50）



第１－８図　溝 SD73 実測図（1/80）

溝 SD73（第１－８・21・22図）　調査区の南端部で検出した西北西から東南東に延びる溝で、上部は古墳時代の竪穴建物 SH53 によって破壊されていた。溝の中央部にセクションを設け、その東側をＥ区、西側をW区として遺物の取り上げを行った。溝の幅 2.1 ～ 2.4 m前後、深さは約 1.1 mの規模があり、横断面は鋭いＶ字形を呈している。溝の埋設土は、大きく上下２層に分層することができ、上層は暗灰褐色砂礫層、暗黄灰色シルト層、暗褐色砂礫層、黄灰色砂層、暗黄灰色砂層、また下層は暗黄褐色砂礫層、黄褐色砂質土層、黄灰色シルト混じり礫層、暗黄褐色砂礫層などで、砂や砂礫の堆積が認められることから、流水があったことを示唆している。埋土中には、壺、甕、鉢、高杯、器台、ミニチュア土器など弥生時代後期後半に比定できる弥生土器が大量に埋没していた他、これら弥生土器とともに緑色凝灰岩製の管玉が１点であるが出土している。

遺　物

１．古墳時代の遺物

竪穴建物 SH53 出土遺物（第１－９・23・25図）

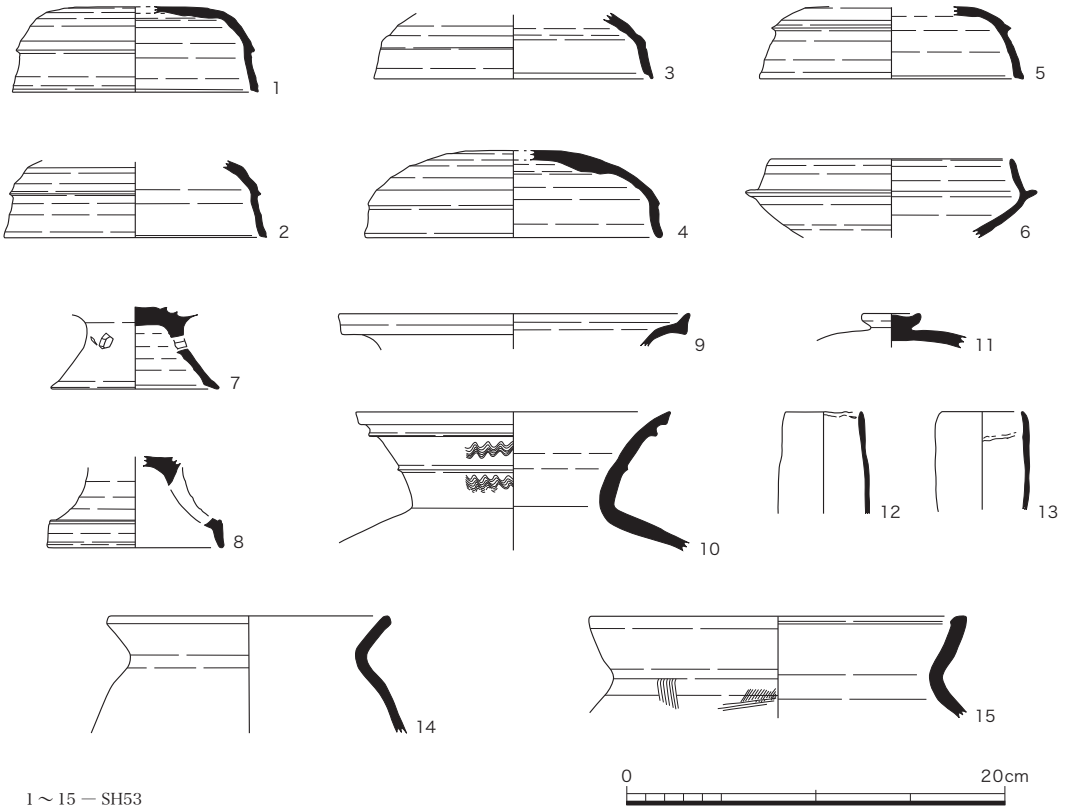
土師器、須恵器、製塩土器などの遺物がまとまって出土している。

土師器には、甕（14・15）がある。ともに口縁部の破片で、14 は口縁端部を丸く収めているが、15 は内側に折り曲げて肥厚させている。

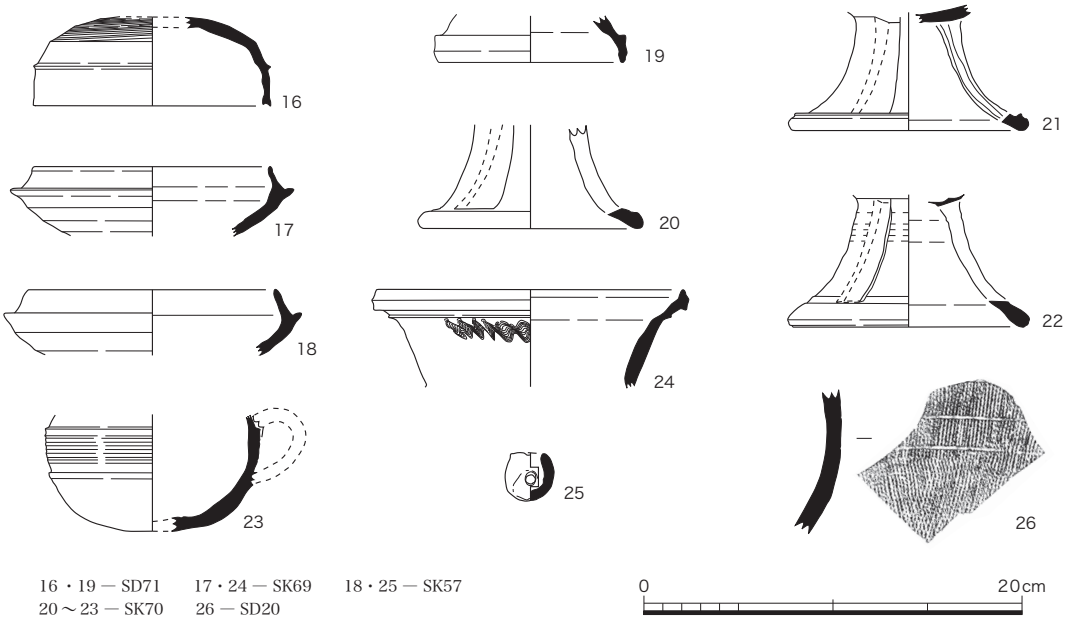
須恵器には、杯身（６）、杯蓋（１～５）、高杯（７・８）、有蓋高杯の蓋（11）、甕（９・10）などの器種がある。６は、口縁部が内傾気味に立ち上がる杯身で、口縁端部を丸く収め、底部外面は回転ヘラケズリを施して調整する。

杯蓋は、いずれも口縁部と天井部との境に明瞭な稜を有する形態で、稜は１・２・５がシャープであるのに対して、３・４は比較的緩やかである。口縁端部は、段を有するもの（１～３・５）と丸く収めるもの（４）がある。天井部外面は、回転ヘラケズリを施して調整するが、その方向は４が反時計回りであるのに対して、５は時計回りである。２の天井部外面には、自然釉の付着が認められる。

７は短脚高杯の脚部片で、裾端部は尖り気味に収束し、内面は回転ナデを強く施したために明



第１－９図　古墳時代の遺物実測図－１（1/4）



第１－10 図　古墳時代の遺物実測図－２（1/4）

瞭な稜がいくつもついている。透孔は３方に穿たれていて、孔形が六角形を呈する珍奇なものである。８も短脚高杯の脚部片であるが、裾端部は上下に拡張させた面をもっている。透孔は長方形を呈する四方透しで、外面には自然釉が付着している。

９・10 は、甕の口縁部片で、９は受け口状の口縁形態、10 は口頸部外面に突帯と波状文を２条ずつ巡らせて加飾している。11 は、有蓋高杯の蓋と考えられる天井部からつまみ部にかけての破片である。天井部外面は、回転ヘラケズリで調整し、つまみは周縁部が窪んでいる。外面全体に自然釉が付着している。

以上の須恵器は、形態や法量、調整手法の特徴からみて、陶邑古窯跡群の MT15 型式に比定することができ、６世紀前半の所産と考えられる。

製塩土器（12・13）は、口径が４cm 前後のコップ状を呈する形態で、器壁は非常に薄く作られている。

土坑 SK57・69・70、溝 SD71 他出土遺物（第１−10・24・25 図）　各土坑や溝などからは、土師器、須恵器など古墳時代の遺物が少量出土している。

土師器には、土坑 SK57 から出土したミニチュアの小型壺（25）があり、類列が乏しい個体であることを指摘できる。黒斑のある丸底の底部で、体部下半には焼成前に穿たれた径約 0.5cm の円孔があり、硬質に焼成されている。

須恵器には、杯身（17・18）と杯蓋（16）、高杯（19 ～ 22）、把手付椀（23）、甕（24）などの器種があり、18 は土坑 SK57、17・24 は土坑 SK69、20 ～ 23 は土坑 SK70、16・19 は溝 SD71 からそれぞれ出土したものである。

16 は、垂直に立ち上がる口縁部と丸味を帯びた天井部からなる杯蓋である。口縁部と天井部との境に明瞭な稜をもち、口縁端部は内傾する段を有する。天井部外面は、カキメを施して調整し、自然釉の付着が認められる。陶邑古窯跡群の MT15 型式に比定することができる。

17・18 は、内傾気味に立ち上がる口縁部をもつ杯身で、口縁端部を丸く収めている。17 の底部外面は、反時計回りの回転ヘラケズリを施して仕上げている。陶邑古窯跡群の TK10 型式に比定でき、６世紀中頃のものと推察することができる。

高杯は、いずれも短脚部の破片で、裾端部は 19 が上下に拡張した面をもつのに対して、20 ～ 22 は丸く収めている。20 ～ 22 の透孔は、いずれも長方形で、20、22 はともに３方透しである。21 の杯部内面には、自然釉が付着している。

甕（24）は、口縁端部を上下に拡張させ、中央に稜をもつ形態。口頸部外面には、櫛描波状文を１条施して加飾する。

26 は、中世の溝 SD20 から出土した陶質土器である。破損品のために全体の形態は不明であるが、壺の体部片ではないかと考えられる。外面は、縄席文のタタキを施した後、２条の沈線を巡らせて加飾する。内面は、ナデ調整を加えることによって当て具の痕跡を丁寧に消し去っている。胎土は精良で、青灰色を呈し、硬質に焼成されていることなど、明らかに須恵器と異なる様相を呈していた。

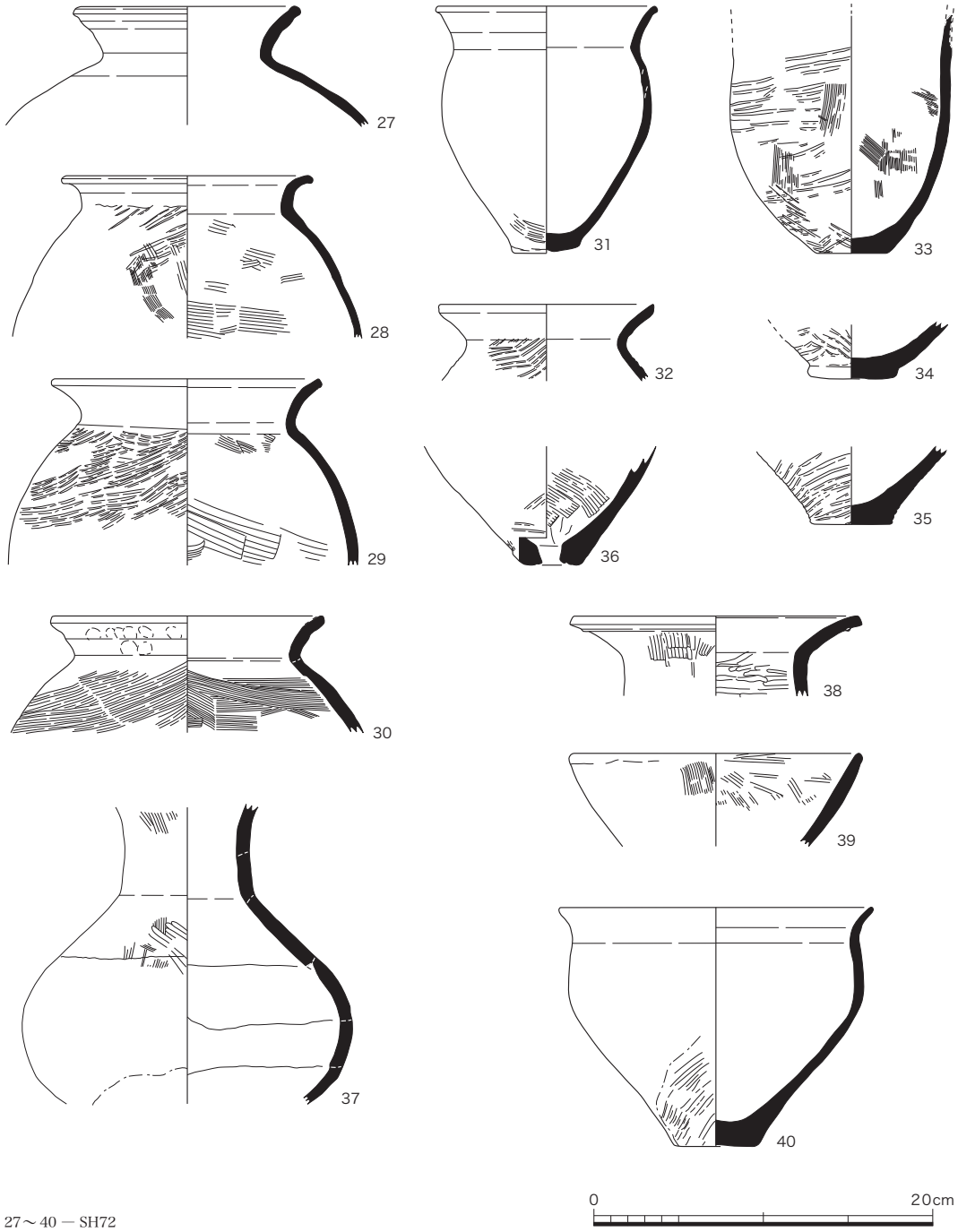
２．弥生時代の遺物

竪穴建物 SH72 出土遺物（第 1 –11・27 ～ 30 図）　広口壺（27）、細頸壺（37）、鉢（39・40）、有孔鉢（36）、甕（28 ～ 35）、器台（38）などの器種がある。

広口壺（27）は、くの字状に大きく屈曲する口縁部をもつ形態で、口縁端部を丸く収めている。

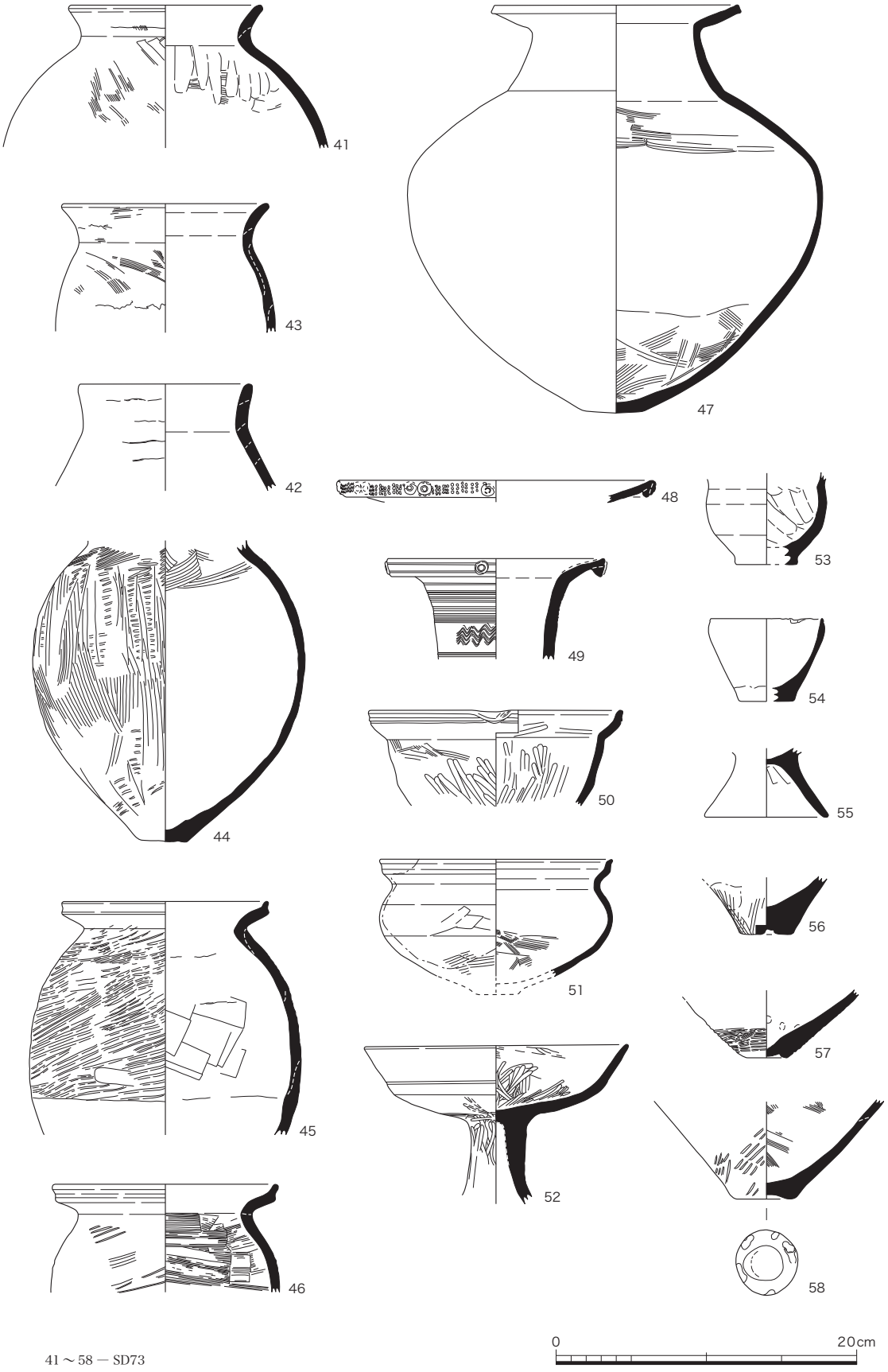
細頸壺（37）は、口頸部から体部にかけての破片で、内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っていた。頸部径約 7.3cm、体部最大径が約 19.6cm に復元でき、体部外面には黒斑を有する。

甕は、くの字状に屈曲する口縁部をもち、口径が 15cm 前後の大型品（28 ～ 30）と口径



27～40 ― SH72

第 1 –11 図　弥生時代の遺物実測図– 1（1/4）



41 ～ 58 ― SD73

第 1 –12 図　弥生時代の遺物実測図– 2 （1/4）

12.5cm程度の小型品（31・32）がある。大型品は、いずれも体部外面に右上がりのタタキが残り、内面はヨコハケ調整する。30の体部外面には、煤が付着していた。小型品の31には、体部外面に左上がりのタタキがわずかに残り、また32の体部外面には大型品と同様右上がりのタタキをとどめていた。34・35は、甕の底部片と考えられるもので、ともに外面に右上がりのタタキが残り、34の外面には煤が付着している。

36は、有孔鉢の底部片である。底部には、焼成前に径約1.1cmの円孔を穿ち、外面には煤の付着が認められる。

鉢には、口縁部が屈曲して外反するもの（40）とラッパ状に大きく広がるもの（39）がある。40の体部外面には、右上がりのタタキを施している。

38は、器台の口縁部と考えられる破片で、内外面ともミガキ調整して仕上げている。

溝SD73出土遺物（第1–12・13・25・26・28・29・31図）　壺、甕、鉢、器台、高杯、ミニチュア土器など後期後半に比定できる弥生土器の他に、管玉が1点出土している。

41は、短く外反する口縁部をもつ広口壺で、口縁端部を丸く収めている。42は、わずかに外反する短い口縁部をもつ直口壺で、口縁端部を丸く収めている。47は、内傾気味に立ち上がる頸部からくの字状に大きく外反する口縁部がつき、大きく張り出した体部と尖り気味に終わる底部をもつ形態の壺である。形態的には、東部瀬戸内（讃岐）系の特徴を示しているが、搬入品か否かは不詳である。49は、広口壺の口縁部から口頸部にかけての破片である。口縁端部は、2条の擬凹線文を施した後に円形浮文を貼り付け、また頸部には櫛描直線文3条と櫛描波状文1条を施して加飾する。

甕には、43～46・56～58がある。43は、くの字状に外反する甕の口縁部、44は口縁部を欠損する甕の体部片で、44の外面は右上がりタタキの後にハケメを縦方向に施して調整する。45･46は、口縁部が受け口状を呈する近江系の甕であり、体部外面には右上がりのタタキが残り、内面はヨコハケ調整して仕上げている。56～58は、甕の底部片と考えられるもので、56・57の底部は輪状に中央部が窪み、58とともに黒斑を有する。

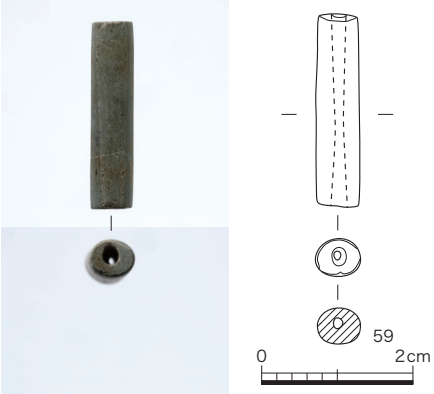
48は、器台の口縁端部と考えられる破片である。垂下させた口縁端面に櫛描烈点文を施し、その上から竹管を押し当てた円形浮文を貼り付けている。

鉢には、50と51がある。50は、口縁部が屈曲して、端部の一部が片口状にわずかに窪んでいる。51は、口縁部が受け口状を呈する近江系の鉢で、口径と体部最大径が拮抗する。赤褐色を呈し、黒斑を有する。55は、鉢の脚台の破片であろうか。

高杯（52）は、杯部から脚部にかけての破片である。杯部は、口縁部と底部との境に稜をもつが、稜線は鋭利ではなく、緩やかである。杯･脚部とも、外面はミガキ調整して仕上げている。

ミニチュア土器には、壺（53）や鉢（54）があり、前者の外面には黒斑が認められた。

管玉（59）は、東区の上層から1点出土した。長さ約2.55cm、径約0.5cmの法量がある完形品で、孔は両端から穿たれており、孔径は0.2～0.25cmを測る。緑色凝灰岩製で、表面全体を平滑になるよう丁寧に研磨して仕上げている。



第１−13 図　管玉の写真と実測図（1/1）

小　結

今回の調査は、小面積であったとはいえ、長岡京の条坊と宅地に関わる遺構・遺物をはじめ、弥生時代から中世に至る開田城ノ内遺跡に関わる遺構・遺物を数多く確認することができ、大きな成果を得ることができた。以下では、古墳時代と弥生時代に関係する調査成果の要点をまとめておこう。

１．古墳時代

この時代の成果としては、竪穴建物１棟や掘立柱建物２棟、土坑 10 基、溝３条など集落に関わる多岐にわたる情報を得ることができた。

まず竪穴建物 SH53 は、遺存状態が比較的良好であって、一辺約７ｍの方形を呈し、北西辺の中央部にカマドを造り付け、主柱が４本柱をもつ典型的な古墳時代後期の竪穴建物であった。出土した遺物の特徴からみて、６世紀前半頃に営まれていたことを推察することができた。一方、掘立柱建物は、検出した２棟ともが南北棟と考えられ、竪穴建物と同じく地形の傾斜に沿って建設されているが、両者の方位に大きな差を認めることはできなかった。ただし、掘立柱建物の柱穴から出土した遺物が乏しく、明確な時期を比定することはできないが、竪穴建物と重複していないことを重視するならば、両者は併存していた可能性も充分に考えられる。また、溝は地形の傾斜に直交するように掘られており、土坑については不整形な浅いものがほとんどであり、出土した遺物も乏しいことから、廃棄土坑と考えることはできないであろう。この他、中世溝からの出土ではあるが、陶質土器の破片が１点出土していることも興味深いことである。また、すぐ北側で行った右京第 1076 次調査[注1]でも２間 × ２間の倉庫とみられる総柱建物や埋土に焼土を含む不整形な土坑なども確認されており、こうした遺構の配置状況や密度などからみて、当地一帯が古墳時代後期の開田城ノ内集落の中心地であった可能性が濃厚で、今後集落の構造や範囲、変遷などを検討する上に有効な資料になるであろう。

２．弥生時代

この時代の遺構としては、わずかに後期後半の竪穴建物１棟と溝１条を確認したにすぎなかったが、それでも当該時期の開田城ノ内集落を検討する上で貴重な情報を得られた。

まず竪穴建物 SH72 は、遺存状態は不良であったが、長辺約４ｍ、短辺約 3.3 ｍの規模の隅円長方形に復元できる小型の建物で、中央に炉を設け、主柱は２本であったと推察できた。弥生時代後期の竪穴建物は、円形を呈する大型のものが主体であり、他に多角形や隅円方形ないし長方形の建物も存在しているとはいえ、今回のような小型の建物は、谷山遺跡[(2)]や井ノ内・今里遺跡[(3)]で類例がわずかに知られる程度である。高地性集落の谷山遺跡で確認された SH07 は、長辺約５ｍ、短辺約 3.9 ｍ規模で、中央に炉をもち、主柱は２本柱で、長辺の中央部に貯蔵穴を設けていた。また、井ノ内・今里遺跡の SH23660 は、長辺約 5.4 ｍ、短辺約 3.2 ｍの規模で、主柱は４本に復元されるが、炉は未確認であった。こうした小型の建物は、その規模や形態からみて、通常の

生活を営むための建物というよりは、むしろ非日常的に利用されたものと考えるべきであろう。谷山遺跡の SH07 から大小の砥石がまとまって出土していることは重要であり、工房的な性格を有しているものと推察できる。

次に溝 SD73 は、地形の傾斜に沿って掘り窪められた溝で、断面がV字形を呈し、砂礫が堆積していたことからかなりの流水があったことを知ることができた。当地の南東約 60 mの地点で実施した右京第 67 次調査[(4)]では、南北方向に蛇行しながら延びる幅約 1.5 ～ 2.6 m、深さ約 1.2 mの溝が確認されており、そこから弥生時代後期後半の土器が出土しているため、両者を一連の溝として理解することもできるであろう。溝の形状からすれば、集落の居住域を囲む環濠を想起させるが、流水のあったことが知られたので、環濠とするには躊躇をおぼえる。いずれにしても、SD73 よりも北東側、すなわち SH72 が所在する一帯に集落の居住域が広がっているものと理解することができる。

最後に出土遺物についてであるが、弥生土器が竪穴建物と溝から一定量まとまって出土しており、壺、甕、鉢、高杯、器台、ミニチュア土器などの各器種がそろっている他、緑色凝灰岩製の管玉が 1 点とはいえ出土したことは注目できる。時期的には、おおむね弥生時代の後期でも後半頃の範疇でとらえられるものであり、遺構ごとに大きな時期差はないものと考えてよいであろう。弥生土器の中に、受け口状の口縁部を有する近江系の甕（第 1 –12 図の 45・46）や鉢（51）に加え、東部瀬戸内系の壺（47）など特徴的な器種が存在することは注意すべきことである。乙訓地域における後期に所属する近江系の土器は、井ノ内・今里遺跡をはじめ、雲宮遺跡や谷山遺跡、伊賀寺遺跡、中海道遺跡、東土川遺跡などといった集落での出土が知られており、その数量は必ずしも多いとはいえないが、目立つ存在であることはこれまで指摘されているとおりである。一方、東部瀬戸内系の土器については、出土事例がきわめて乏しく、長法寺遺跡の後期前半に比定される土器に内面をヘラケズリ調整する瀬戸内地域からの影響を受けたものが知られている程度である。長法寺遺跡では、近江系の土器をほとんど含まない特徴があり、開田城ノ内遺跡とは異なる様相を呈している。こうした相違が、はたして時期差よるものなのか、あるいは集落を形成する集団の性格によるものかは、現状では情報不足であり、にわかに判断することができず、今後の検討する課題としておきたい。

（山本　輝雄）

注 1）木村泰彦「右京第 1076 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 25 年度（2015 年）
2）福永信哉「谷山遺跡」『長岡京市史』資料編一　（1991 年）
3）小田桐淳「長岡京跡右京第 236 次調査」『長岡京市センター資料選』一　（2012 年）
4）福永信哉「開田城ノ内遺跡」『長岡京市史』資料編一　（1991 年）

付表１－１　出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm） 口径(長)	器高(幅)	底径(厚)	色調	調整	出土遺構 層位	備考
須恵器	杯蓋	1	13	(4.5)		青灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SH53	
		2	13.9	(4.1)		青灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SH53 北区	
		3	14.7	(3.4)		淡灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SH53 南区	
		4	15.5	4.6		灰茶色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SH53	
		5	14	(3.8)		青灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SH53 カマド付近	
	杯身	6	12.7	(4.2)		青灰色	外面：口縁部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SH53 南区	
	高杯	7		(3.9)	8.9	青灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SH53	３方透し、透孔六角形を呈す
		8		(4.8)	9.3	暗灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SH53 西区	４方透し、外面に自然釉が付着
	甕	9	18.6	(1.8)		暗青灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SH53 西区	
		10	16.5	(7.3)		淡灰色	外面：口縁部は回転ナデ、体部は平行タタキ 内面：口縁部は回転ナデ、体部に同心円の当て具痕を留める	SH53 西・南区	口頸部外面に櫛描波状文を２条施す、内外面に自然釉が付着
	有蓋高杯蓋	11	つまみ径３	(1.8)		茶灰白色	外面：回転ヘラケズリ 内面：ナデ	SH53 西区	
	杯蓋	16	12.5	(4.7)		灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部はカキメを施す 内面：回転ナデ	SD71	
	杯身	17	12.4	(3.7)		青灰色	外面：口縁部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK69	
		18	13	(3.5)		灰色	外面：口縁部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK57	
	高杯	19		(2.5)	9.7	暗灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SD71	
		20		(5.4)	12	灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SK70	３方透し、透孔は長方形
		21		(6.6)	12.7	灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SK70	３方透し、透孔は長方形
		22		(6.8)	12.8	灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SK70	３方透し、透孔は長方形
	把手付椀	23		(6.2)	体部最大径 11.4	暗灰色	外面：回転ナデ 内面：底部に同心円の当て具痕を留める	SK70	
	甕	24	16.8	(5.2)		暗灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SK69	口頸部に櫛描波状文を施す

種類	器形	番号	法量（cm） 口径(長)	器高(幅)	底径(厚)	色調	調整	出土遺構 層位	備考
土師器	甕	14	14.8	(6.2)		暗茶褐色	外・内面：摩滅が顕著で、調整手法は不明	SH53	
		15	20	(5.1)		明褐色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はタテハケ	SH53	
	ミニチュア土器	25	1.8	(2.6)		淡褐色	外面：ナデ 内面：未調整	SK57	側面に円孔を穿つ、黒斑あり
陶質土器	壺	26				青灰色	外面：縄席文タタキを施した後、沈線を２条施す 内面：丁寧にナデを施す	SD20	中世の溝への混入品
製塩土器		12	4	(5.4)		灰白色	外面：ナデ 内面：ナデ	SH53 西区	
		13	4.2	(5.2)		灰白色	外面：ナデ 内面：ナデ	SH53 カマド	
弥生土器	広口壺	27	12.6	(7)		淡茶色	外面：口縁部はヨコナデ、体部はハケ後ナデ 内面：摩滅のために調整は不明	SH72	
	甕	28	14.2	(9.6)		淡茶褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケ	SH72	
		29	15.6	(11)		淡赤褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケ	SH72	
		30	15.6	(6.9)		淡黄褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケ	SH72	外面に煤が付着
		31	12.8	14.6	体部最大径 14	淡黄茶色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は左上がりのタタキ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はハケ後ナデ	SH72	
		32	12.5	(4.5)		淡黄茶色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は右上がりタタキ 内面：摩滅のために調整は不明瞭	SH72	
		33		(14)	4.2	淡黄褐色	外面：体部上半は右上がりのタタキ、体部下半は左上がりのタタキ 内面：タテないしナナメハケ	SH72	
		34		(3.2)	5	暗茶黄色	外面：右上がりのタタキ 内面：ハケ後ナデ	SH72	
		35		(4.5)	4.8	黄褐色	外面：右上がりのタタキ 内面：摩滅のために調整は不明	SH72	
	有孔鉢	36		(7)	3.5	淡黄褐色	外面：平行および右上がりのタタキ 内面：ハケ	SH72	底部に焼成前の円孔を穿つ、外面に煤が付着
	細頸壺	37		(17.5)	体部最大径 19.6	淡褐色	外面：ハケ後ミガキ 内面：ナデ	SH72	黒斑あり
	器台	38	16.8	(4.7)		淡赤褐色	外面：口縁部はミガキ 内面：口縁部はヨコナデ、体部ミガキ	SH72	
	鉢	39	16.8	(5.5)		淡褐色	外面：タテハケ後ナデ 内面：ヨコハケ後ナデ	SH72	
		40	18.4	14.4	体部最大径 17.4	淡黄褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ 内面：摩滅が顕著で、調整は不明	SH72	黒斑あり

種類	器形	番号	法量（cm） 口径(長)	器高(幅)	底径(厚)	色調	調整	出土遺構 層位	備考
弥生土器	広口壺	41	12.6	(9.4)		茶褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部はナナメハケ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコナデとタテナデ	SD73　東区上層	
	直口壺	42	11.2	(7.1)		暗茶褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	SD73	
	甕	43	13.6	(8.5)		淡茶褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部はナナメハケ 内面：摩滅のために調整は不明	SD73　東区上層	粘土紐の接合痕あり
		44		(19)	体部最大径 18.1	橙灰色	外面：体部は右上がりのタタキ後タテハケ 内面：摩滅が顕著であるが、ヨコハケが認められる	SD73	
		45	13.4	(15.5)	体部最大径 18	赤褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケ後ナデ	SD73	近江系の甕、体部外面に煤が付着
		46	14.6	(7.2)		暗茶褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケ	SD73	近江系の甕、体部外面に煤が付着
	壺	47	16.2	17.1	体部最大径 27.4	淡橙色	外面：口縁部はヨコナデ、体部はタタキ後ナデ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケとナデ	SD73	東部瀬戸内系の壺、黒斑あり
	器台	48	21	(1.5)		淡橙褐色	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	SD73　東区上層	口縁端部に櫛描列点文と円形浮文を施す
	広口壺	49	14.4	(6.7)		淡黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	SD73　東区上層	口縁端部に２条の擬凹線文と円形浮文
	鉢	50	16.5	(6.4)		明淡褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部はハケ後タテミガキ 内面：口縁部はヨコミガキ、体部はタテミガキ	SD73　東区下層	口縁端部が片口状
		51	15.4	(7.8)	体部最大径 15.6	赤褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部は上半がケズリ、下半はハケ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケ	SD73　東区下層	近江系の鉢、黒斑あり
	高杯	52	17.6	(10.6)		茶灰色	外面：ミガキ 内面：ミガキ	SD73	
	ミニチュア土器	53	体部最大径 8	(7.1)	4	淡茶褐色	外面：ナデ 内面：ナデ	SD73　東区上層	黒斑あり
		54	体部最大径 7.8	5.5	5.2	黄茶褐色	外面：ナデ 内面：ハケ後ナデ	SD73	
	脚台	55		(4.6)	8.2	淡茶色	外面：ナデ 内面：ハケ、ナデ	SD73	
	甕	56		(3.9)	3.6	淡黄褐色	外面：ナナメハケ 内面：調整は不明、ナデか	SD73　東区下層	底部外面は輪状に窪む、黒斑あり
		57		(4.5)	2.6	淡茶褐色	外面：平行タタキ 内面：ハケ後ナデ	SD73	底部外面は輪状に窪む、黒斑あり
		58		(6.5)	4	淡茶黄色	外面：右上がりのタタキ 内面：ハケ	SD73　東区下層	黒斑あり

第 1 –14 図　調査区遠景（北西から）

第 1 –15 図　調査区全景（南東から）

第 1 –16 図　調査区全景（北から）

第 1 –17 図　竪穴建物 SH53 全景（南東から）

第 1 –18 図　竪穴建物 SH53 カマド全景（東から）

第 1 –19 図　竪穴建物 SH72 全景（東から）

第 1 –20 図　竪穴建物 SH72 弥生土器出土状況（南から）

第 1 –21 図　溝 SD73 全景（北から）

第 1 –22 図　溝 SD73 土層堆積状況（南東から）

第 1 –23 図　古墳時代の出土遺物– 1

第 1 –24 図　古墳時代の出土遺物– 2

第 1 –25 図　弥生・古墳時代の出土遺物

第 1 –26 図　弥生土器– 1

第 1 –27 図　弥生土器– 2

第 1 –28 図　弥生土器– 3

第 1 –29 図　弥生土器– 4

第 1 –30 図　竪穴建物 SH72 出土遺物一括

第 1 –31 図　溝 SD73 出土遺物一括

2．長岡京跡左京第 235・278 次調査

～ 長岡京期　条坊側溝等出土資料 ～

調 査 地　長岡京市馬場六ノ坪１－４　　**地 区 名**　7ANLRB－２地区

7ANLRB－３地区

調査期間　1990（平成２）年１月８日～５月２日

1991（平成３）年 12 月 24 日～ 1992（平成４）年４月 17 日

出土遺物　15 箱　　**調査面積**　1,019㎡

47 箱　　926㎡

立　　地　小畑川のつくった扇状地　　標高 14.2 m前後

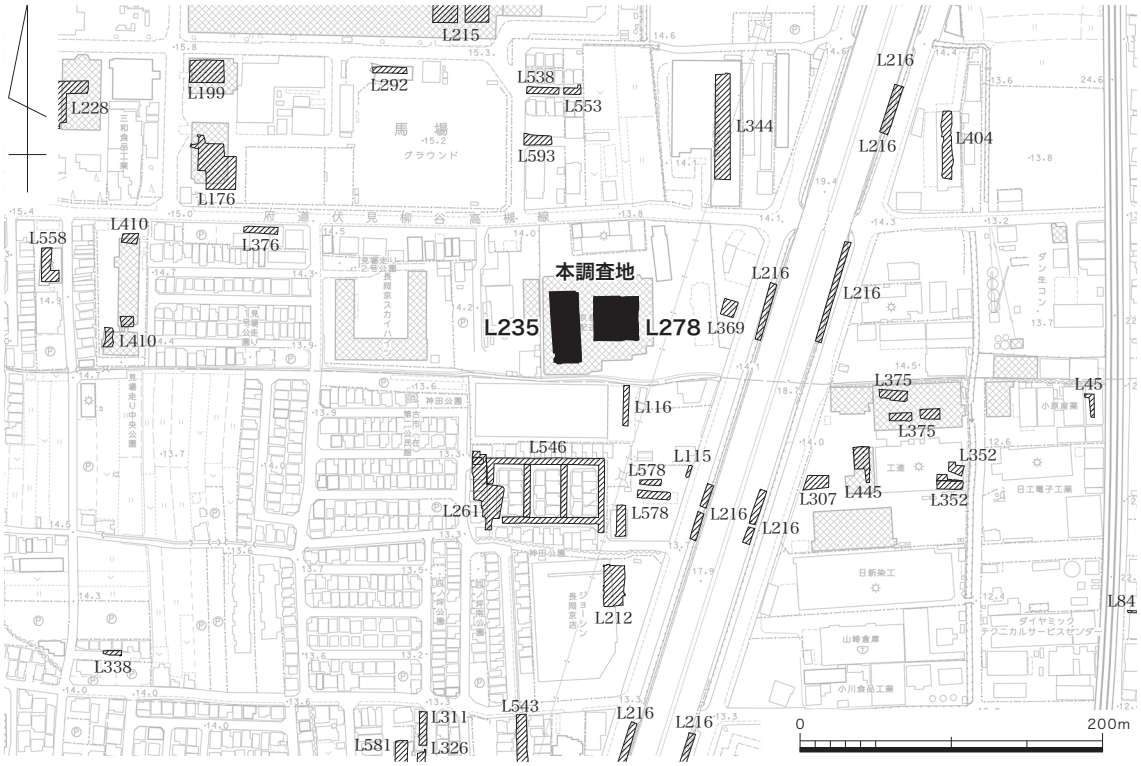
参考文献　「左京第 235 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991 年

「左京第 278 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成３年度　1993 年

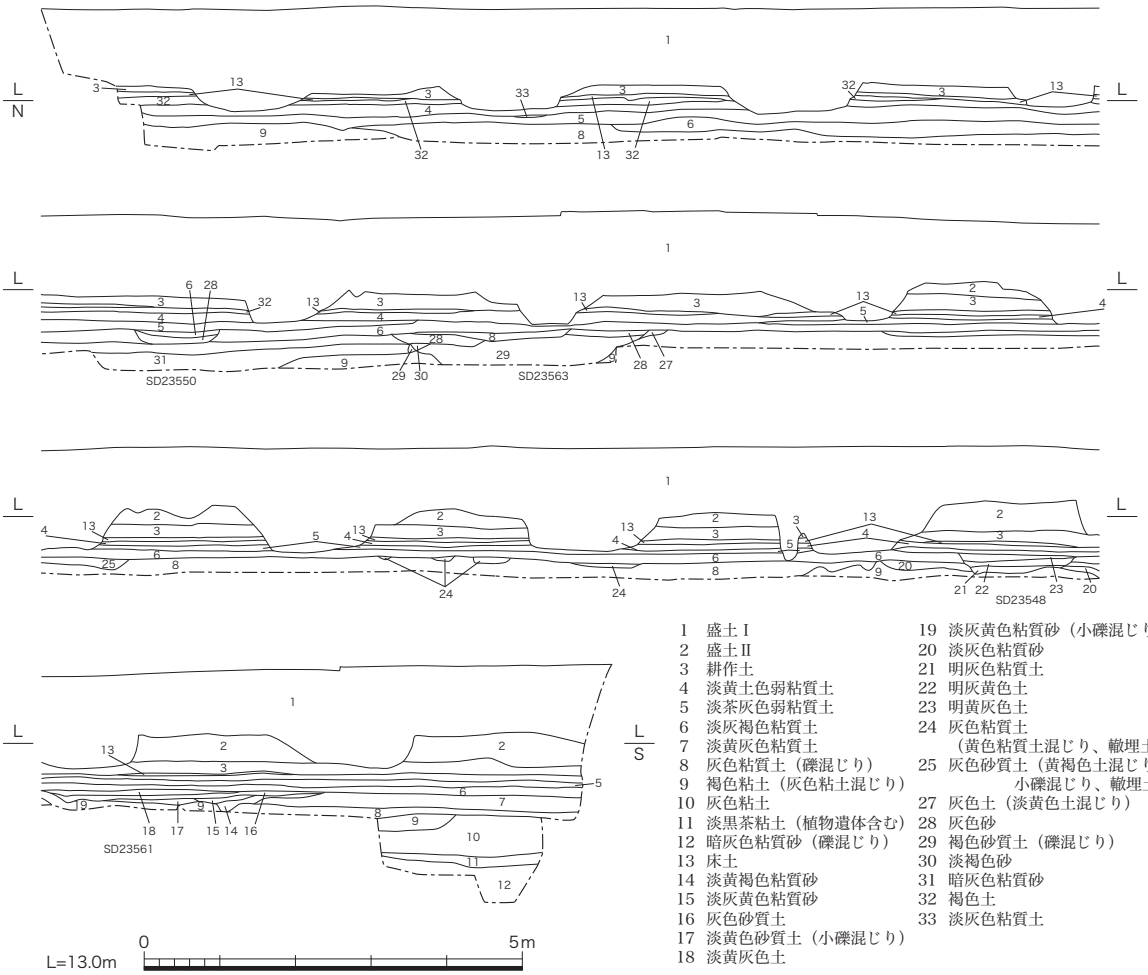
「２. 長岡京跡左京第 235 次調査」『長岡京市センター資料選』（十）　2018 年

調査の概要

いずれの調査も、株式会社京都西川の工場改築工事に伴う事前の発掘調査として実施した。調査地は、ＪＲ長岡京駅の東北約 0.5km にあたり、小畑川旧流路が形成した扇状地上に立地する。周辺の調査では、左京第 116 次調査地では「神田古道」と命名された斜行道路を、左京第 212 次調査地では東二坊坊間西小路と、弥生時代前期古段階の遺物を含む流路が確認された。当地においても、これらに関連する遺構、遺物の検出が期待されていた。

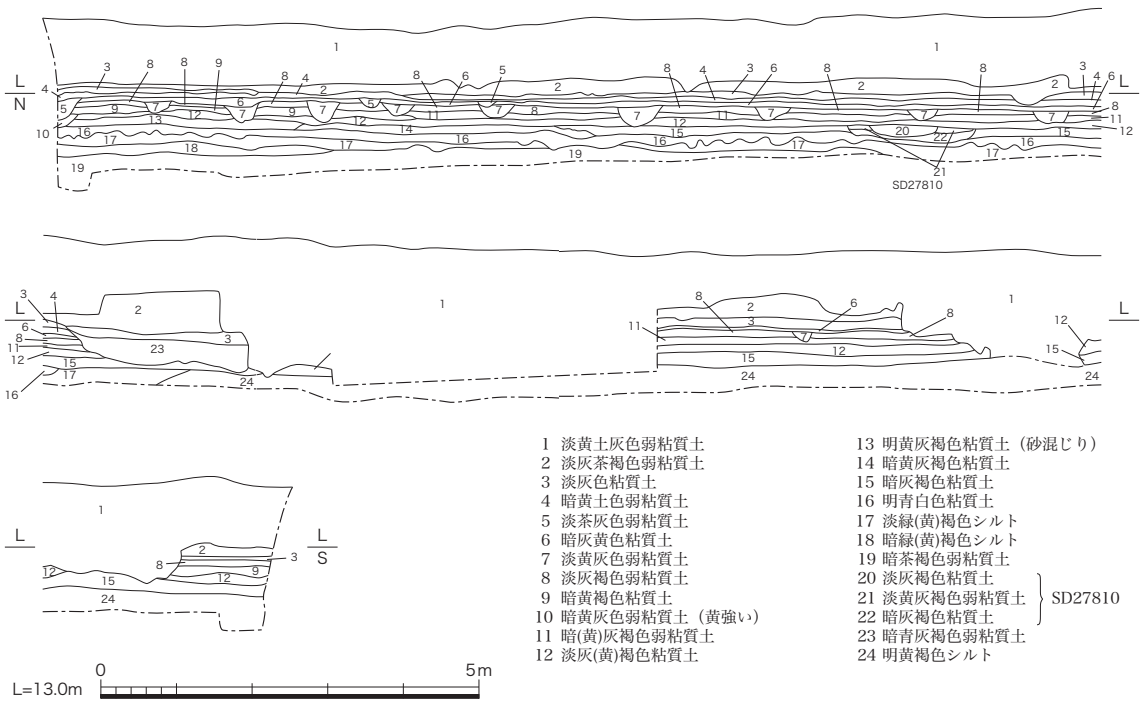


第２－１図　発掘調査地位置図（1/5000）



1　盛土Ⅰ
2　盛土Ⅱ
3　耕作土
4　淡黄土色弱粘質土
5　淡茶灰色弱粘質土
6　淡灰褐色粘質土
7　淡黄灰色粘質土
8　灰色粘質土（礫混じり）
9　褐色粘土（灰色粘土混じり）
10　灰色粘土
11　淡黒茶粘土（植物遺体含む）
12　暗灰色粘質砂（礫混じり）
13　床土
14　淡黄褐色粘質砂
15　淡灰黄色粘質砂
16　灰色砂質土
17　淡黄色砂質土（小礫混じり）
18　淡黄灰色土
19　淡灰黄色粘質砂（小礫混じり）
20　淡灰色粘質砂
21　明灰色粘質土
22　明灰黄色土
23　明黄灰色土
24　灰色粘質土
（黄色粘質土混じり、轍埋土）
25　灰色砂質土（黄褐色土混じり、小礫混じり、轍埋土）
27　灰色土（淡黄色土混じり）
28　灰色砂
29　褐色砂質土（礫混じり）
30　淡褐色砂
31　暗灰色粘質砂
32　褐色土
33　淡灰色粘質土

第２－２図　左京第 235 次調査　東壁土層図（1/100）



1　淡黄土灰色弱粘質土
2　淡灰茶褐色弱粘質土
3　淡灰色粘質土
4　暗黄土色弱粘質土
5　淡茶灰色弱粘質土
6　暗灰黄色粘質土
7　淡黄灰色弱粘質土
8　淡灰褐色弱粘質土
9　暗黄褐色粘質土
10　暗黄灰色弱粘質土（黄強い）
11　暗(黄)灰褐色弱粘質土
12　淡灰(黄)褐色粘質土
13　明黄灰褐色粘質土（砂混じり）
14　暗黄灰褐色粘質土
15　暗灰褐色粘質土
16　明青白色粘質土
17　淡緑(黄)褐色シルト
18　暗緑(黄)褐色シルト
19　暗茶褐色弱粘質土
20　淡灰褐色粘質土
21　淡黄灰褐色弱粘質土　SD27810
22　暗灰褐色粘質土
23　暗青灰褐色弱粘質土
24　明黄褐色シルト

第２－３図　左京第 278 次調査　東壁土層図（1/100）

検出遺構

左京第 235 次調査（第２－４・５図）　淡灰褐色粘質土層（第２－２図第６層）上面で長岡京期の遺構を検出した。東西方向の溝 SD23548･SD23550 が五条大路 SF23549 の南北両側溝である。

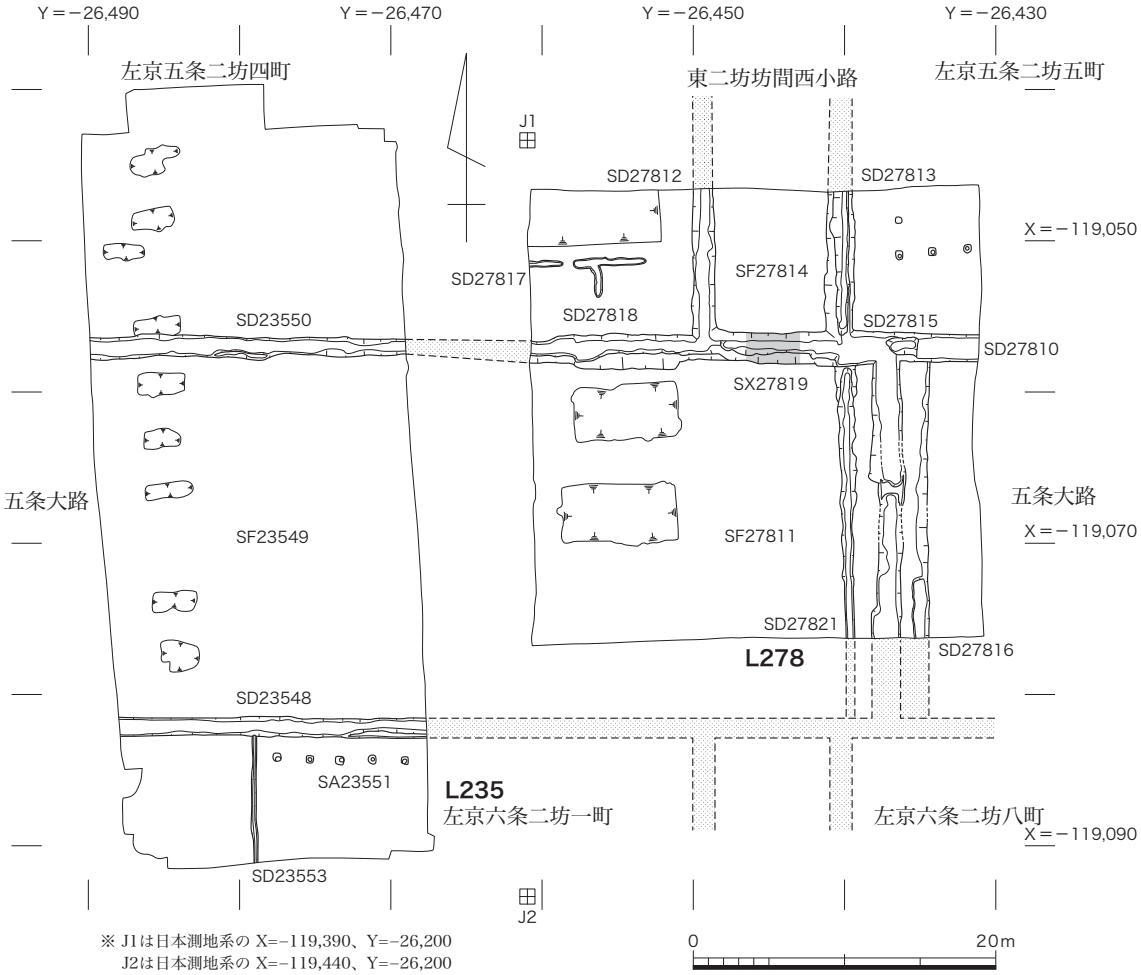
左京第 278 次調査（第２－４・９図）　暗灰褐色粘質土層（第２－３図第 15 層）の上面で長岡京期の遺構を検出した。東西方向の溝 SD27810 が五条大路北側溝で、南北方向の溝 SD27812・SD27813 が東二坊坊間西小路 SF27814 の東西両側溝である。

以下、両調査の検出遺構を条坊側溝、路面上の溝、宅地内の遺構の順に記述する。

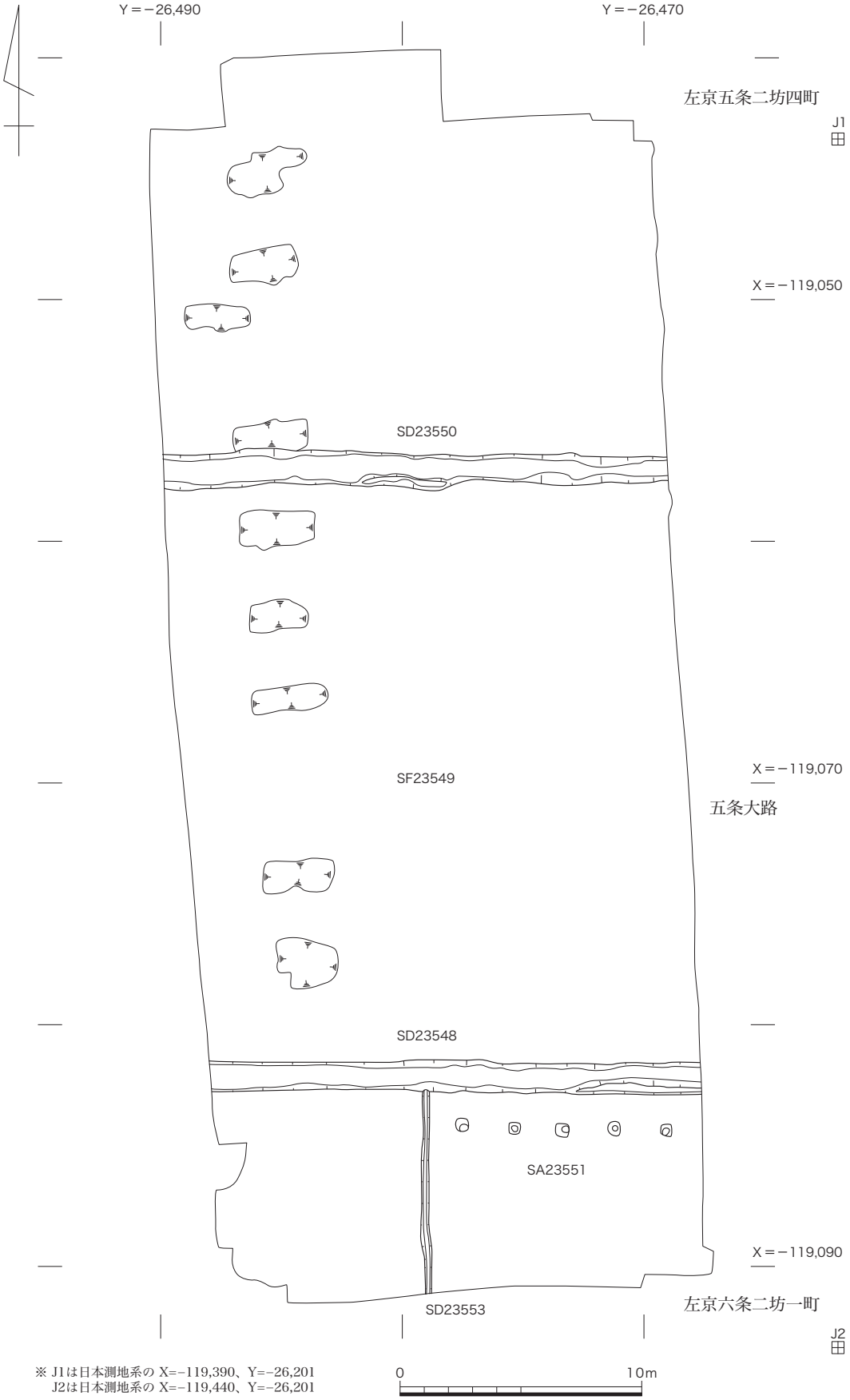
条坊側溝

五条大路北側溝 SD23550（第２－６図）　調査区の北半部で検出した溝で、東西約 21 mにわたって確認した。溝は幅１～ 1.5 m、深さ 0.15 ～ 0.3 mを測る。灰褐色系の埋土で、埋没段階の埋土など上半には砂や砂礫が多く含まれていた。北側溝の東半部では、土師器、須恵器、瓦などが比較的まとまって出土している（第２－７図）。なお、北側溝 SD23550 溝芯の中心座標値は、Y ＝–26,480 で X ＝–119,057.10 であった。

五条大路南側溝 SD23548（第２－８図）　南側溝は、東西約 20 mにわたって確認した。幅 1.2 m前後、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。南側溝 SD23548 溝芯の中心座標値は、Y ＝–26,480 で X ＝

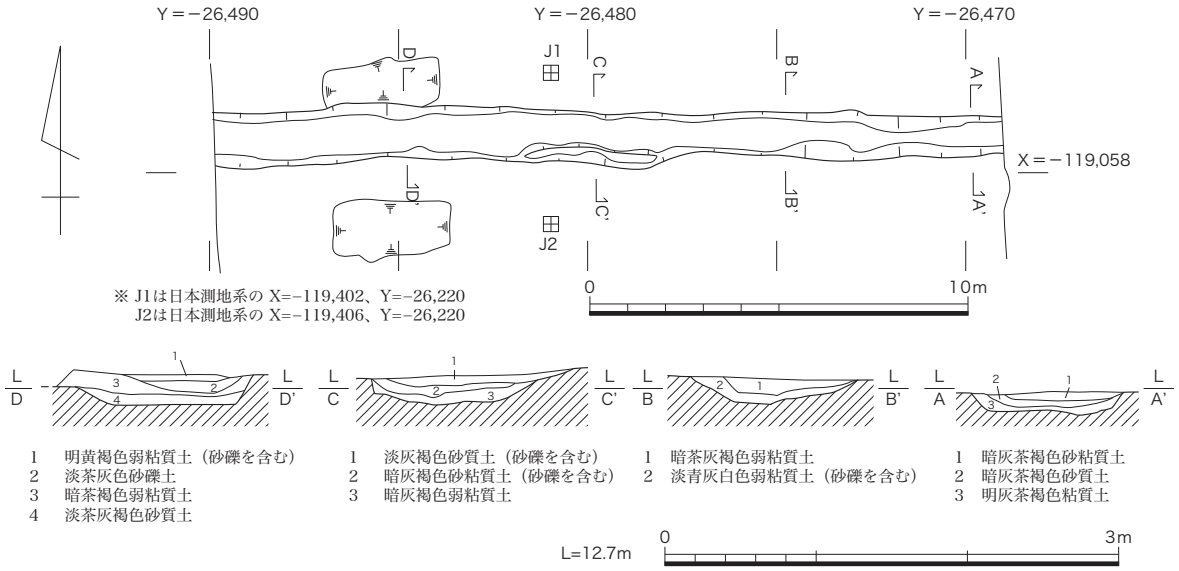


第２－４図　左京第 235・278 次調査長岡京期検出遺構図（1/500）

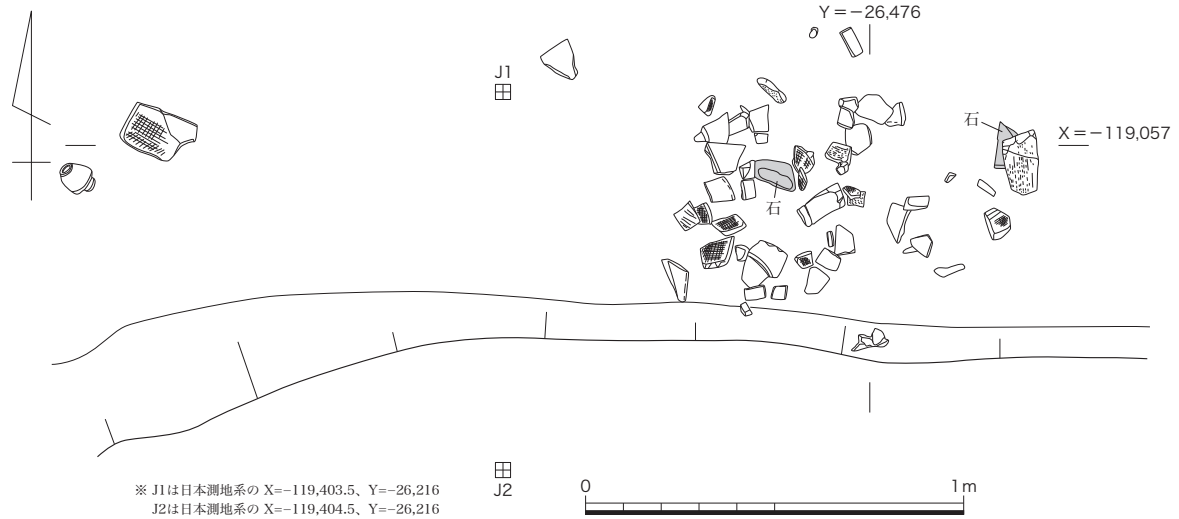


※ J1は日本測地系の X=−119,390、Y=−26,201
　J2は日本測地系の X=−119,440、Y=−26,201

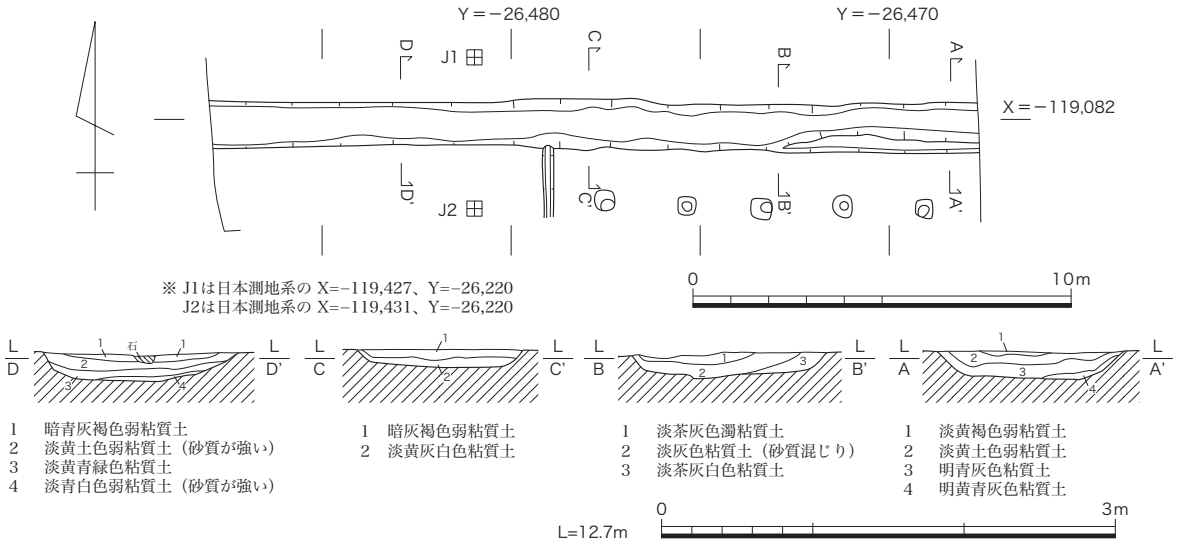
第２－５図　左京第 235 次調査　検出遺構図（1/250）



第２－６図　左京第 235 次調査　五条大路北側溝 SD23550 実測図（1/200・1/50）



第２－７図　左京第 235 次調査　五条大路北側溝 SD23550 遺物出土状況実測図（1/20）



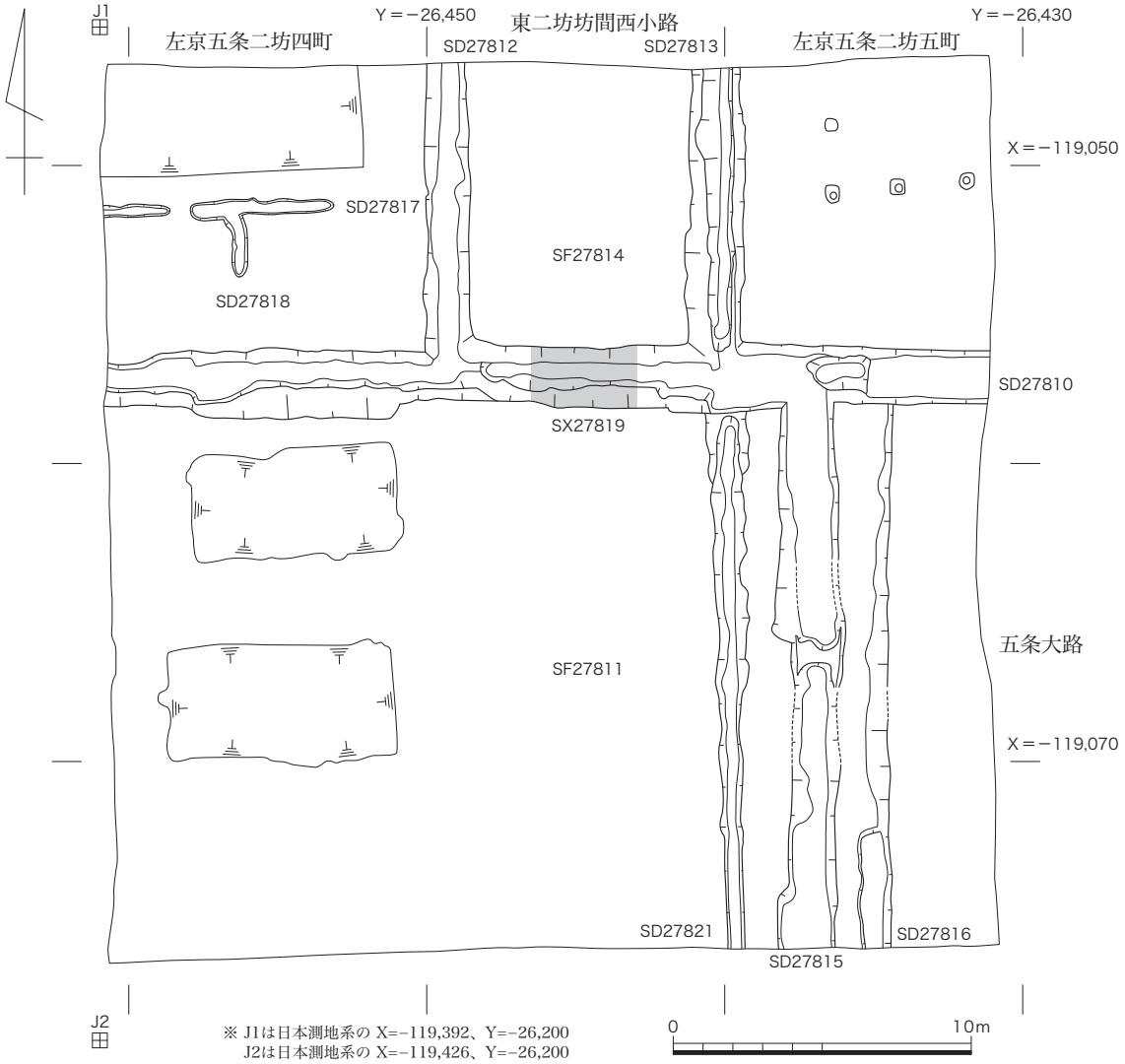
第２－８図　左京第 235 次調査　五条大路南側溝 SD23548 実測図（1/200・1/50）

−119,082.30 であり、五条大路 SF23549 の路面幅は、南北両側溝の芯々間で 25.2 mを測る。

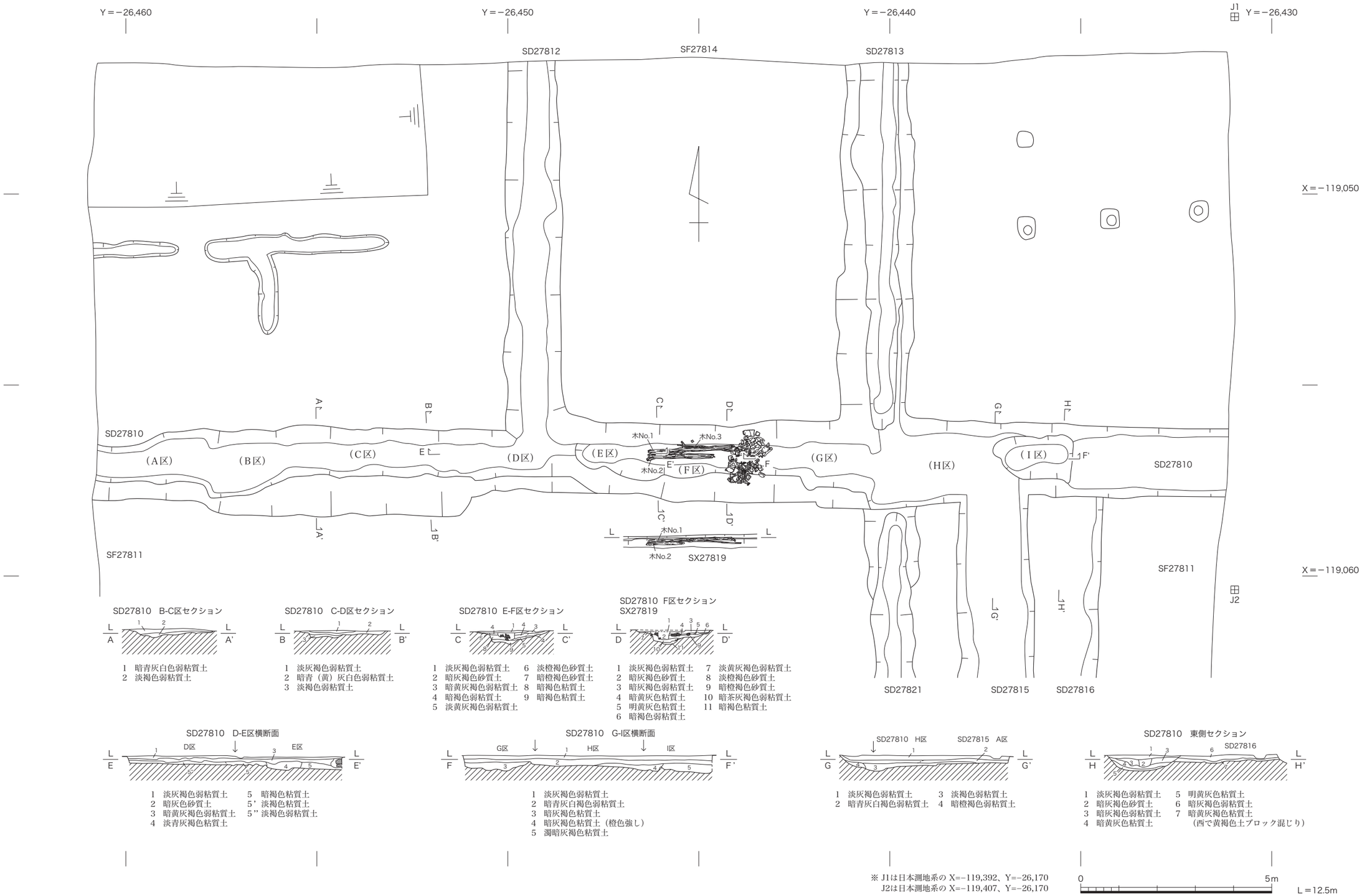
五条大路北側溝 SD27810（第 2 −10 図）　左京第 278 次調査では、左京第 235 次調査地から続く五条大路北側溝を東西約 30 mにわたって確認した。また、この調査では南北坊路の東二坊坊間西小路も確認しており、調査区のほぼ中央部が東西大路と南北小路の交差点にあたる。

五条大路北側溝 SD27810 は幅 1.5 ～ 2.1 mを測り、坊路との交差点より西側では路面側に張り出して掘削されている範囲が認められた。なお、溝芯の中心座標値は、Y ＝−26,435 で X ＝−119,056.90 であった。北側溝 SD27810 の深さは 0.2 ～ 0.4 mで、調査区東端の側溝底面高は標高 12.35 mを測る。左京第 235 次調査北側溝 SD23550 西端の底面は標高 12.6 mであることから、五条大路北側溝は両調査間の東西約 55 mで東側へ 25cm 程度傾斜していた。

先述したように五条大路北側溝 SD27810 は、調査区のほぼ中央部で東二坊坊間西小路の西側溝 SD27812、東側溝 SD27813 と接続する。西側溝 SD27812 は接続部より南側へ続かないため、大路の通行を優先する道路側溝の敷設状況が確認できた。なお、東側溝は敷設状況が異なっており、この点については項を改めて記述する。



第 2 − 9 図　左京第 278 次調査　検出遺構図（1/250）



第２−10図　左京第278次調査　五条大路、東二坊坊間西小路交差点実測図（1/100）

橋 SX27819（第２–10 図）　五条大路北側溝 SD27810 と東二坊坊間西小路の接続部の中央付近では、木材と凝灰岩の集積する範囲を約３ｍにわたって検出した。この部分は東二坊坊間西小路 SF27814 の中央であり、ここに五条大路と東二坊坊間西小路を行き来するための橋が架けられていたと推定される。木材は、長さ 2.6 ｍと 1.4 ｍの角材、長さ 1.2 ｍの板材、長さ 1.5 ｍの棒材などがある。木材の東からは凝灰岩がまとまって出土したが、大半は破片であり原形を窺えるものはない。いずれも原位置を保っていないが、これらは橋とその基礎を構成する部材の一部と考えられる。

五条大路北側溝 SD27810 からは、橋 SX27819 部の木材、凝灰岩に加え、土師器、須恵器、墨書人面土器、丸瓦、平瓦、獣骨などが出土している。しかし、その量は道路側溝検出範囲の広さに比べると限られたものであった。

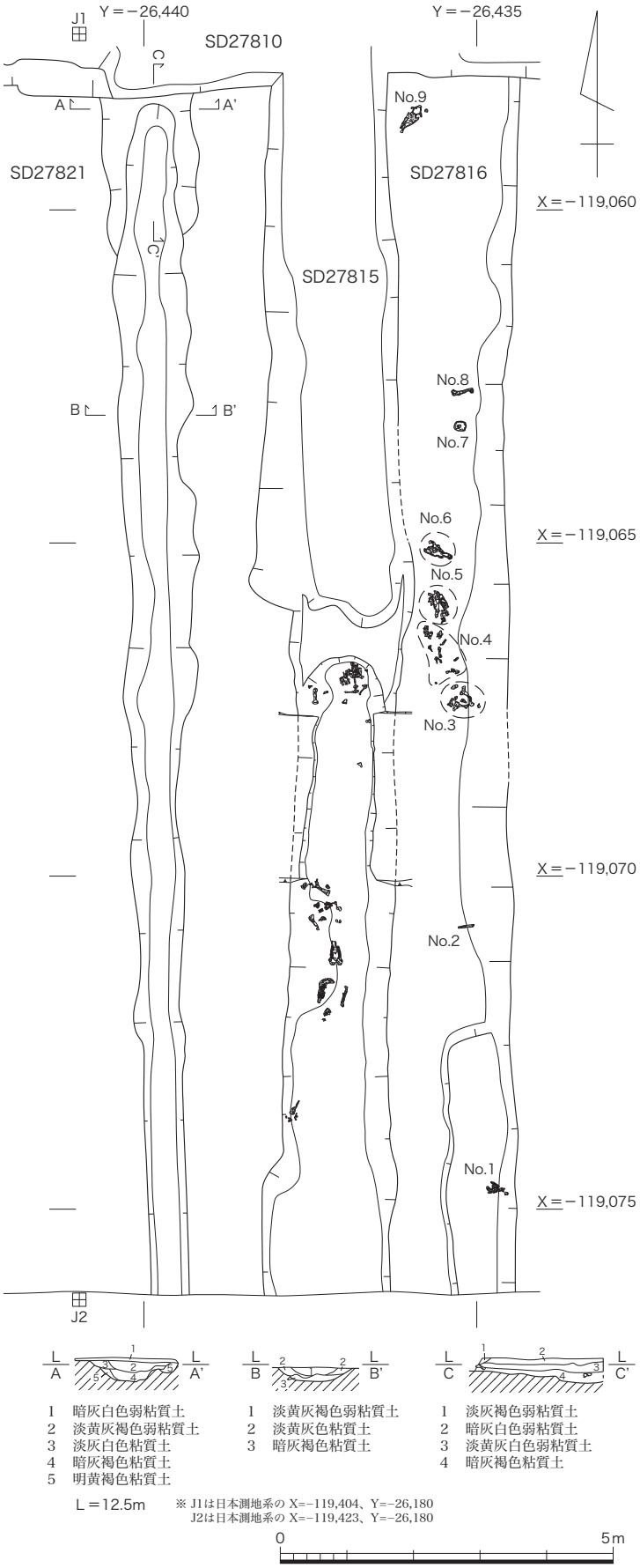
東二坊坊間西小路西側溝 SD27812（第２–10 図）　調査区の北半部で検出した溝で、南北約 10 ｍにわたって確認した。溝は幅 1.3 ｍ前後、深さは 0.2 ｍ程度を測る。西側溝の底面は緩やかに南へ傾斜しており、五条大路北側溝 SD27810 へ接続する。西側溝からは土師器、須恵器が少量出土しただけであり、獣骨や木質遺物などは含まれていなかった。なお、西側溝 SD27812 溝芯の中心座標値は、X ＝–119,050 で Y ＝–26,449.70 であった。

東二坊坊間西小路東側溝 SD27813（第２–10 図）　調査区の北半部で検出した溝で、西側溝と同様に南北約 10 ｍにわたって確認した。東側溝は幅 1.5 ～ 2 ｍ、深さは 0.4 ｍ程度を測り、西側溝に比べてやや幅広で深く掘削されている。また、溝底は平坦ではなく、溝中心より東側が深い状況であった。土層の断面観察からは、当初の東側溝が道路側へ拡張された可能性を指摘することができる。東側溝の底面も緩やかに南へ傾斜しており、五条大路北側溝 SD27810 へ接続する。東側溝からは土師器、須恵器が少量出土しただけであり、獣骨や木質遺物などは含まれていなかった。なお、東側溝 SD27813 最深部の中心座標値は、X ＝–119,050 で Y ＝–26,440.10 であり、東二坊坊間西小路 SF27814 の路面幅は、東西両側溝間で 9.6 ｍを測る。

五条大路路面上の南北溝

南北溝 SD27815・16・21（第２–10・11 図）　左京第 278 次調査では、五条大路と東二坊坊間西小路の交差点より東側において、五条大路 SF27811 を横断する南北溝を３条検出した。五条大路路面上を横断する３条の溝は、切り合い関係や埋土の性質などより、東二坊坊間西小路東側溝 SD27813 の延長線上にあった当初の南北溝 SD27821 を南北溝 SD27816 へ、そして最後に南北溝 SD27815 へと位置を変えて掘り直したものであることが分かった。

南北溝 SD27815 は、幅 1.5 ～ 2.5 ｍで、深さ 0.2 ｍを測る。東側に位置する南北溝 SD27816 は、西肩が南北溝 SD27815 と重複するため全幅を知ることができないが、幅 2.3 ｍ前後と推定され深さ 0.2 ～ 0.3 ｍを測る。西側に位置する南北溝 SD27821 は、幅 0.5 ～ 1.5 ｍ、深さ 0.3 ～ 0.4 ｍであった。いずれの溝底も北側は五条大路北側溝 SD27810 の底面よりやや高い位置にあり、緩やかに南側へ傾斜していた。溝埋土には比較的多くの遺物が含まれており、土師器、須恵器の食膳具の他、祭祀遺物のミニチュアカマドや完形の土師器小皿、そして獣骨が認められた。



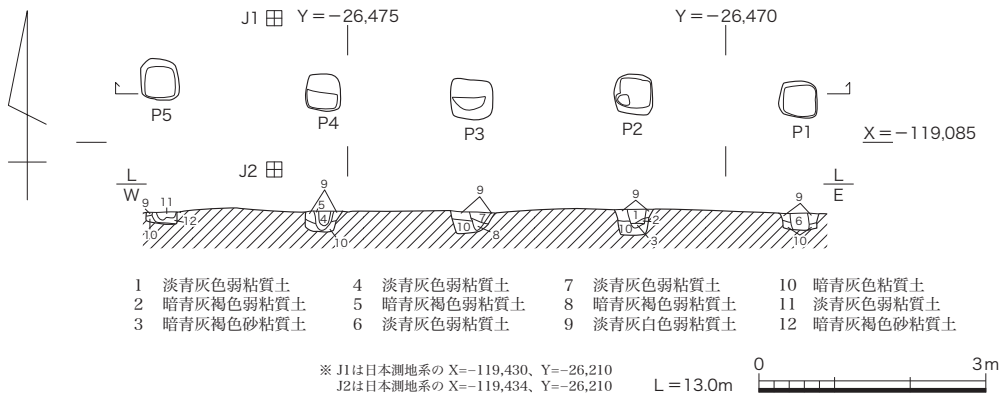
第２−11 図　左京第 278 次調査　溝 SD27815・16・21 実測図（1/100）

とくに、南北溝 SD27815・16 には馬の可能性がある上顎、下顎の骨が見られた。出土状況は散乱状態と言えるものであり、かなり白骨化したのちに二次的に移動した結果とも考えられる。

五条大路を横断する南北溝が、位置変更を行なって敷設されている明快な理由は得られなかった。南北溝 SD27821・27816 埋土上層が新たに溝を掘る前の埋立土であり、いずれの埋土にも砂礫が含まれておらず、洪水などによる南北溝の埋没とするのは困難である。ただ、南北溝 SD27821 から南北溝 SD27816 へ位置変更が行われた契機は、東二坊坊間西小路東側溝の道路側への拡幅であったと推定される。本例の大路を横断する溝は、低湿な左京域の排水を目的としたもので、条坊側溝の渡河などに配慮した敷設とは異なった次元で行われたものと考えられる。

左京五条二坊四町

左京第 235 次調査の五条大路北側溝 SD23550 以北、左京第 278 次調査の五条大路北側溝 SD27810 と東二坊坊間西小路西側溝SD27812に画された範囲が、左京五条二坊四町の南東隅にあたる。この範囲では、左京第 278 次調査地において、溝 SD27817・18 の宅地内溝２条を検出した。



第２−12 図　左京第 235 次調査　柵 SA23551 実測図（1/100）

溝 SD27817（第２−４図）　幅 0.2 m前後で深さ 0.1 m程度の東西溝であり、五条大路北側溝 SD27810 から 4.5 m程度北側にある。

溝 SD27818（第２−４図）　前述の宅地内溝 SD27817 から南へ分岐する溝であり、幅 0.15 m、深さ 0.1 mを測る。

左京五条二坊五町

左京第 278 次調査の五条大路北側溝 SD27810 と東二坊坊間西小路東側溝 SD27813 に画された範囲が、左京五条二坊五町の南西隅にあたる。五町域では、左京第 278 次調査地において柱列１条を検出した。柱列は、一辺 0.4 m程度の小規模な柱掘形がＬ字状に並ぶが、掘立柱建物の一部か宅地縁辺に設けられた柵であるのかを確認することはできなかった。

左京六条二坊一町

左京第 235 次調査の五条大路南側溝 SD23548 以南が、左京六条二坊一町の北辺部にあたる。この範囲では、左京第 235 次調査地において柱列１条と溝１条を検出した。

柵 SA23551（第２−12 図）　柱列は一辺 0.5 mまでの隅円方形を呈する柱掘形を５基検出した。これらは、左京六条二坊一町の北辺を画する遮蔽物であり、五条大路南側溝 SD23548 から約 1.5 mの間隔をおいて設置されている。柱掘形の間隔は 2.1 m前後であり、各柱掘形では直径約 0.2 mの柱当たりを確認した。

溝 SD23553（第２−４図）　五条大路南側溝 SD23548 から南側へ延びる幅 0.15 mの小規模な溝である。前述の柵 SA23551 が溝 SD23553 の手前で途切れることから、溝 SD23553 は左京六条二坊一町の北辺を区画する宅地内溝と考えられる。

出土遺物

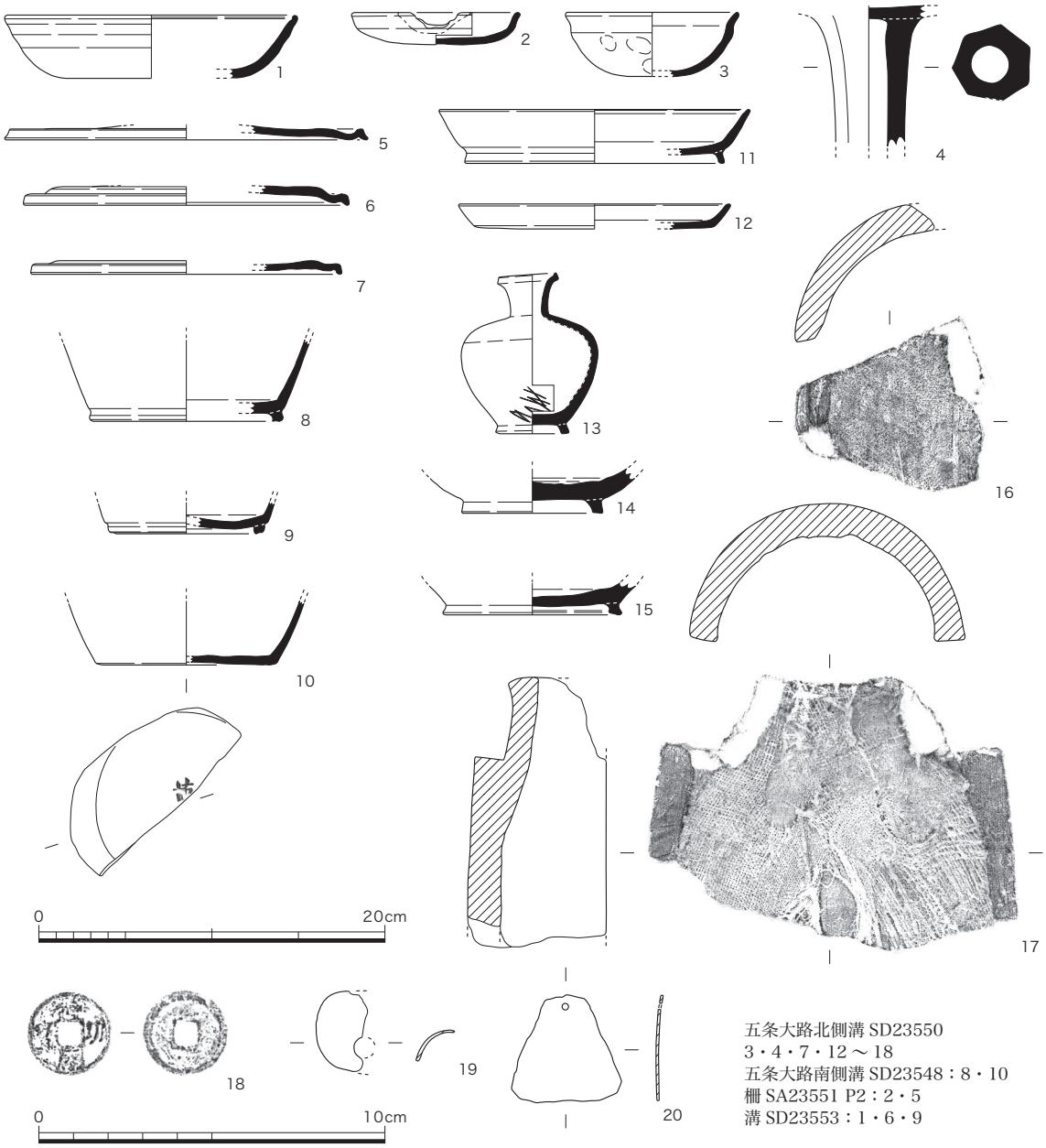
左京第 235・278 次調査では、条坊側溝及び五条大路を南北に横断する溝などから長岡京期の遺物が出土している。しかし、両調査では井戸や土坑など、宅地内の遺構が顕著でなかったため、面積に比べて出土遺物の量は限られていた。なお、出土遺物の詳細については、付表２−１・２の出土遺物観察表などを参照願いたい。

五条大路北側溝 SD23550 出土遺物（第２−13 図３・４・７・12 〜 18）　左京第 235 次調査で検出した五条大路北側溝 SD23550 では、側溝の東半部において土器や瓦類が比較的まとまっ

て出土した。出土遺物には、土師器の杯Ａ、皿Ａ、椀、壺Ｃ（３）、高杯（４）、甕、須恵器の杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋（７）、皿Ａ（12）、壺Ｍ（13）、壺底部（14・15）、丸瓦（16・17）、そして神功開寶（18）がある。須恵器壺Ｍと神功開寶は、遺物がまとまって出土した北側溝の東半部で出土している。

五条大路南側溝 SD23548 出土遺物（第２–13 図８・10）　左京第 235 次調査で検出した五条大路南側溝 SD23548 の出土遺物は北側溝 SD23550 に比べて限られていた。出土遺物には、土師器の椀、高杯、甕、須恵器の杯Ａ（10）・杯Ｂ（８）、杯Ｂ蓋、壺、平瓦がある。

柵 SA23551P2 出土遺物（第２–13 図２・５）　左京第 235 次調査の左京六条二坊八町北辺部で検出した東西方向の柵を構成する柱掘形のうち、東端から２基目の柱掘形Ｐ２からは、土



第２–13 図　左京第 235 次調査出土遺物実測図（1/4・1/2）

付表２–1　左京第 235 次調査出土遺物観察表– 1

種別	器形	番号	法量（cm）			残存率	調整等	遺構 地区
			口径	器高	底径			
土師器	杯 A	1	17.0	3.7	-	全形 1/12	内面：ナデ、外面：上半ナデ・下半ユビオサエ	SD53 南東
	皿 C	2	9.8	1.9	-	ほぼ 完形	口縁部を打ち欠く、煤付着 内面：ナデ、外面：上半ナデ・下半ユビオサエ	SA51 P2
	壺 C	3	10.0	3.7	-	全形 1/4	内面：ナデ、外面：口縁部ナデ・体部ユビオサエのちナデ	SD50 東
	高杯	4	-	(8.1)	-	脚柱 1/3	七面取りの脚柱部、棒芯作り 内面：杯部ナデか、外面：ケズリ	SD50
須恵器	杯 B 蓋	5	21.0	(0.8)	-	全形 1/13	内外面：ナデ、外面：天井部へラキリのちナデ	SA51 P2
		6	18.5	(1.1)	-	全形 1/10	内外面：ナデ、外面：天井部へラキリのちナデ	SD53 南東
		7	18.0	(0.8)	-	全形 1/7	天井部内面に墨痕、硯に転用か 内外面：ナデ、外面：天井部へラキリのちナデ	SD50 西拡張
	杯 B	8	-	(4.7)	11.2	底部 1/4	内外面：ナデ	SD48 D区
		9	-	(1.8)	9.1	底部 1/5	内外面：ナデ、外面：底部へラキリのちナデ	SD53 南東
	杯 A	10	-	(3.7)	10.2	底部 1/3	底部外面に墨書 内外面：ナデ、外面：底部へラキリのちナデ	SD48 B - C区
	皿 B	11	18.0	3.1	15.0	全形 1/12	高さ 0.6cm の貼り付け高台 内外面：ナデ	南断割
	皿 A	12	15.7	1.4	14.0	口縁 1/8	内外面：ナデ、外面：底部へラキリのちナデ	SD50 B区
	壺 M	13	3.5	9.3	4.2	ほぼ 完形	体部外面に線刻 内外面：ナデ、外面：底部へラキリのちナデ	SD50 B区
	壺	14	-	(2.6)	8.2	底部 1/2	底部内面に自然釉 内外面：ナデ、外面：底部へラキリのちナデ	SD50 A - B区
		15	-	(1.8)	10.3	底部 1/4	内外面：ナデ	SD50 B区
瓦	丸瓦	16	幅 (8.0)	長さ (10.1)	厚さ 1.8	-	凸面：ナデ、凹面：布目圧痕、端部：ケズリ	SD50 B区
	丸瓦	17	幅 (16.0)	長さ (15.6)	厚さ 2.0	-	凸面：ナデ、凹面：布目圧痕、端部：ケズリ	SD50 C区
金属製品	神功開寶	18	直径 1.4	-	厚さ 0.2	ほぼ 完形	-	SD50 A区
	鈴	19	幅 (1.5)	長さ (2.3)	厚さ 0.1	1/4	径 0.7cm 程度に復元できる孔	南東断割
	舌か	20	幅 3.2	3.1	厚さ 0.1	完形	台形状、上部に径 0.1cm の円孔、上半がやや反る	南東断割

師器の皿Ｃ（２）と須恵器杯Ｂ蓋（５）などが出土した。このうち、２の皿Ｃはほぼ完全な形を残している。

溝 SD23553 出土遺物（第２–13 図１・６・９）　左京第 235 次調査の左京六条二坊八町北辺部で検出した南北方向の宅地内溝は、条坊側溝に比べて小規模な溝であるが、土師器の杯Ａ（１）、甕、須恵器の杯Ａ、杯Ｂ（９）、杯Ｂ蓋（６）などが出土している。

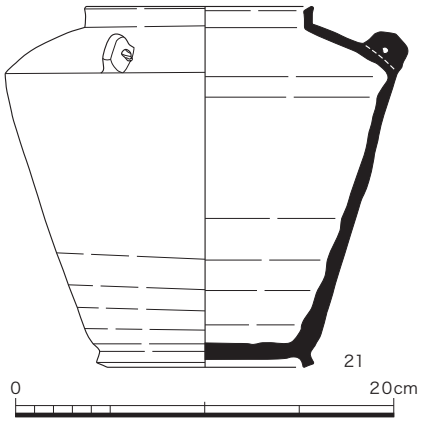
その他の出土遺物（第２–13 図 11・19・20）　左京第 235 次調査の左京六条二坊八町北辺部では、掘り下げや精査、断ち割り作業などによって土師器、須恵器が比較的多く出土した。また、鈴（19）、舌（20）と考えられる金属製品の破片も含まれていた。

五条大路北側溝 SD27810 出土遺物（第２–15 図 22 ～ 39）　左京第 278 次調査で検出した五条大路北側溝SD27810では、橋SX27819を確認した東二坊坊間西小路との交差点より東側で、土器、瓦類の他、木材や獣骨など比較的多くの遺物が出土している。

土師器の杯Ａ、杯Ｂ（22）、皿Ａ（23）、椀Ａ（24）、壺Ｅ（26）、高杯、甕、墨書人面土器（25）が、須恵器では杯Ａ、杯Ｂ（28・29）、杯Ｂ蓋（27）、皿Ａ、壺底部（30・36）、壺Ｌ（31）、壺Ｇ（32・33）、甕（34・35）などが見られた。瓦類には、平瓦（37・38）、丸瓦（39）がある。

五条大路路面上の南北溝出土遺物（第２–16 図）　左京第 278 次調査では、五条大路と東二坊坊間西小路の交差点より東側において、五条大路 SF27811 を横断する南北溝を３条検出した。いずれの溝からも、土器、瓦類の他、獣骨など比較的多くの遺物が出土しているが、遺物の量は当初の五条大路を横断する南北溝 SD27821 が最も多く、位置を変えて付け替えられた南北溝 SD27816、南北溝 SD27815 の順に少なくなる。

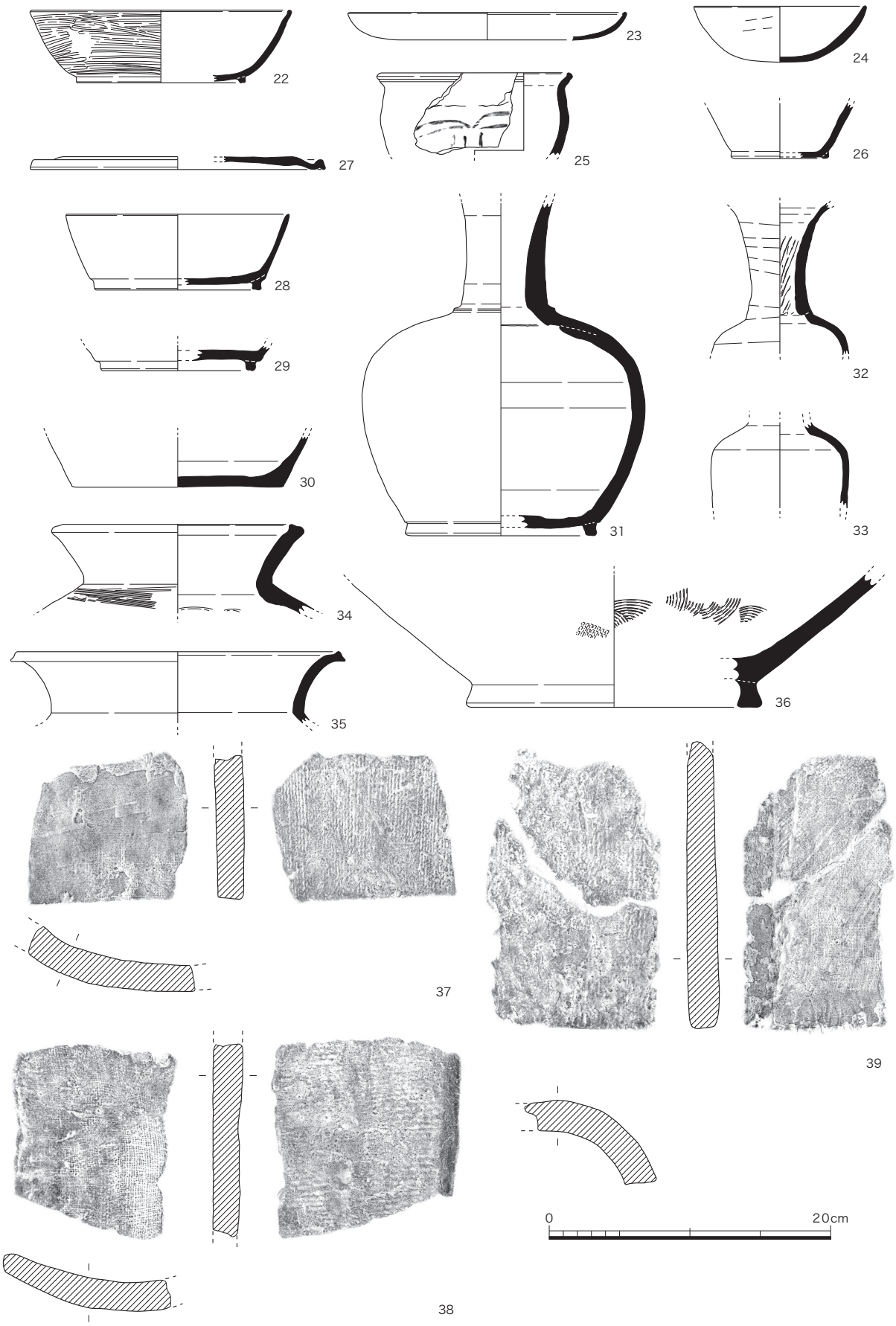
五条大路路面上の南北溝 SD27821 出土遺物（第２–14 図、第２–16 図 40 ～ 50）　土師器の杯、皿Ａ（43）皿Ｂ（44）、皿Ｃ（40 ～ 42）、椀、甕、土製品のミニチュアカマド（46）が、須恵器では杯Ｂ、杯Ｂ蓋、壺Ｂ（21）、壺Ｍ（47 ～ 49）、壺底部、甕（34･35）などが見られた。瓦類には、平瓦（50）、丸瓦がある。41・42 の土師器皿Ｃは完形品であり、土師器皿Ｃ（40）、須恵器壺Ｍ（47・48）も完全な形に近い。ミニチュアカマドや獣骨の存在と相まって祭祀的な意図が看取される遺物群と考えられる。とくに 40 ～ 42 の土師器皿Ｃは、五条大路の南北中央部付近に据え置かれるように口縁部を上にして出土している。



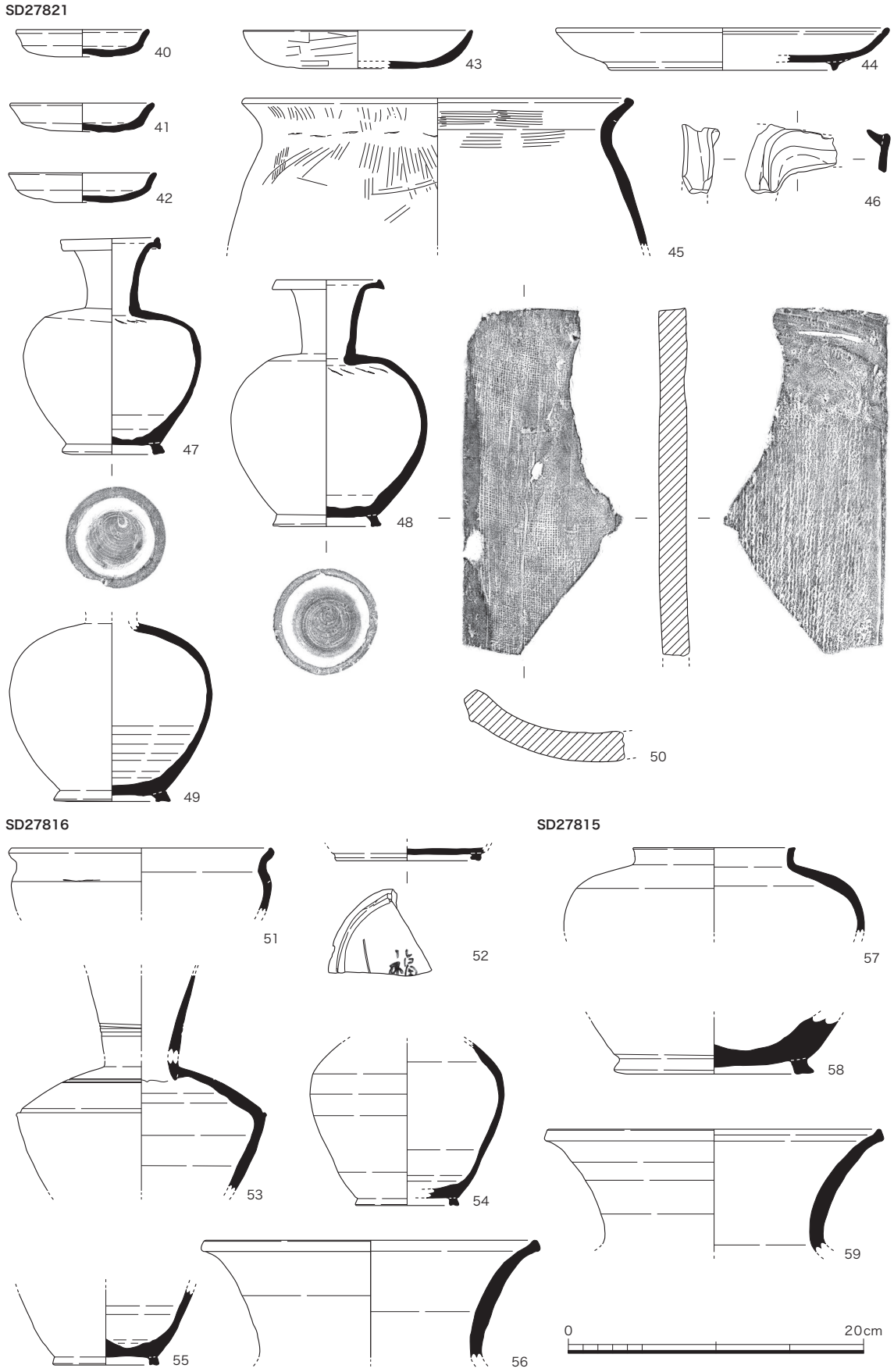
第２–14 図　左京第 278 次調査出土遺物実測図– 1（1/4）

五条大路路面上の南北溝 SD27816 出土遺物（第２–16 図 51 ～ 56）　土師器の杯、椀、甕（51）、須恵器の杯Ｂ（52）、杯Ｂ蓋、壺Ｋ（53）、壺底部（54･55）、甕（56）、平瓦、獣骨などがある。

五条大路路面上の南北溝 SD27815 出土遺物（第２–16 図 57 ～ 59）　五条大路を横断する南北溝３条のうち、最も新しい時期のものである。他に比べて出土遺物の量はやや限られていたが、獣骨には下顎など比較的大きな



第 2 –15 図　左京第 278 次調査出土遺物実測図– 2 （1/4）



第 2 –16 図　左京第 278 次調査出土遺物実測図– 3 （1/4）

付表２–２　左京第 278 次調査出土遺物観察表

種別	器形	番号	法量（cm）			残存率	調整等	遺構 地区
			口径	器高	底径			
須恵器	壺Ｂ	21	12.7 体部 21.3	19.1	11.5	ほぼ 完形	肩部に３方向の鈕、肩部外面に自然釉 内面：ナデ、外面：ナデ・肩部未調整・体部下半ナデのちケズリ	SD21 Ｃ区
土師器	杯Ｂ	22	9.8	1.9	-	ほぼ 完形	内面：調整不明、外面：口縁部ミガキ・高台～底部ナデ	SD10　Ｅ区
	皿Ａ	23	19.8	2.0	-	全形 1/7	内外面：調整不明	SD10　Ｈ区南
	椀Ａ	24	12.2	4.0	-	完形	内面：調整不明、外面：ヘラケズリか	SD10　Ｅ区
	壺Ｂ （墨書人面土器）	25	13.9	(5.8)	-	上半部 1/8	体部外面に墨書人面 内面：調整不明、外面：ナデ	SD10　Ｂ区
	壺Ｅ	26	-	(4.0)	7.0	下半部 1/6	内外面：調整不明	SD10　Ｆ区
須恵器	杯Ｂ蓋	27	21.0	(0.9)	-	全形 1/5	内外面：ナデ	SD10 Ｃ区
	杯Ｂ	28	15.8	5.4	11.9	全形 1/3	内外面：ナデ、外面：底部ヘラキリのちナデ	SD10　Ｆ区
		29	-	(1.8)	11.0	底部 1/3	内外面：ナデ、外面：底部ヘラキリのちナデ	SD10　Ｆ区
	壺	30	-	(3.6)	15.0	底部 3/5	内面：ナデ、外面：体部ヘラケズリ・底部ヘラキリ	SD10 Ｆ区
	壺Ｌ	31	-	(23.6)	13.6	全形 3/5	肩部外面に自然釉 内外面：ナデ、外面：体部下半ケズリ・底部ヘラキリのちナデ	SD10 Ｃ区・Ｆ区
	壺Ｇ	32	-	(10.7)	-	頸部 9/10	頸部内面に絞り痕跡 内外面：ナデ	SD10　Ｆ区
	壺Ｇ	33	-	(6.1)	-	肩部 1/8	内外面：ナデ	SD10　Ｅ区
	甕	34	18.0	(6.4)	-	口頸部 1/3	内外面:ナデ、内面:体部同心円当て具痕、外面：体部カキメ	SD10
		35	23.8	(5.1)	-	口頸部 1/3	内外面：ナデ	SD10　Ｉ区
	壺	36	-	(9.4)	21.0	底部 1/12	内面:体部同心円当て具痕のちナデ、外面:体部格子タタキ・高台ナデ	SD10 Ｈ区
瓦	平瓦	37	幅 (12.0)	長さ (10.2)	厚さ 2.0	1/4	凸面:縄目タタキ、凹面:布目圧痕、端部:ケズリ	SD10　Ｆ区
		38	幅 (11.9)	長さ (13.7)	厚さ 2.1	1/4	凸面:縄目タタキ、凹面:布目圧痕、端部:ケズリ	SD10　Ｇ区
	丸瓦	39	幅 (9.4)	長さ (20.4)	厚さ 2.2	1/3	凸面:縄目タタキ、凹面:布目圧痕、端部:ケズリ	SD10　Ｇ区
土師器	皿Ｃ	40	9.0	1.9	-	全形 2/3	内外面：ナデ、外面：底部未調整	SD21
		41	9.8	2.0	-	完形	内外面：ナデ、外面：底部未調整	SD21
		42	10.0	2.0	-	完形	内外面：ナデ、外面：底部未調整	SD21
	皿Ａ	43	15.6	(2.6)	-	全形 1/2	内面：ナデ、外面：ヘラケズリ	SD21
	皿Ｂ	44	22.6	2.8	15.6	全形 1/10	内外面：ナデ	SD21 Ｄ区

種別	器形	番号	法量（cm）			残存率	調整等	遺構 地区
			口径	器高	底径			
土師器	甕	45	26.5	(10.0)	-	口縁部 4/5	内外面：ハケ・端部ナデ、外面：体部ハケのちナデ	SD21 C 区
土製品	ミニチュアカマド	46	(6.2)	(4.7)	-	全形 2/5	内外面：ナデ、部分的に指頭圧痕	SD21 B 区
須恵器	壺 M	47	6.7	14.7	6.9	全形 9/10	内外面：ナデ、内面：頸部絞り痕跡、外面：底部糸切りのちナデ	SD21 C 区
		48	7.4	16.7	7.3	全形 9/10	内外面：ナデ、内面：頸部絞り痕跡、外面：底部糸切りのちナデ	SD21 B・C・B–C 区
		49	-	(12.1)	7.9	全形 3/5	内外面：ナデ、外面：底部ヘラキリのちナデ	SD21 B・C・B–C 区
瓦	平瓦	50	幅 (10.9)	長さ (23.6)	厚さ 1.8	-	凸面：縄目タタキ、凹面：布目圧痕、端部：ケズリ	SD21 B 区
土師器	甕	51	17.8	(4.3)	-	口縁部 1/12	内外面：ナデ、外面：肩部に接合痕	SD16 F 区 最下層
須恵器	杯 B	52	-	(0.9)	10.0	底部 1/6	底部外面に「福」墨書・線刻 内外面：ナデ	SD16 F 区
	壺 K	53	-	(14.1)	-	全形 2/5	頸部と肩部の外面に２条の沈線 内外面：ナデ	SD16 B・C 区
	壺	54	-	(11.0)	7.0	体部 1/6	内外面：ナデ、外面：底部ヘラキリのちナデ	SD16 F 区
		55	-	(5.1)	7.2	底部 1/2	内外面：ナデ、外面：底部ヘラキリのちナデ	SD16 F 区
	甕	56	22.6	(7.9)	-	口縁部 1/6	内外面：ナデ	SD16
	壺 A	57	11.0	(5.7)	-	口縁部 1/4	内外面：ナデ	SD15
	壺	58	-	(3.9)	13.5	底部 1/2	底部内面に自然釉、内外面：ナデ、外面：底部ヘラキリのちナデ	SD15 C 区
	甕	59	22.6	(8.3)	-	口縁部 1/6	内外面：ナデ	SD15

まとまりが認められた。土師器の椀、甕、須恵器の壺 A（57）、壺底部（58）、甕（59）、平瓦、獣骨などがある。

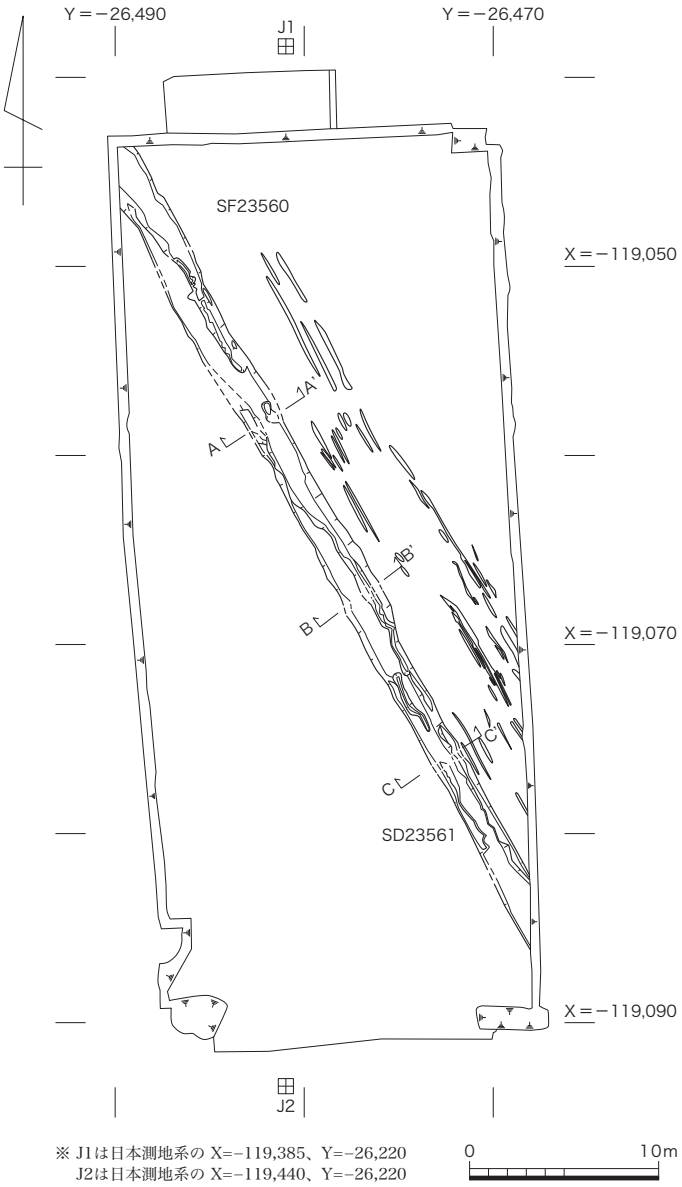
その他の遺構　左京第 278 次調査では、上記の他に東二坊坊間西小路の東西両側溝、左京五条二坊五町の宅地内溝、左京五条二坊十二町の柱列を検出している。しかし、これらの遺構では土師器、須恵器の破片が出土しただけで、図示可能な遺物は限られていた。

付載：左京第 235 次調査検出の奈良時代神田古道

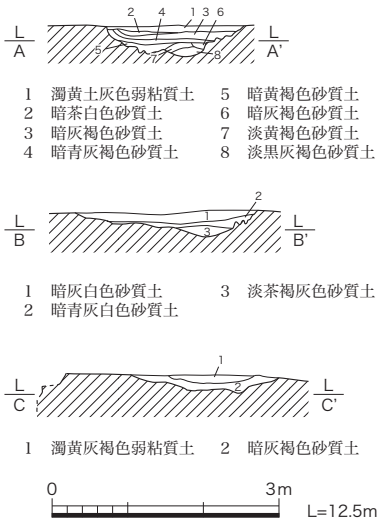
左京第 235 次調査では、長岡京期の五条大路南北両側溝に重複して、より古い段階の斜行溝 SD23561 と轍跡からなる古道 SF23560 を検出した（第２–17 図）。古道 SF23560 は、西側に幅２m前後で、深さ 0.4 ～ 0.6 mの側溝 SD23561 が設けられている。側溝は、北北西から南南東に斜行しており、その方位は北で 29°西へ振る。側溝は比較的平坦な底部形状であるが、広い範囲で砂や小粒礫を埋土とする足跡状の窪みが認められた（第２–18 図）。なお、古道 SF23560 の東側には側溝が存在しない。路面上には側溝と方位を同じくする数十条の轍跡が残されており、古道を荷車が往来していたものと考えられる。古道 SF23560 の幅員は、側溝

SD23561 の西肩から轍跡の東側までで約 6 mを測る。

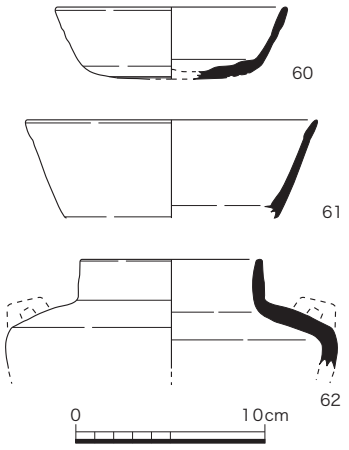
当地の南東約 50 mにあたる左京第 116 次調査では、北で 30°西へ振る方位の古道 SF11604 が確認されている。左京第 235 次調査で確認された古道 SF23560 は、ほとんど同じ方位を示す



第 2 −17 図　左京第 235 次調査　奈良時代検出遺構図（1/400）



第 2 −18 図　左京第 235 次調査
溝 SD23561 土層図（1/100）



第 2 −19 図　左京第 235 次調査
溝 SD23561 出土遺物実測図（1/4）

付表 2 − 3　左京第 235 次調査出土遺物観察表− 2

種別	器形	番号	法量（cm）			残存率	調整等	遺構 地区
			口径	器高	底径			
須恵器	杯A	60	12	3.8	8.8	全形 1/2	内外面：ナデ、外面：底部ヘラキリ	SD61 C 区上層
	杯	61	15.5	(5.2)	-	全形 1/4	内外面：ナデ	SD61 A区
	短頸壺	62	17.5	(5.8)	-	全形 1/10	肩部に鈕の剥離痕 内外面：ナデ	SD61 B区

ことから、古道 SF11604 の北延長部に当たるものと考えられる。左京第 116 次調査の古道 SF11604 に関連する遺物は少ない。しかし、本調査では、長岡京期の五条大路南北両側溝との遺構の切り合い関係や出土遺物などから、古道 SF23560 が奈良時代の遺構であることがわかった。古道 SF23560 の側溝 SD23561 にはほとんど遺物は含まれていなかったが、僅かに奈良時代後半期の特徴を有する須恵器の杯Ａ（60）や、杯（61）、壺（62）などが出土している。

ま と め

長岡京跡左京第 235・278 次調査では、五条大路の南北両側溝と東二坊坊間西小路の東西両側溝などを検出し、長岡京跡の条坊復原に資する成果が得られた。とくに、左京第 278 次調査では、五条大路と東二坊坊間西小路の交差点北半部を確認することができ、大路と小路の状況を検討するための重要な資料が得られた。

左京第 278 次調査で確認した五条大路と東二坊坊間西小路の交差点では、五条大路北側溝が東西に途切れることなく敷設されているのに対し、東二坊坊間西小路は西側溝が五条大路北側溝より南には続いていなかった。しかし、東二坊坊間西小路の東側溝では、当初、五条大路の路面を横断して南へ続いていた南北溝 SD27821 が、何らかの理由で埋没ないし埋め立てられ、その後により東側へ位置を替えて敷設されている状況が明らかとなった（南北溝 SD27815・16）。本来、大路の通行が優先されるため大路を横断する小路側溝は敷設されないものと考えられるが、左京域の排水に考慮してより低い東側溝だけを横断させたものと考えられる。同様な例は、左京第 125 次調査の東一坊大路と五条条間小路の交差点などで確認されている。

左京第 278 次調査では、東二坊坊間西小路から五条大路へ往来するため、五条大路の北側溝 SD27810 に架けられた橋 SX27819 が検出されている。先述の五条大路を横断する南北溝 SD27815･16･21 についても、３時期の溝それぞれに簡易な橋が架けられたものと考えられるが、その範囲や構造を示す痕跡は残されていなかった。また、橋 SX27819 や五条大路を横断する南北溝からは獣骨が出土している。類例の増加を待たなければならないが、或いは道路周辺における祭祀的な行為を示すものとも考えられる。

左京第 235 次調査では、長岡京期直前の奈良時代後半期に敷設された神田古道の一部を検出することができた。神田古道は左京第 116 次調査で初めて存在が確認された古道である。今後、検出例が増加することによって、奈良時代後半期ないし長岡京造営に至る時期の乙訓地域における物資搬送路がより明らかになることが期待される。

（中島　皆夫）

第 2 –20 図　左京第 235 次調査　長岡京期全景（北から）

第 2 –21 図　左京第 235 次調査　長岡京期全景（南東から）

第 2 –22 図　左京第 235 次調査　五条大路北側溝 SD23550（北西から）

第 2 –23 図　左京第 235 次調査　五条大路北側溝 SD23550 遺物出土状況（北から）

第 2 –24 図　左京第 235 次調査　五条大路南側溝 SD23548（北西から）

第 2 –25 図　左京第 235 次調査　五条大路南側溝 SD23548（西から）

第 2 –26 図　左京第 278 次調査　長岡京期全景（北から）

第 2 –27 図　左京第 278 次調査　長岡京期全景（南東から）

第 2 –28 図　左京第 278 次調査　五条大路北側溝 SD27810 の橋 SX27819（南東から）

第 2 –29 図　左京第 278 次調査　五条大路北側溝 SD27810 の橋 SX27819（東から）

第 2 –30 図　左京第 278 次調査　橋 SX27819 の木材・凝灰岩出土状況（南西から）

第 2 –31 図　左京第 278 次調査　橋 SX27819 の木材・凝灰岩出土状況（西から）

第 2 –32 図　左京第 278 次調査　東二坊坊間西小路 SF27814 と東西両側溝（北から）

第 2 –33 図　左京第 278 次調査　東二坊坊間西小路東側溝 SD27813（北から）

第 2 –34 図　左京第 278 次調査　東二坊坊間西小路西側溝 SD27812（北から）

第 2 –35 図　左京第 278 次調査　五条大路路面上の南北溝 SD27815・16（北東から）

第 2 –36 図　左京第 278 次調査　五条大路路面上の南北溝 SD27815・16（北から）

第 2 –37 図　左京第 278 次調査　五条大路路面上の南北溝 SD27815（南から）

第２–38 図　左京第 278 次調査　五条大路路面上の南北溝 SD27816 獣骨出土状況（北から）

第２–39 図　左京第 278 次調査　五条大路路面上の南北溝 SD27815 獣骨出土状況（北から）

第２–40 図　左京第 278 次調査　五条大路路面上の南北溝 SD27821（北から）

第 2–41 図　左京第 235 次調査　奈良時代神田古道 SF23560（北西から）

第 2–42 図　左京第 235 次調査　奈良時代神田古道側溝 SD23561（北西から）

3．長岡京跡右京第548次調査

～ 長岡京期　条坊側溝、江戸時代　徳勝寺関連出土資料 ～

調 査 地　長岡京市東神足二丁目36−1、36−2、37−12　　**地 区 名**　7ANMKI−4地区

調査期間　1996（平成8）年10月24日～12月26日　　**調査面積**　317㎡

出土遺物　39箱

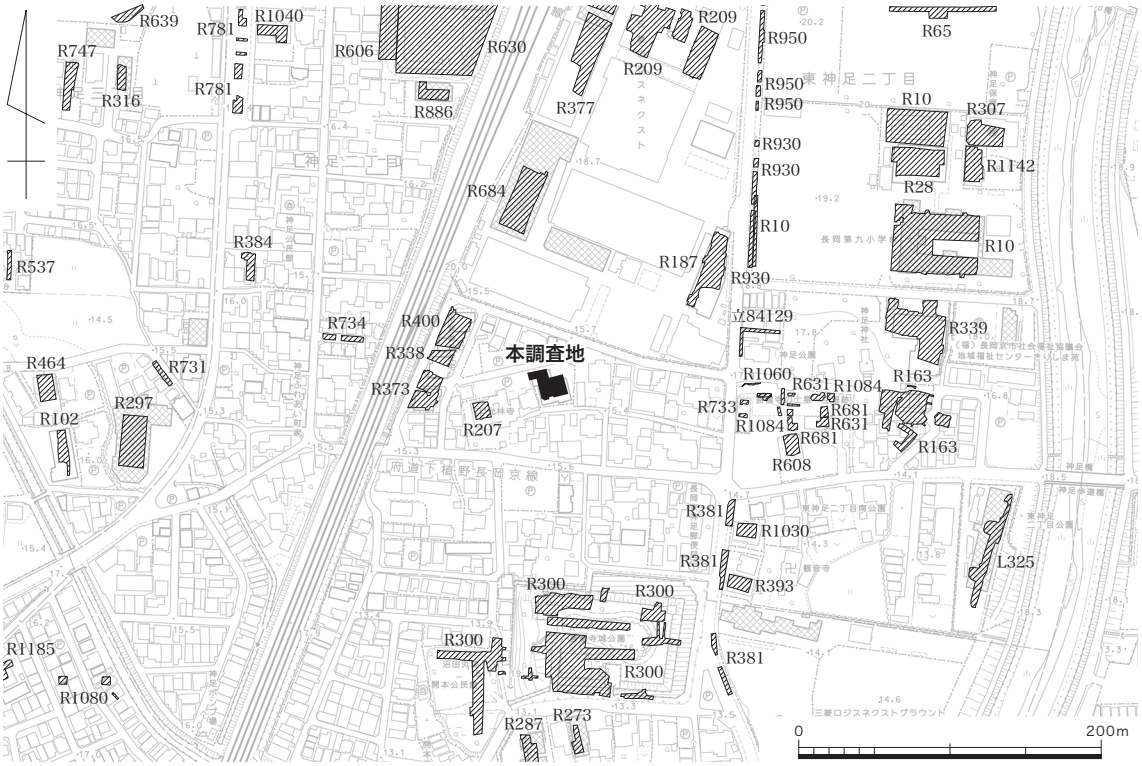
立　　地　低位段丘Ⅰ　　標高15.7 m

参考文献　「右京第548次調査略報」『長岡京市センター年報』平成8年度　1998年

「右京第548次調査概要 」『長岡京市センター報告書』第9集　1997年

調査の概要

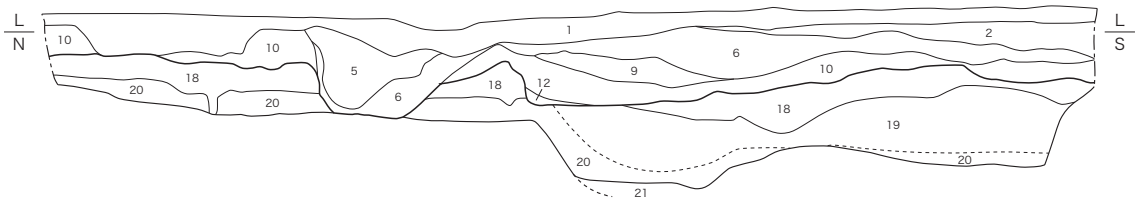
本調査地は長岡京市営住宅の建設に伴って実施したものである。場所はJR長岡京駅の南約300 mの住宅地内にあり、これまでに市営住宅建て替えに関連した調査としては本調査地の西側で右京第338次(注1)・第373次(2)・第400次(3)の3次の調査が行われている。これらの調査では弥生時代中期の方形周溝墓群と土器棺が見つかり、弥生時代神足遺跡の方形周溝墓群の南限が判明している。また、長岡京期の遺構では、七条条間北小路の南側溝と右京七条一坊十町内の掘立柱建物、柵列が検出されている。七条条間北小路南側溝からは土器類とともに多くの炭や大形の鞴の羽口片、鉄製の車軸受け金具が出土していて、十町内周辺に工房の存在が推定された。このほか勝龍寺城に関連するものとして、直角に折れ曲がる堀の跡が検出され、北西部防御施設の状況が明らかとなっている。また、上記の市営住宅関連の調査とは別に、当調査地の西隣にある光林寺の本



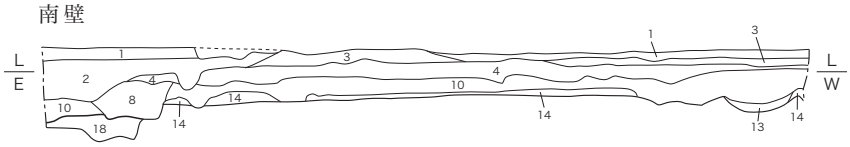
第3−1図　発掘調査地位置図（1/5000）

第1トレンチ

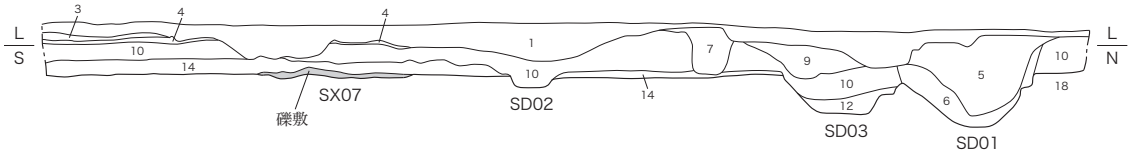
東壁



南壁

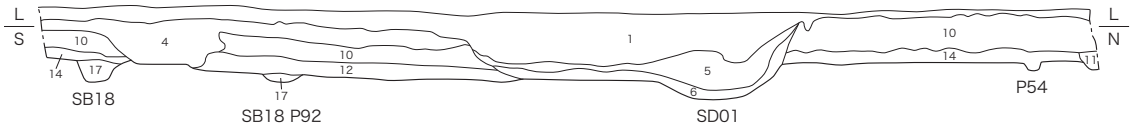


西壁



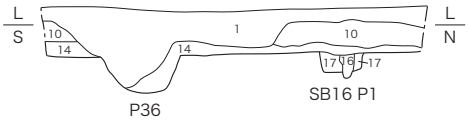
第2トレンチ

西壁

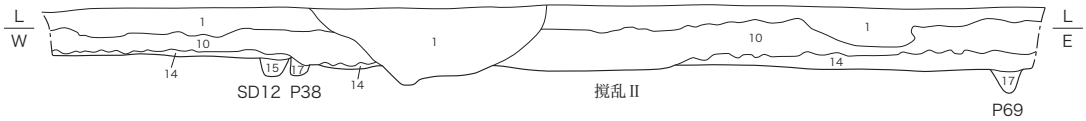


張り出し部 南壁

張り出し部 西壁



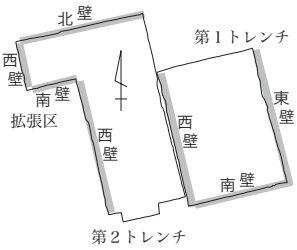
北壁



1　整地土1（徳祥寺解体埋め戻し層）
2　整地土2（解体以前の借屋時の整地土）
3　整地土3（黒灰色砂質土）
4　黄色粘質土（徳祥寺土間タタキ）
5　黄褐色礫（現代）
6　暗茶灰色砂質土（明治時代か）　} SD01
7　茶褐色礫と暗灰褐色砂質土の瓦層
8　暗灰褐色粘質土　} 徳祥寺の施設か
9　黒褐色粘質土
10　暗灰褐色砂質土（江戸時代包含層）
11　暗黄灰色砂質土（中世遺構埋土）
12　暗褐色砂質土（SD03下層）
13　暗黄褐色粘質土（長岡京期SD10埋土）
14　黒灰色土＋暗褐色土
15　暗茶褐色粘質土
16　暗茶褐色礫混じり土
17　黒褐色礫混じり粘質土
18　黒色粘質土（遺構面ベース）
19　暗灰色土混じり礫　} 土石流か
20　暗黄褐色土混じり礫　} 土石流か　} 無遺物
21　黄灰色砂質土

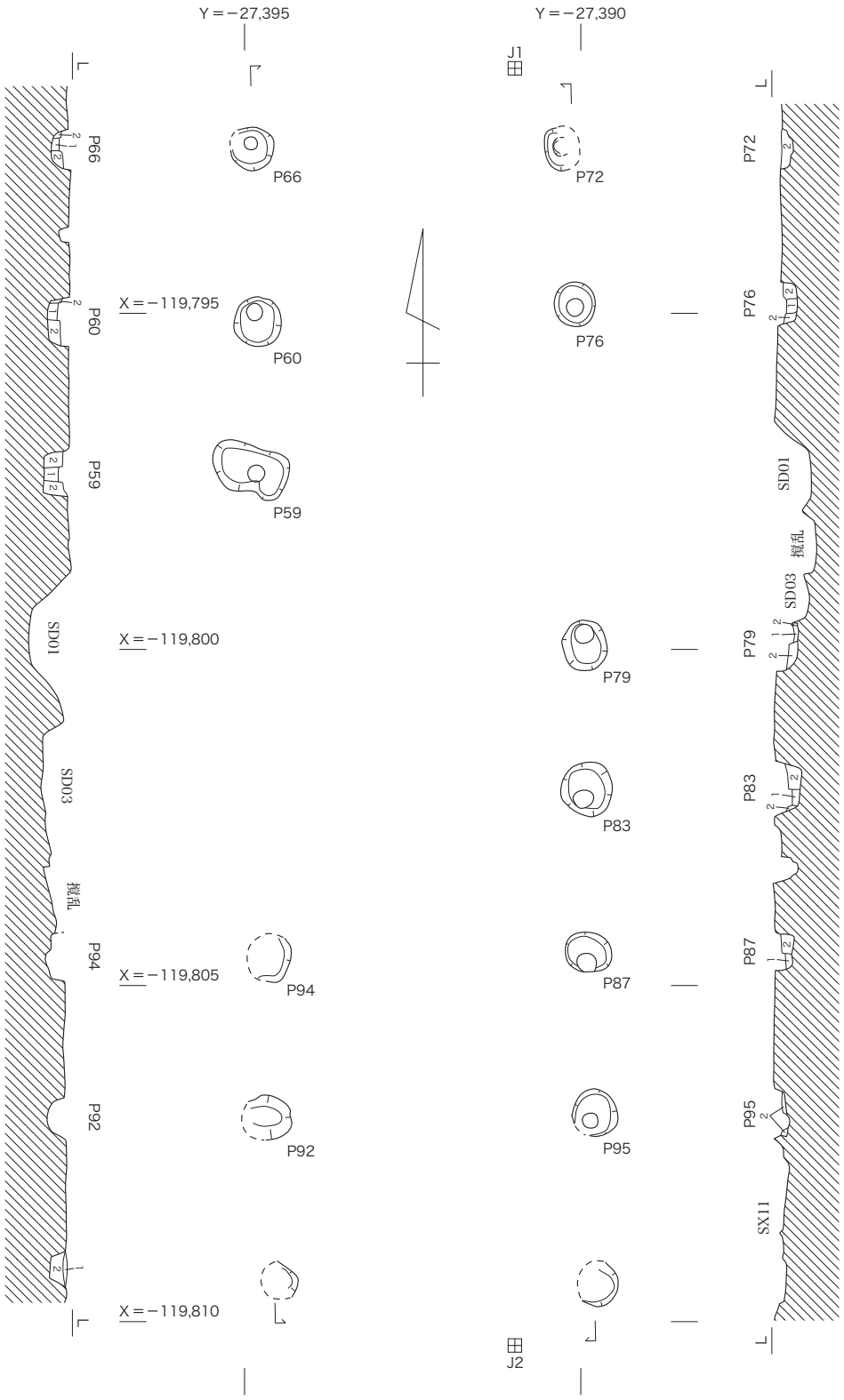
L＝15.4m

0　5m



第3－2図　調査区土層図（1/100）

第3－3図　調査区検出遺構図（1/150）



第３－４図　掘立柱建物柱 SB18 実測図（1/100）

堂建て替えに伴って行われた右京第207次調査[4]では、江戸時代光林寺に関する遺構・遺物が多数検出されている。今回の調査地には、この光林寺の歴代住職の隠居寺である徳勝寺が明治時代まで存在していたが、明治6年（1873）に廃寺となり、その後しばらく神足村の会所として利用されていた。以上のことから弥生時代から明治期にかけての遺構・遺物の検出が予想された。

検出遺構

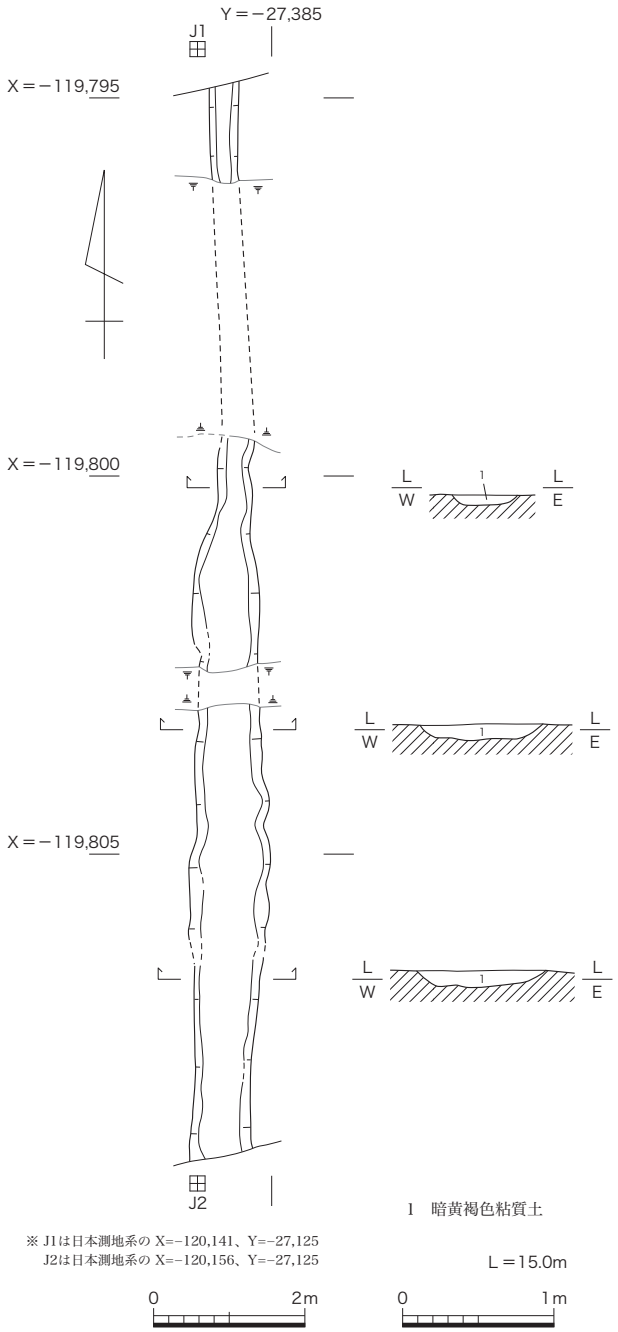
調査は土置き場の関係から、東西（第1・2トレンチ）に分けて行った。基本層序は以前の建物の解体・整地土（第1～3層）を除くと、徳勝寺関連の堆積層（第4～8層）及び江戸時代の遺物を含む竹藪客土（第10層）、長岡京期～平安時代の遺物を含む第14層があり、地表下0.5～0.8 mで遺構面となる。遺構面での標高は約15.0 m、調査区の中心国土座標はX＝−119,800、Y＝−27,390である。

検出された遺構は近・現代、江戸時代、鎌倉時代、平安時代、長岡京期のものがあり、弥生時代の遺構の広がりは確認できなかった。ここでは江戸時代、平安時代、長岡京期の遺構に関して述べる。他の時期の遺構については概報を参照いただきたい。

（1）江戸時代の遺構

溝SD03（第3−3・20・21図）

調査地中央付近で検出された大きく北側に湾曲する溝で、幅1.5～2.0 m、深さ0.7～0.9 mである。この溝は当地に存在した徳勝寺の北を限る溝とみられ、明治時代の絵図にも描かれている。埋土は基本的に3層（第9・10・12層）で北側は近現代の遺物を含む同じ形状の溝SD01に切られている。第9・10層からは大量の瓦や土師器皿が出土しており、この時期に何らかの改修が行われた可能性がある。溝SD01との関連から見れば、北側に寺域が拡張されたとも考えられる。



第3−5図　西一坊坊間大路西側溝SD10実測図
（1/100・1/50）

（2）平安時代の遺構

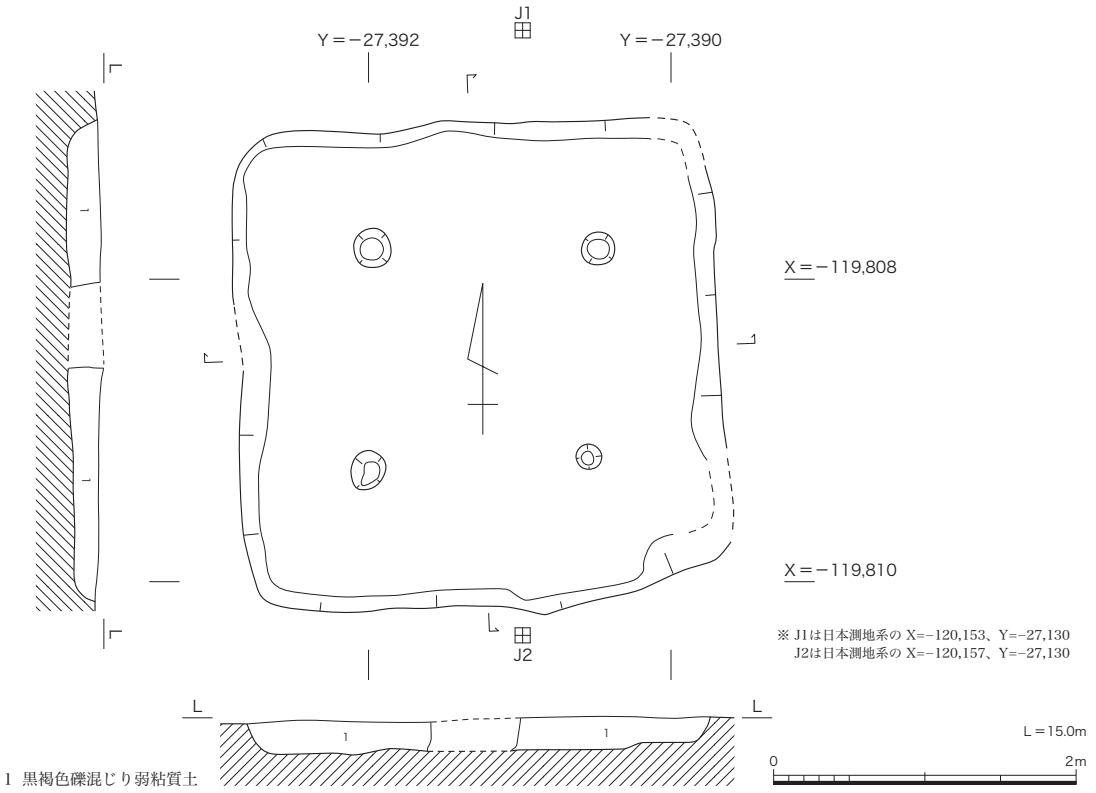
石敷遺構 SX06・07（第3－3・20・22図）　第1トレンチ西辺で検出された南北方向の石敷遺構で、本来は一連のものとみられる。幅0.8 mで直径5 cm前後の小石を敷き詰めている。中央部はわずかに窪んでおり、掘立柱建物SB18の雨落ち溝と考えられる。石敷内からは平安時代の土器片、丸瓦片などが出土している。

溝 SD12（第3－3・24図）　第2トレンチ西側拡張区で検出された南北方向の溝。南側では幅0.7 m、深さ0.3 m、北側では幅0.4 m、深さ0.2 mで中央部ではさらに一段深くなる。長岡京期とみられる掘立柱建物SB16を切っていることから平安時代の遺構と判断した。

掘立柱建物 SB18（第3－4図）　第2トレンチ全面で検出された南北方向の細長い建物である。調査地内では7間分を検出しているがさらに南北に延びている。柱掘形は直径約0.7 m前後の不整円形～隅円方形で、深さは0.2～0.5 m、直径約0.2 mの柱痕を残す。柱間は南北が2.4 m、東西は4.8 mで8尺等間とみられる。調査地内では棟持柱は検出されていないことから、少なくとも南北9間以上となる。このうち東側柱列の南側2基の柱穴は長岡京期の竪穴建物状遺構SX11を切っている。

（3）長岡京期の遺構

溝 SD10（第3－5・22図）　第1トレンチ西側で検出された南北方向の溝である。検出された位置から西一坊坊間大路西側溝に相当する。北側は江戸時代と近世の溝に切られているが、北側が細く、南側が広くなっている。北側の幅は0.4 m、南側では幅0.8～1.0 m、深さは南北と



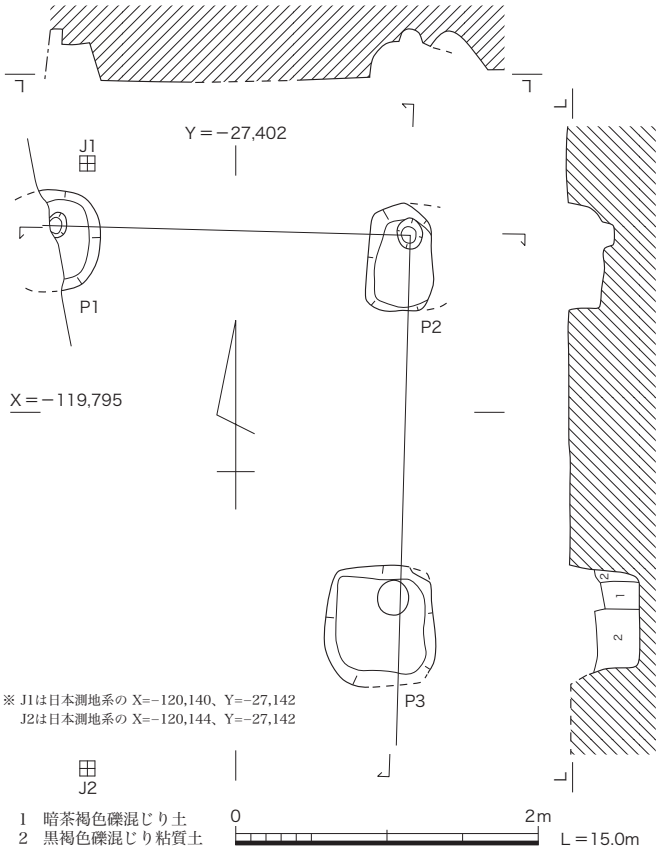
第3－6図　竪穴建物状遺構SX11実測図（1/50）

もに 0.1 mである。埋土は暗黄褐色土 1 層で、遺物は土師器・須恵器の食器類が少量出土している。側溝の中心座標は北側が X=−119,794.81、Y=−27,385.62、南側で X=−119,808.95、Y=−27,385.66、底部の標高はどちらも 14.9 mである。当調査地の北側 200 mで行われた右京第 377 次調査[(5)]で検出された西一坊坊間大路東側溝の中心座標は Y=−27,363.41（日本側地系 Y=−27,102.4）であり、溝 SD10 との溝心の距離は 22.21 ～ 22.25 mとなる。側溝の振れや距離を考えると概ね大路規模の 24 mに相当するものといえる（第 3 −17 図）。

竪穴建物状遺構 SX11（第 3 − 6・25 図）　第 2 トレンチ南辺で検出された一辺 3.1 ～ 3.2 m、深さ 0.2 mの竪穴建物状の遺構である。内部には直径 0.2 ～ 0.25 mの柱穴が 4 基あり、柱間は 1.4 ～ 1.5 mである。各辺はほぼ正方位に揃えられ、周壁溝は認められない。埋土は 1 層で、長岡京期の土師器、須恵器の小片のほか坩堝の破片と炭・焼土が出土している。冒頭でも述べた如く、同じ右京七条一坊十町内の右京第 400 次調査では大形の鞴の羽口片、鉄製の車軸受け金具が出土しており、SX11 も工房的性格を有するものと考えられる。長岡京内各所では同様の竪穴建物状遺構の検出例が増加しているが、ほとんどのものが炭や焼土、炉壁、鞴の羽口などが出土しており、いずれも工房的性格が指摘される点で共通している。

掘立柱建物 SB16（第 3 − 7・24 図）第 2 トレンチ西側拡張区で検出された平面隅円方形の掘形を持つ 3 基の柱掘形である。部分的な検出であるが、建物の北東隅と推定した。最も良好な P3 は一辺 0.7 ～ 0.8 m、深さ 0.5 mで、直径 0.2 mの柱痕が残る。柱間は東西、南北ともに 2.4 mである。方位と掘形の形態から長岡京期と考えられるものである。

（木村　泰彦）

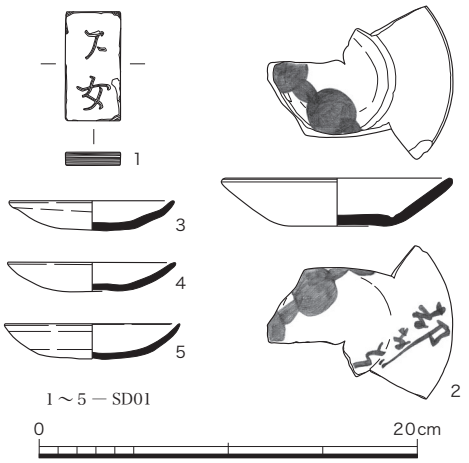


第 3 − 7 図　掘立柱建物 SB16 実測図（1/50）

出土遺物

本地点は、長岡京跡右京七条一坊十町と西一坊坊間大路、および神足遺跡と勝龍寺城跡の 3 遺跡が重なるところであり、各時代の遺構と遺物が密に検出される市内でも屈指の複合遺跡である。さらに当地は、明治初年に廃寺となった徳勝寺跡に位置することから、古代から近代に至る多彩な遺物と遺構が確認されるものと予想された。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦器、国産陶磁器、瓦、土製品、石製品、木製品、金属製品などがある。

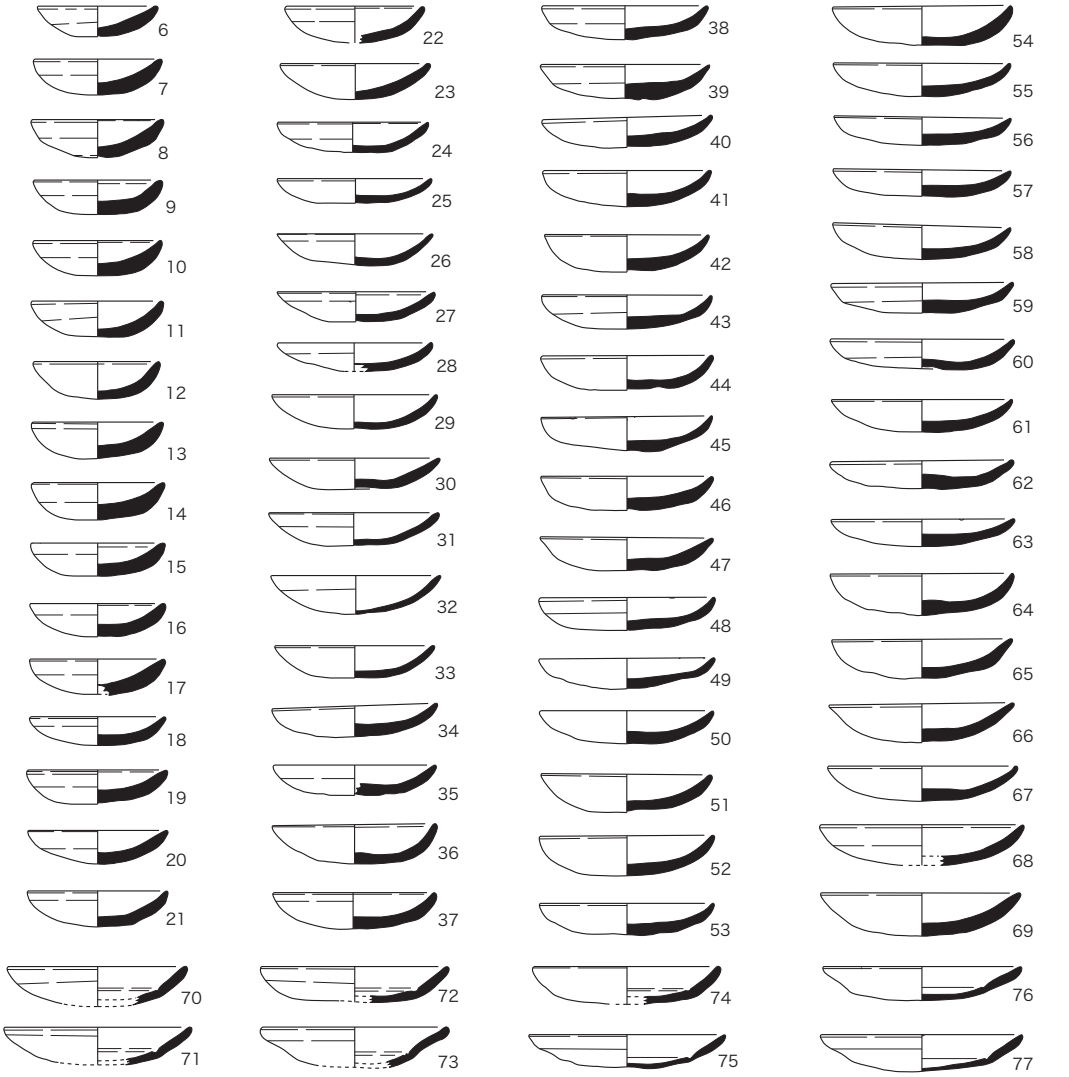


第３–８図　近代の出土遺物実測図（1/4）

［近代の遺物］

溝SD01から出土した（第3–8図）。

下女の札　1は、表に細い刃物で「下女」と線彫りされており、材の表裏はコーティングしたように平滑である。材質は、当初木材と考えていたが、後に電子顕微鏡で観察したところ、繊維状の物質に接着剤を混ぜて板状に圧縮し固めた植物由来の工業製品であることが判明した。同種の製品には、ベークライト[(6)]が有名であるが、鑑定は行っていない。おそらく商家や寺院などに雇われた使用人の管理等に使われた札と思われる。現在では、



第３－９図　江戸時代の出土遺物実測図–土師器（1/4）

「下女」や「下男」は過去の時代に使われた古語となっている。大きさは、長さ5.6cm、幅2.9cm、厚さ0.7cmの長方形で、重さは見た目以上に軽く8.18ｇ。

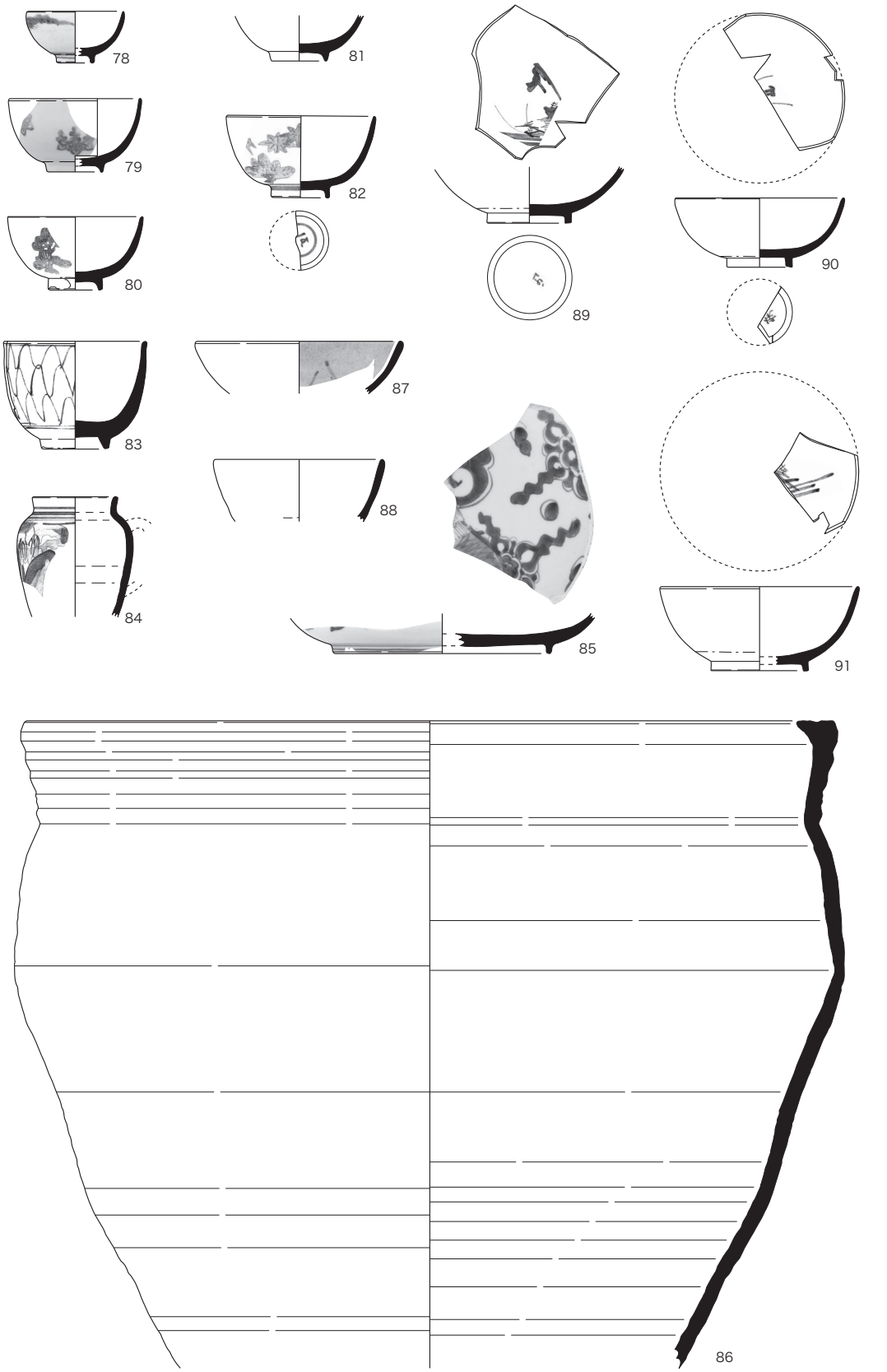
土師器　皿（２～５）。２は、内面から外面にかけて丸印と丸印を線でつなぐ文様を描き、外面端に「都をどり」の墨書がある。口径12.2cm、器高2.6cm。見込みに凹線状圏線を施す。色調は褐色系。成形は、外面全体に細かい布目が残ることから、外型つくりと考えられる。口縁部はナデ調整を施しておらず、一般的な皿と比べて全体が直線的である。見込みの圏線は、始点と終点がずれており、底部内面のみ透明釉を塗布する。このような製作方法は、決まった大きさの皿を大量に生産して配布するための工夫と考えられる。「都をどり」は、1872（明治５）年に開催された京都博覧会で初披露された舞台舞踊で、丸印と丸印を線でつなげた提灯つなぎと呼ばれるデザインは現在も提灯や茶菓子の皿に描かれている。３～５は、提灯つなぎ皿と共伴する皿。口径8.7～9.2cm、器高1.6～1.9cm。３は、口縁端部に油煙が付着する灯明皿である。色調は、白色系を呈する。

［江戸時代の遺物］

溝SD02・03、土坑SX04から、土師器、陶磁器、瓦などが出土した。

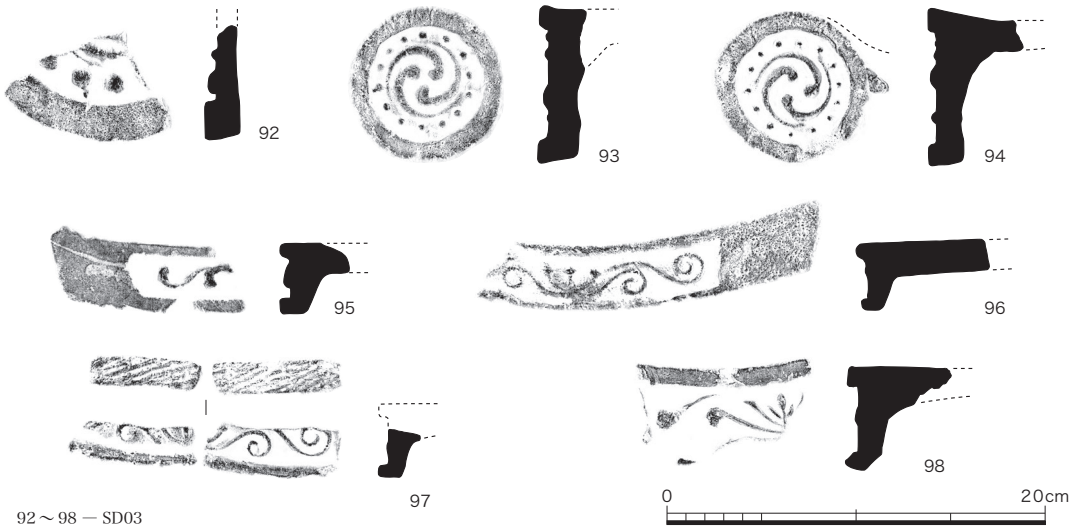
土師器　皿（６～77）は、溝SD03などから出土したもので、完形品に近いものが多い（第３－９図）。形態は、平らな底部と短く開く口縁部が特徴となっており、従来の皿より器壁が厚く重量のある皿（６～21・39・46・59他）が多い。色調は、大半が褐色系であるが、京都産と考えられる白色系の皿（24～32）も少数含まれる。口径は、６～22が6.4～7.3cm、23～67が8.0～10cmで、68・69が10.6cm・10.8cmの他に、70～77は10～10.6cmで、見込みに凹線状圏線を施す（第３－27図）。なお、口径10cm未満の皿は、口縁端部に油煙が付着するものが多く、中には意図的に端部に切り込みを入れたものがある。灯心の先を安定させるためと考えられる。これらの皿は、乙訓地域から出土する皿と胎土や焼成等が異なるものである。17世紀末～18世紀前半に比定される。[7]

陶磁器　肥前系染付磁器（78～85）、肥前系京焼風陶器（88～91）、陶器（86・87）がある（第３－10図）。78～83は、腰の張った丸碗形。78は、他と比べて小振りである。78は、松笠文、79は、五三桐文、80は、松樹文、82は、松樹文と紅葉文、83は、網目文。79・80・82は、コンニャク印判で施文する。82の高台内には崩れた書体で「大明年製」の銘が記されている。83は、呉須の発色が悪く、素地は赤味がかる。84は、壺。把手が剥離した痕跡を留めるが、対になる把手の有無は不明である。85は、口径20cm以上あり、数少ない中皿である。小破片であるが、見込みの絵柄は魚の一部か。86は、甕。口径51.8cm。胎土に含まれる石英などの白色粒が器表面に多く出ている。外面上半と内面に鉄釉を刷毛塗りする。底部は残存しないが、形態は平安京左京北辺四坊[8]出土の能舞台の埋甕に類似する。87は、碗。内面と外面上半を施釉する。色調は、灰オリーブ5Y5/2。胎土は、暗赤灰2.5Y5/1。88～91は、碗。見込みに山水文を描く。高台部は露胎で、内面に押印がある。89は、「松原」か。90は、「柴」。溝SD02・03、落ち込みSX04出土の陶磁器は、17世紀後半～18世紀前葉に比定される。



78～82・84～87・89～91 ― SD03　　83 ― SX04　　88 ― SD02

第 3 –10 図　江戸時代の出土遺物実測図–陶磁器（1/4）



第3–11図　江戸時代の出土遺物実測図–瓦（1/4）

瓦　溝SD03に廃棄された瓦類の中から文様を有する軒瓦類を取捨している（第3–11図）。92は、軒丸瓦。珠文と巴文の尾部の一部が残存する。93・94は、軒桟瓦。巴文の軒丸は直径約8cm。珠文の数と巴文の形状など、文様意匠は類似する。95～98は、軒平瓦。中心飾りの花冠文と、左右に反転する唐草文はそれぞれ形状を異にしている。95は、唐草文の1単位が太く短く、先端が珠のように丸い。97は、瓦当顎部が剥離したもので、上部の接合面には斜め方向に刻み目を入れている。

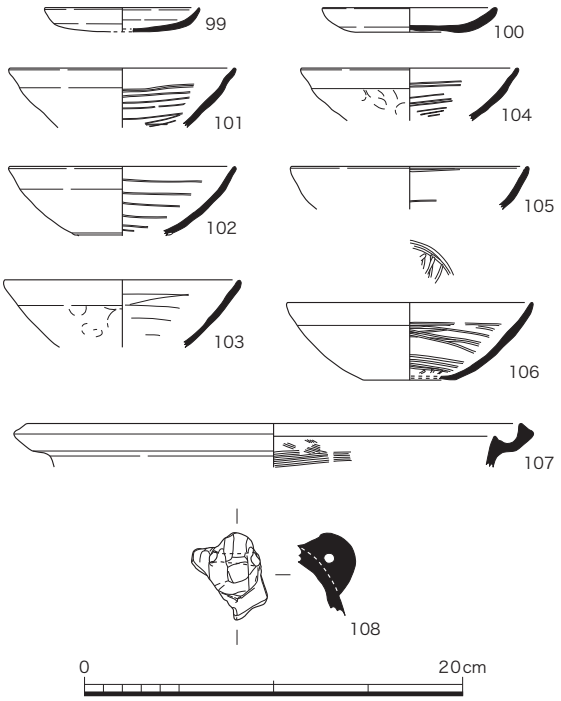
［中世の遺物］

小穴と土坑SK04他から、土師器と瓦器などが出土した（第3–12図）。

土師器　皿(99･100)。99は､口径8.1cm、器高1.3cm。100は、口径9.2cm、器高1.3cm。胎土や色調から、在地系である。

瓦器　椀（101～106)、鍋（107)、湯釜（108）がある。101～106は、楠葉型の椀。口径11.3cm～13cm。内面に粗い暗文を施す。106は、高台部分に粘土を擦り付けている。107は、鍋の口縁部。口径27.4cm。108は、金属器を模倣した湯釜。釜の両耳に環状の輪を付けるための把手。

中世の遺物は、99～107が鎌倉時代後半～室町時代前半。108は、室町時代後半に比定される。



第3–12図　中世の出土遺物実測図（1/4）

［長岡京期の遺物］

土師器、須恵器、土製品などがある。（第3－13図）。

土師器　皿A（109）、椀A（110）、杯A（111・113）、杯B（114・115）、高杯（128）、甕（129）がある。109は、口径17.2cm、器高2cm。外面はc手法。110は、口径12.6cm、器高3.8cm。外面はc手法。111は、外面上半をヨコナデし下半部はヘラケズリを施す。口径19cm、器高4.2cm。113は、外面をヘラミガキ調整する。底部に一条の線刻を施す。口径19.1cm。114は、内外面を丁寧にヘラミガキ調整する。口径13.4cm、器高4cm。115は、外面全体をヘラケズリ後に体部外面をヘラミガキ調整する。口径18.2cm、器高5.4cm。高杯（128）は、杯部から柱状部の小片。柱状部は芯棒つくりで、断面七角形の面取りを行う。甕（129）は、口径28.6cm。小破片のみで、全形の判明するものはない。

須恵器　杯B蓋（116・117）、杯A（119）、杯B（120～122）、壺（123～127）、甕（130）がある。117は、口径16.1cm、器高1.9cm。118は、焼成堅緻。色調は、灰白色。小破片であるが、内面に赤色顔料の付着が認められる。119は、口径18.2cm、器高4.2cm。120は、口径16.2cm。123は、丸い体部上部に一対の紐状の耳を貼り付けた壺N。124は、平底の底部に板状の圧痕が残る壺B。125は、高い高台がつく壺。126は、体部が卵形を呈する水瓶。肩部の釉は、自然釉の降下を意図的に利用したものと判断した。猿投窯の製品。127は、小型の壺M。130は、口径22.5cm。外反する口縁部内面と端面に自然釉が降下する。

土馬　132は、欠損した脚部片。

墨書土器　131は、土師器の小片に書かれた墨痕。文字は不明。

［平安時代の遺物］

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、瓦などが出土した（第3－13図）。

土師器　杯（112）は、摩滅しており調整不明。羽釜（139）は、口径23.9cm。胎土に多くの砂粒を含む。

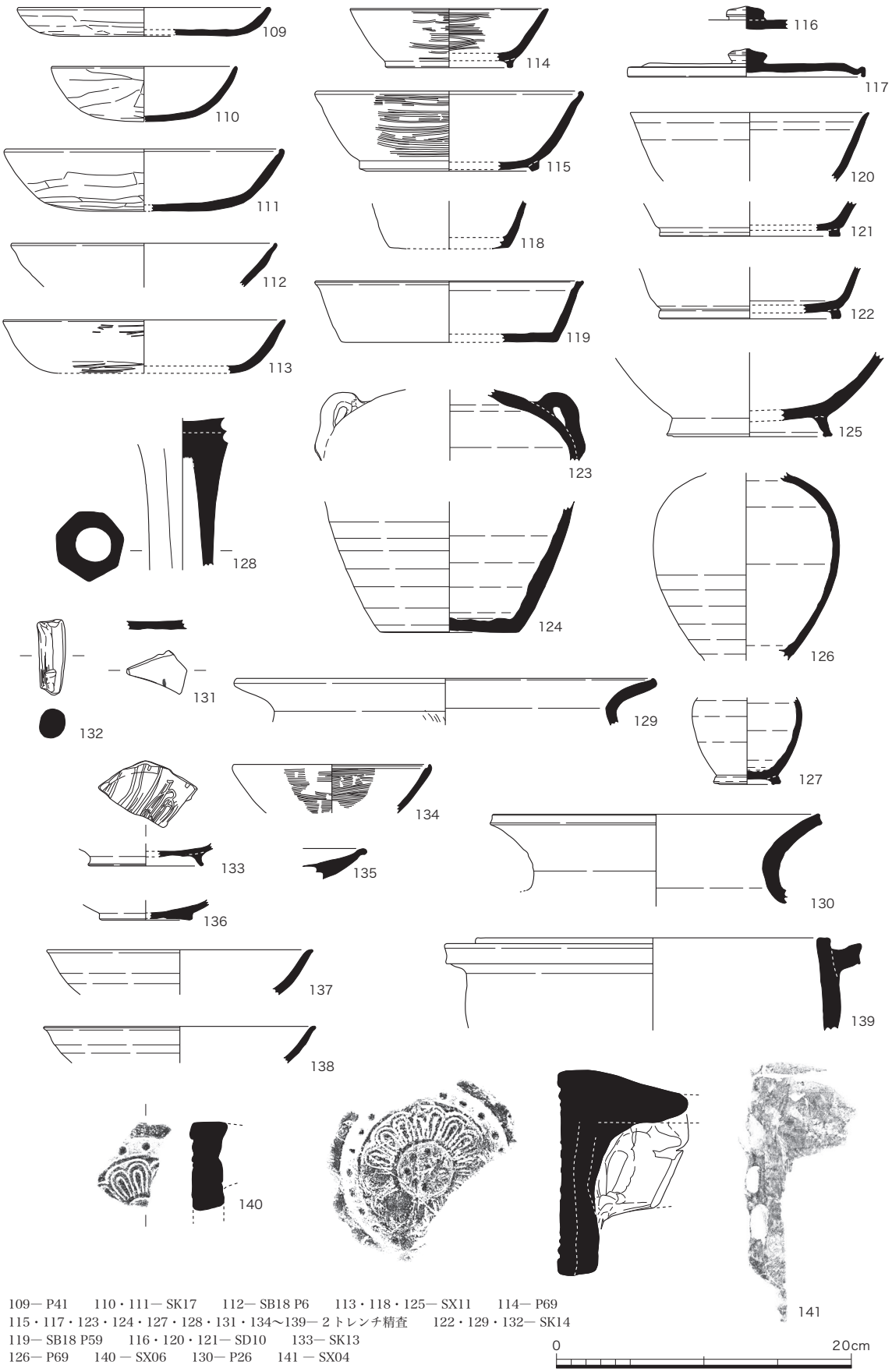
黒色土器　内面を黒色化する高台の付くA類椀（133）と、両面を黒色化するB類椀（134）がある。134は、口径13.5cm。10世紀前半代。

須恵器　皿（135）は、いわゆる緑釉陶器素地である。色調は、青灰5PB5/1。

緑釉陶器　皿（136）は、全面に施釉する。色調は、灰5Y6/1。蛇の目高台。硬質。椀（137・138）は、体部内外面に施釉する。137は、口径18cm。138は、釉が剥離しているがわずかに光沢が残る。口径18.4cm。色調は、にぶい黄橙10YR7/2。

緑釉陶器と須恵器は、形態や技法から京都市西京区大原野に所在する洛西地域[9]の製品と考えられ、9世紀後半を中心とする時期に比定される。

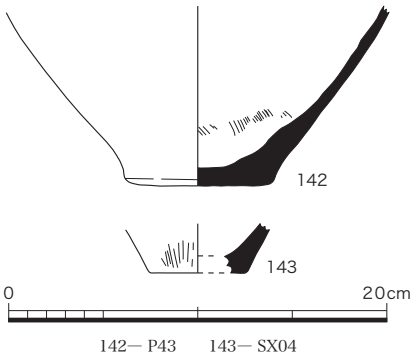
瓦　軒丸瓦（140・141）がある。複弁八葉蓮華文で、中房の蓮子は1＋8。花弁は二重で、尖った三角形の間弁は短く、外区内縁の界線とつながる。141の瓦当側面には、瓦笵の上に重ねた枷型の接着痕が残る（第3－13図）。瓦当部の直径は、約14cm。平安時代前期[10]。



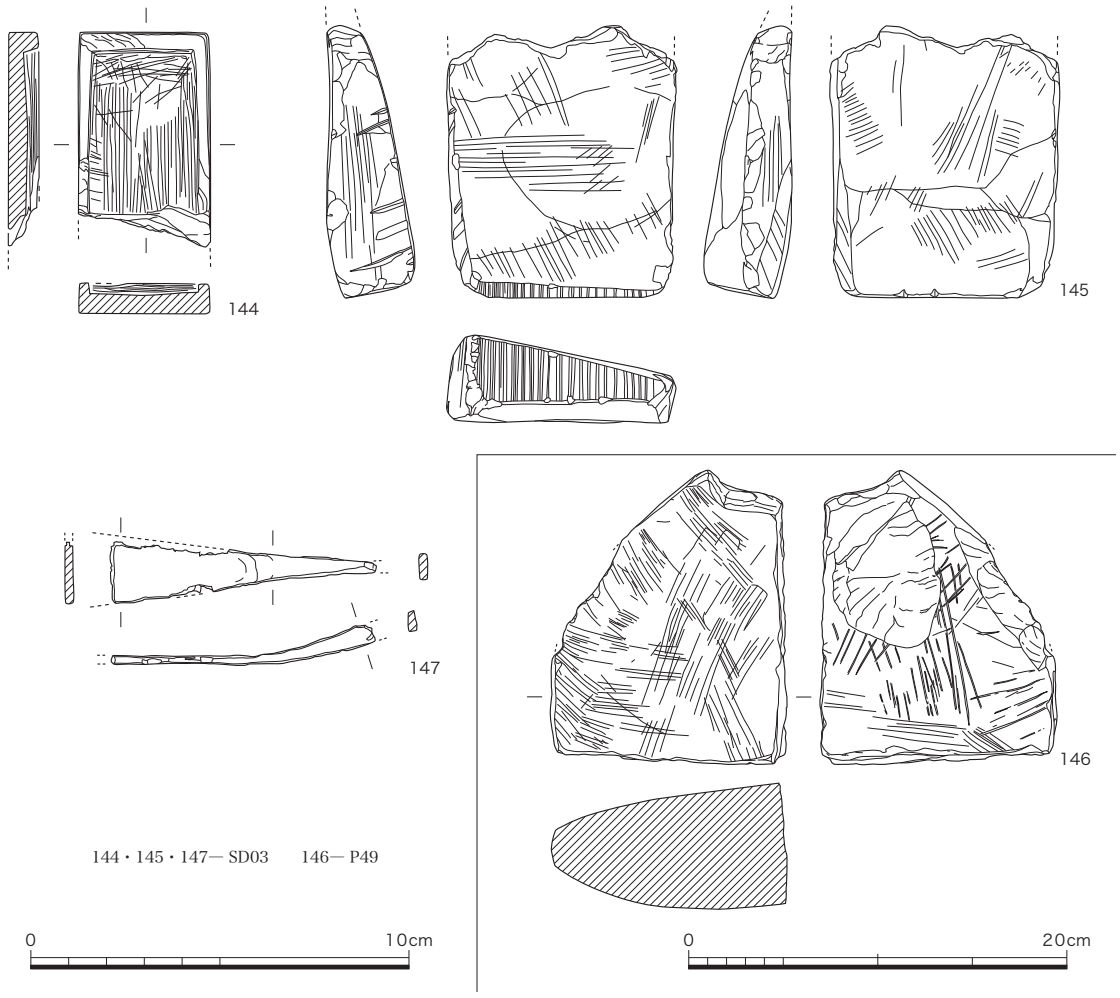
109― P41　110・111― SK17　112― SB18 P6　113・118・125― SX11　114― P69
115・117・123・124・127・128・131・134～139― 2 トレンチ精査　122・129・132― SK14
119― SB18 P59　116・120・121― SD10　133― SK13
126― P69　140 ― SX06　130― P26　141 ― SX04

第 3 –13 図　長岡京期・平安時代の出土遺物実測図（1/4）

第 3 –14 図　枷型の痕跡をとどめる軒丸瓦



第 3 –15 図　弥生時代の出土遺物実測図（1/4）



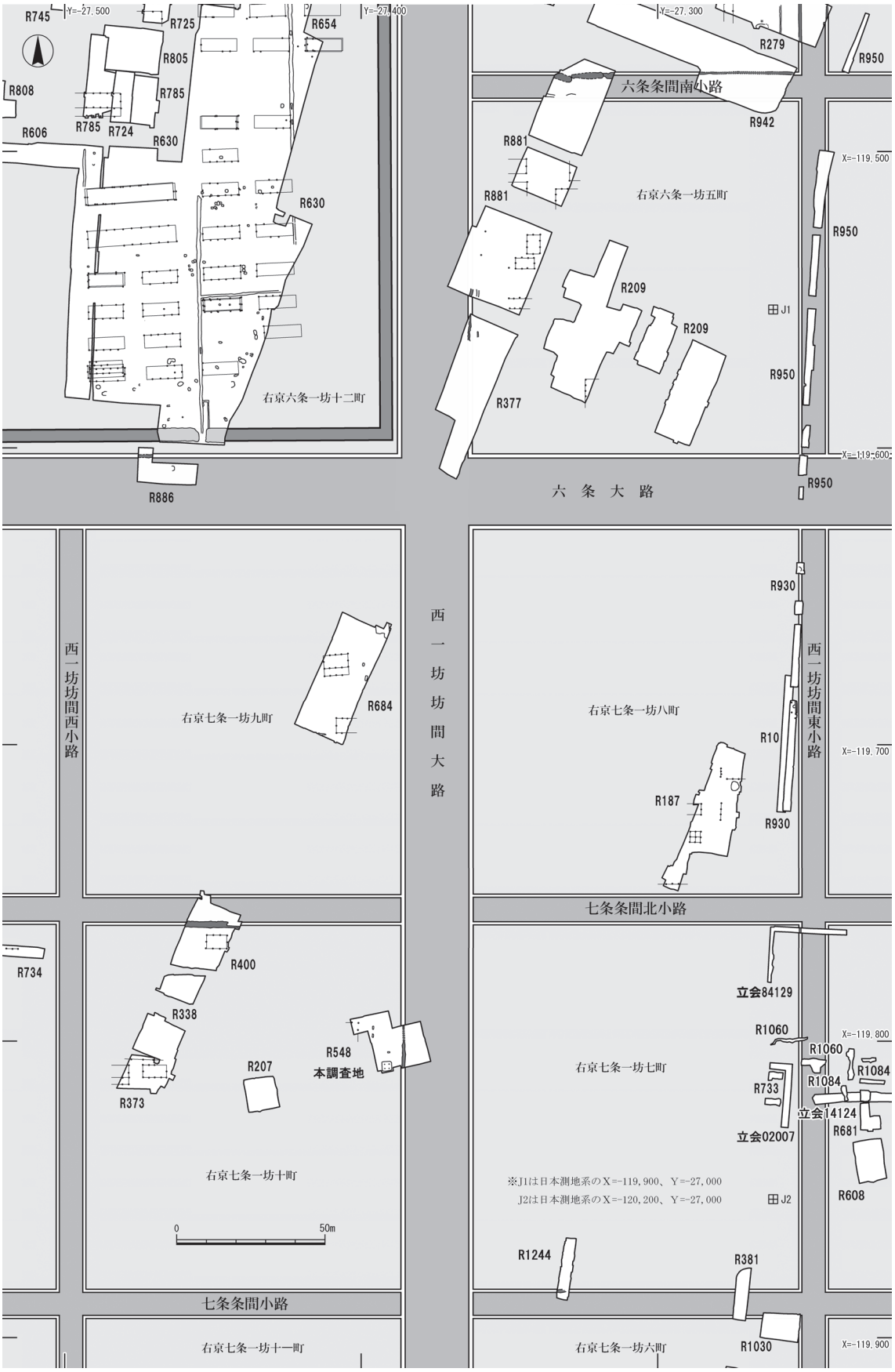
第 3 –16 図　石製品・金属製品の出土遺物実測図（1/2・1/4）

［弥生時代の遺物］

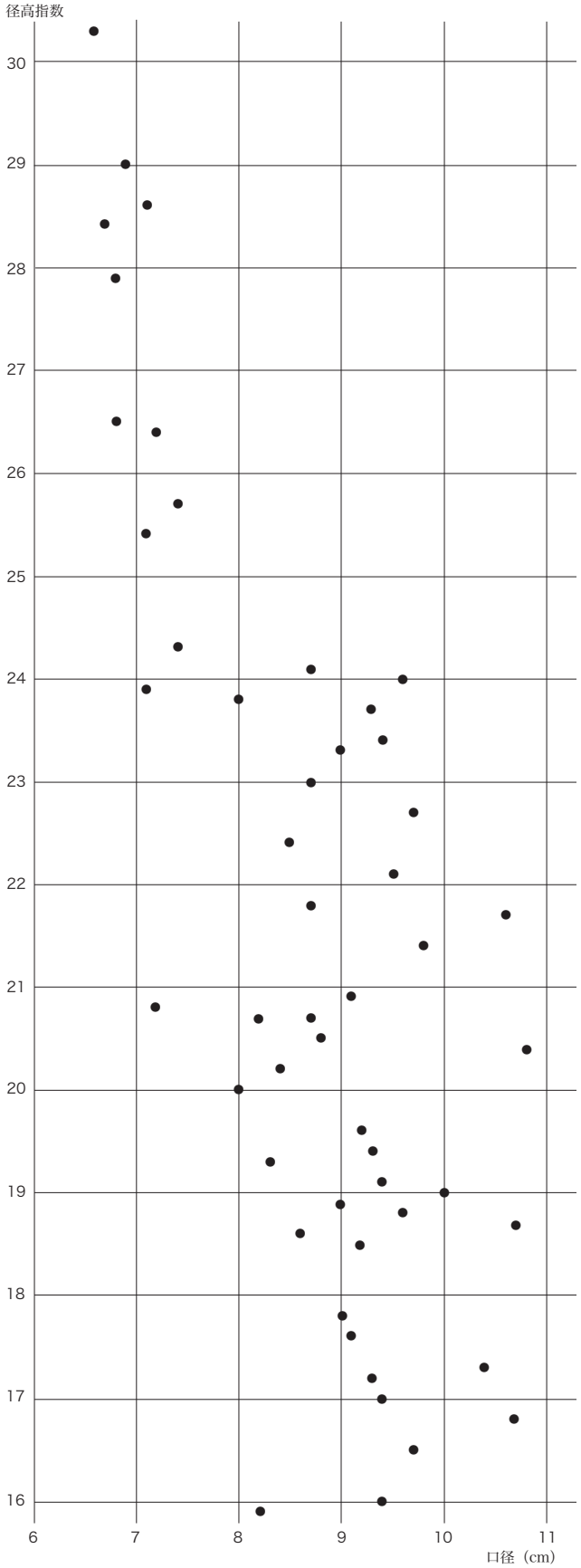
壺形土器（142）と、甕形土器（143）がある（第 3 –15 図）。142 は、内外面とも摩滅しているが、底部内面付近にはハケメ調整を施す。黒斑あり。143 は、外面にハケメ調整を施す。底部の小破片で目立った特徴はみられないが、中期に比定される。

［石製品・金属製品・土製品］

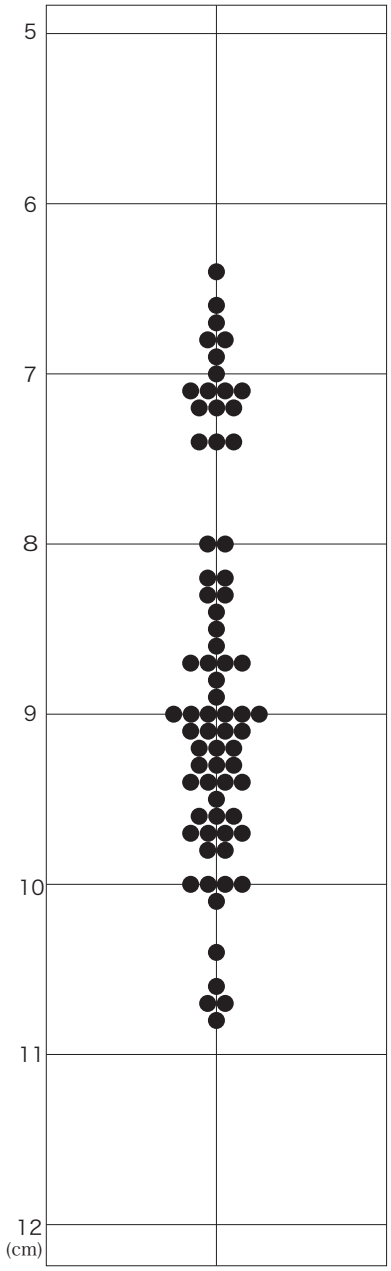
石硯（144）、砥石（145・146）、不明銅製品（147）金属が付着した土製品（148・149）が



第 3 –17 図　調査地周辺図 (1/2000)



第 3 –18 図　江戸時代の土師器皿口径 / 径口散布図



第 3 –19 図　溝 SD03 出土の土師器皿
縦軸口径分布図

ある（第3－16・30図）。144は、携帯用の小型品。145は、５面に使用痕がある。短側面には、直線の擦り溝がある。146は、表裏に細かな擦り痕と粗い擦り痕のある、半割れした欠損品。砂岩製[11]。147は、両端を欠損した銅製品。棒状の細長い部分は中実で、金属を巻きつけて整形している。148・149は、内面に溶けた金属が付着しており、微小な気泡がある。２点とも口縁が残存しており、148は上端に浅い半円形の凹みがある。器壁の厚さは約３cm。外形は丸みをもつ。時期は不明であるが、金属に熱を加えて溶解する作業が行われたことがわかる。

小　結

今回の調査では、弥生時代、長岡京期、平安時代、鎌倉時代、室町時代、および江戸時代から明治時代に至る多彩な遺物と遺構を確認することができた。

当地に造営された徳勝寺は、明治６年（1873）に廃絶したが、創建時期については明らかでない。今回溝SD03他から出土した土師器や肥前系陶磁器類は、一括して廃棄されたと考えられ、その年代は18世紀前葉を下限とする。おそらく、新たな寺普請などの土地利用に際して破損品などの処分が行われたと考えられる。今回の出土遺物から、近世寺院に関する特徴を抽出するのは難しいが、今後は街道筋の町屋と農村部の遺物を比較することで、それぞれの暮らし向きがより見えてくると思われる。明治時代の京都博覧会で披露された「都をどり」は、現在も艶やかな世界に触れることができる人気の興行であり、芸舞を楽しんだ見物客が銘入りの菓子皿を記念として持ち帰ったものであろう。

一方、従来より神足から開田地域の段丘面一帯から、平安時代の前期～後期の軒瓦や緑釉陶器、銭貨などが散在的に出土していることは注目されていた。史料には、長岡京廃都後に、開田院、勝龍寺などの寺院、神足園の菜園などが登場するが、まだ具体的な場所を認定するのは難しい。最後に、長岡京期の竪穴建物状遺構については、金属溶解に関する施設と考えられる。付近に鋳造関連の工房が存在する可能性を示しており、今後の調査が待たれる。

（原　秀樹）

注１）山本輝雄「右京第338次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
２）千喜良　淳・山本輝雄「右京第373次調査略報」『長岡京市センター年報』平成３年度　1993年
３）原　秀樹「右京第400次調査概報」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年
４）岩﨑　誠「長岡京跡右京第207次調査概要」『長岡京市報告書』第17冊　1986年
５）小田桐　淳「右京第377次調査概報」『長岡京市センター年報』平成３年度　1993年
６）アメリカ合衆国の化学者レオ・ヘンドリック・ベークライトが1907年に発明した硬質プラスチック
７）小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』（有）京都編集工房　2005年
８）平方幸雄・丸川義広他『平安京左京北辺四坊』『京都市研究所報告』第22冊　2004年
９）石井清司『石作窯・小塩窯発掘調査報告』（公財）古代学協会　2020年
10）軒丸瓦については、（公財）京都市埋蔵文化財調査研究所の上村和直氏にご教示を得た。
11）石材については、高田クリスタルミュージアムの高田雅介氏にご教示を得た。

第 3 –20 図　第 1 トレンチ全景（北から）

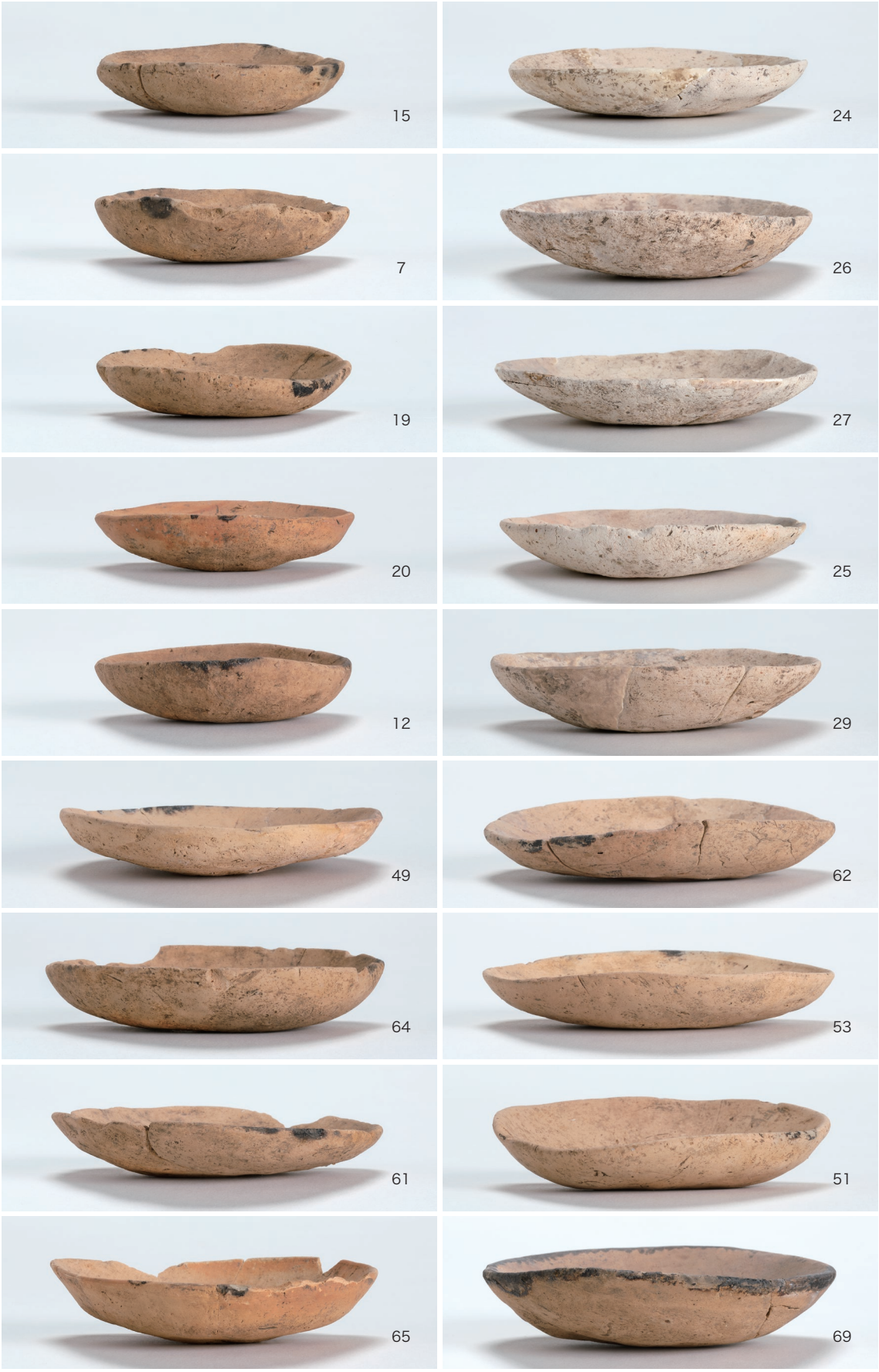
第 3 –21 図　第 2 トレンチ全景（北東から）

第 3 –22 図　第 1 トレンチ西一坊坊間大路西側溝 SD10（南から）

第 3 –23 図　第 2 トレンチ検出遺構（南から）

第３–24 図　第２トレンチ西張出部検出遺構（東から）

第３–25 図　第２トレンチ竪穴建物状遺構 SX11（北から）



第 3 –26 図　土師器

第 3 –27 図　土師器他

第 3 –28 図　土師器・黒色土器・緑釉陶器

第 3 –29 図　須恵器

第 3 –30 図　弥生土器・軒丸瓦・土製品・石製品・金属製品

4．長岡京跡左京第 223 次調査

～ 江戸時代　永井氏神足館関連出土資料、時期不明　粘土採掘坑 ～

調 査 地　長岡京市東神足一丁目４　　**地 区 名**　7ANMSL－３地区

調査期間　1989（平成元）年６月 26 日～８月 31 日　　**調査面積**　462㎡

出土遺物　11 箱

立　　地　低位段丘Ⅰ　　標高 20 m

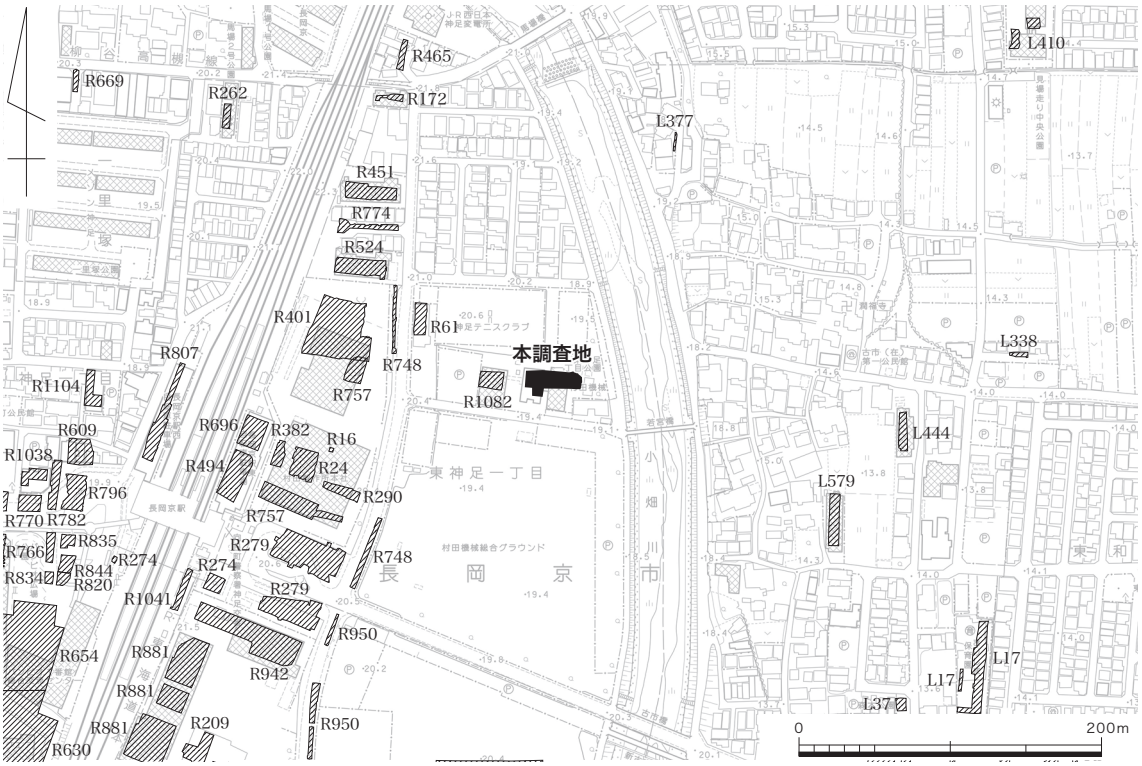
参考文献　「左京第 223 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991 年

調査の概要

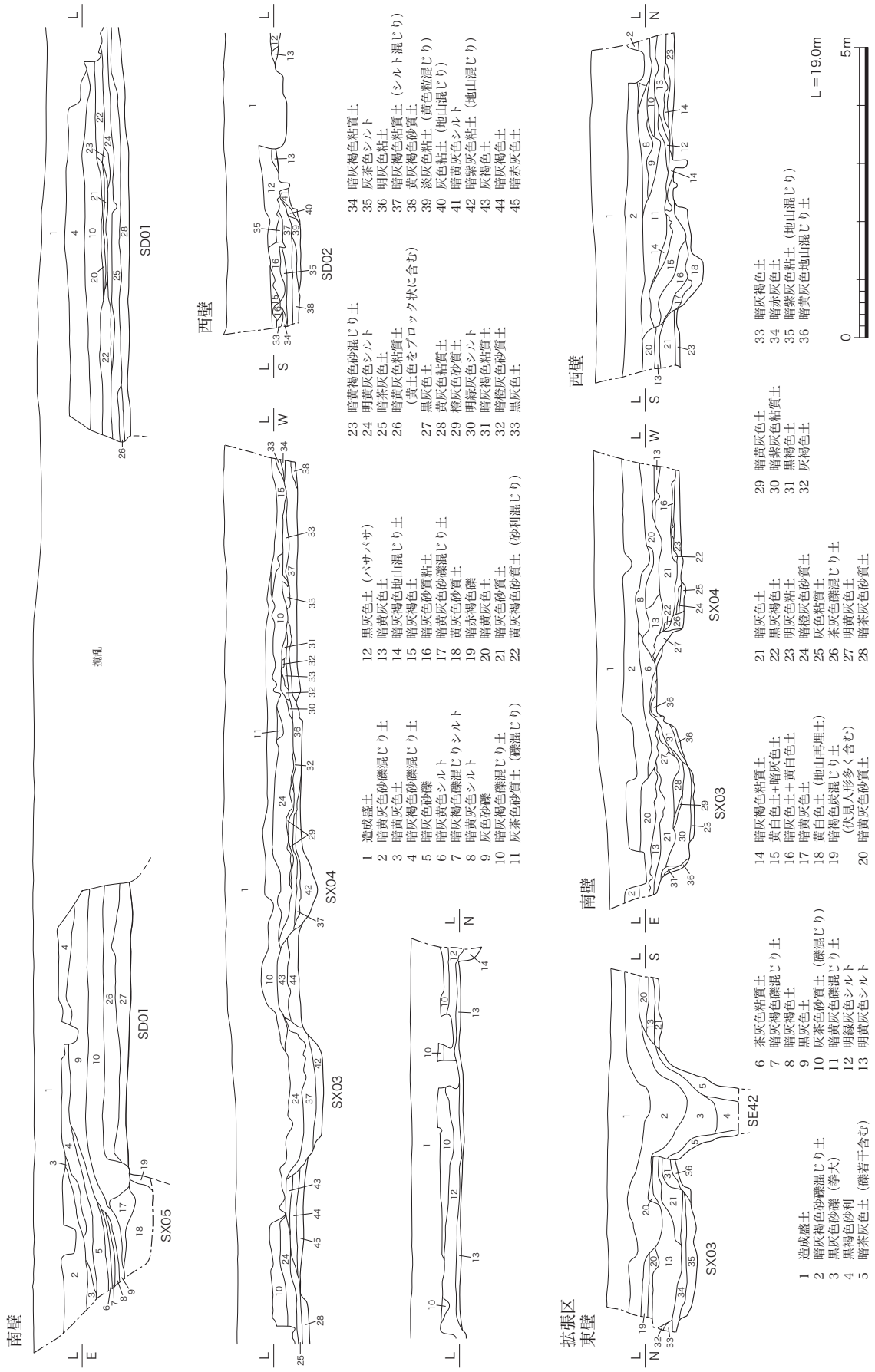
本調査は会社寮の建設に伴って実施したものである。場所は JR 長岡京駅の北東 150 mにあるテニスコート場の一角に当たる。地形分類上は低位段丘に相当し、調査地のすぐ東側には小畑川が南流している。当地は乙訓地域における弥生時代の拠点集落である神足遺跡(注1)にあたり、長岡京の条坊復原では六条条間小路と朱雀大路の交差点やや北寄りの朱雀大路路面上に位置する（第４－16 図)。また江戸時代初期に存在した永井氏神足館(2)の東辺部にもあたる。調査はテニスコート施設の撤去を待ってトレンチ設定を行い、遺構の検出に伴って南側に部分的に拡張を行った。

検出遺構

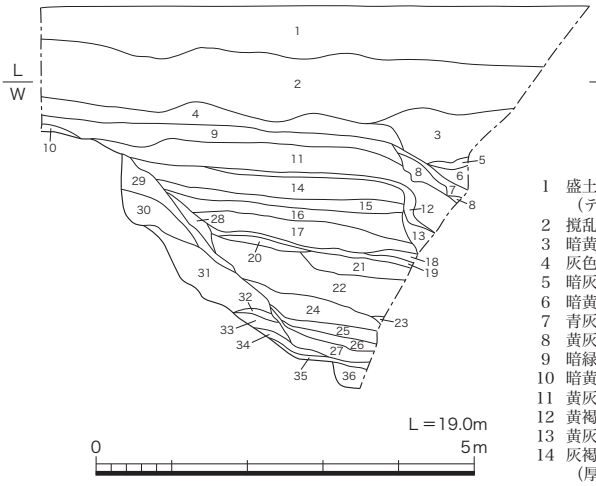
調査地の基本層序は、テニスコート施設の解体、整地に伴う盛土が 0.5 ～１mの厚さで堆積しており、その下には藪土とみられる暗灰褐色礫及び暗灰褐色砂礫混じり土（第４・10 層）が最



第４－１図　発掘調査地位置図（1/5000）



第４－２図　調査区土層図（1/100）



1　盛土
　（テニスコート整地時）
2　撹乱（建物解体時）
3　暗黄灰色砂礫混じり土
4　灰色砂礫
5　暗灰褐色砂礫（1）
6　暗黄灰色土
7　青灰色粘土礫混じり
8　黄灰色礫混じり土
9　暗緑灰色土
10　暗黄色砂礫
11　黄灰色砂質土（1）
12　黄褐色土
13　黄灰色砂質土（2）
14　灰褐色土と黄色砂の互層
　（厚さ約３cmで８～９枚）
15　暗灰褐色土の堆積層で間に薄い砂層
　上面は黄色の粘土層（約２cm）
16　黄灰色シルトと暗灰褐色砂の互層
　（厚さ約３～５cmで７枚）上面は黄色シルト
17　暗灰色細砂層
　（ブロック状に同色のシルトを含む）
18　暗灰褐色砂礫（2）
19　暗黄色シルト
20　黄灰色砂
21　暗黄灰色砂質土
22　黄灰色シルト（1）
23　黄灰色シルト（2）　（赤灰色のまだら含む）
24　黄灰色シルト（赤褐色のまだら含む）
25　黄灰褐色粘質土
26　黄灰褐色シルト（拳大の礫含む）
27　暗灰褐色粘質土（礫含む）
28　暗黄灰色土
29　黄灰褐色土
30　黄灰色砂質土
31　暗赤褐色礫
32　黄灰色粘土
33　暗褐色礫　（地山崩壊土）
34　黄灰色粘土礫混じり
35　黄灰色シルト礫混じり
36　暗灰褐色礫混じり土

第４－３図　落ち込み SX05 断面図（1/100）

大 0.6 m堆積していて、それらを除去した地山面で遺構が検出された。調査地の東半部は解体時に大きく撹乱されており、遺構は西半部を中心に検出されている。検出面での標高は西側で 19m、東側で 18.4m、調査区の中心国土座標は X ＝–119,300、Y ＝–27,085 である。

検出された遺構には近・現代の井戸・落ち込みのほか、江戸時代、鎌倉時代、平安時代、長岡京期および時期不明の土坑群がある。

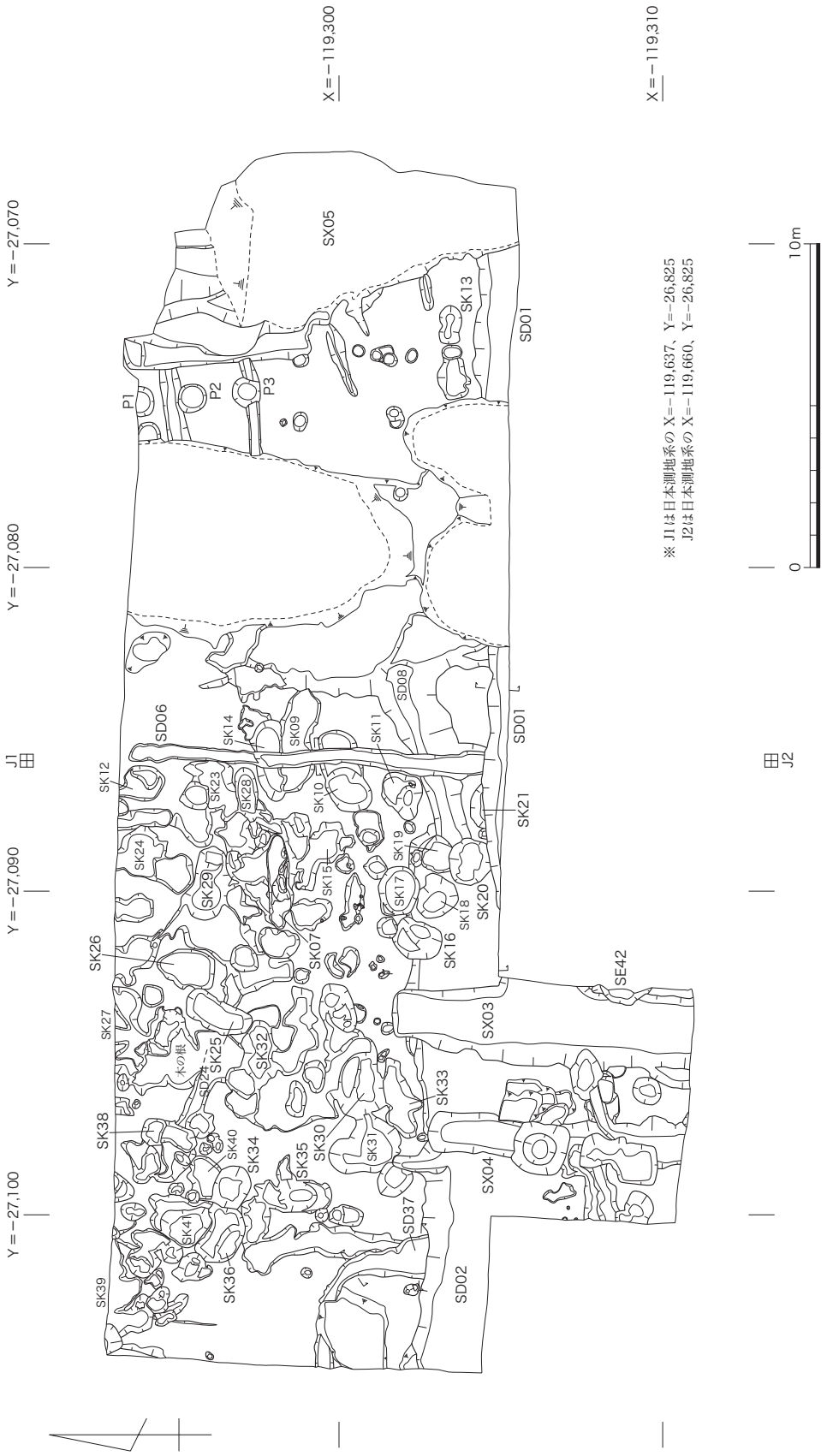
江戸時代の遺構

落ち込み SX05（第４－３・21 図）　調査地の東端で検出された大きな落ち込みで、埋土は細かい礫・砂・シルトの薄い堆積が続く。掘り下げ作業中降雨により東側の壁が崩壊したため、安全のため北側の壁面での観察に切り替え、深さ約３ｍまで掘り下げている。調査当時は永井氏神足屋敷の堀のようなものを想定したが、周辺の調査成果から小畑川の一時期の流路堆積とみられる。ただし、神足屋敷の東辺に当たることは間違いないと思われる。断面から見ると最近まで一段低い落ち込みとして残っていたようである。

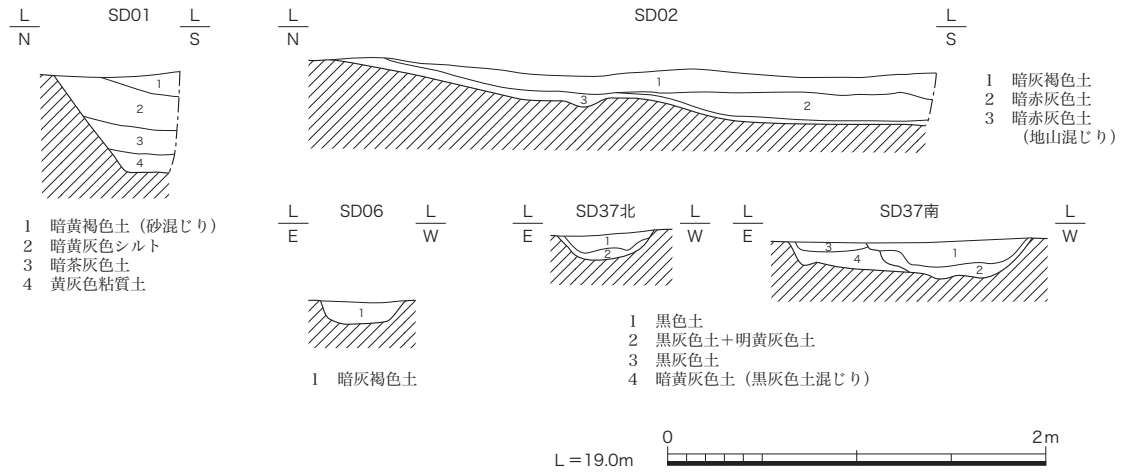
溝 SD01・02（第４－４・５・７・８図）　調査地の南辺で北肩が検出された東西方向の落ち込みで、検出時は溝とみられたため幅を確認するため南側に拡張を行ったが、南の肩は確認できなかった。東側の溝 SD01 は深さ 0.5m で北肩は急激に落ち込んでいる。一方西側の溝 SD02 は南に緩やかに落ち込み、深さは 0.3 mである。

落ち込み SX03・04（第４–20 図）　南北方向の並行する溝状遺構で、溝 SD02 を一段深く掘り込むように作られている。近・現代の落ち込みや井戸に切られていて、輪郭の不明な部分もあるが、SX03 の幅は北側が 1.4m、南側で幅 2.7m、深さ 0.7m で、拡張部の東壁付近で東側に広がっている。SX04 は幅 1.5 ～２m、深さ 0.5m 前後である。両溝ともに江戸時代後期の遺物を多く含んでいる。

溝 SD06（第４－５・９図）　調査地中央で検出された南北方向の浅い溝で、で約 11 m分が検出されている。北側は調査地内で終わっていて、南側は溝 SD01 に接続している。幅 0.4 m、深さ 0.1 mである。



第４－４図　調査区検出遺構図（1/200）



第４－５図　溝実測図（1/40）

溝 SD37（第４－５・10 図）　調査地の西辺で検出されたほぼ直角に折れ曲がる溝で、東西方向から南に折れて SD02 に接続している。東西方向の溝は幅 0.5 m、深さ 0.15 m、南北方向の溝は接続部分で広くなり、幅 1.4 m、深さ 0.2 mである。

冒頭に述べたように、当地は江戸時代初めの永井氏神足屋敷東辺部分に当たり、「永井直清公御在所城州神足之図[3]」によると、今回の調査地は若宮神社と呼ばれる敷地内に設けられた神社が記された部分に相当する。絵図には拝殿や鳥居とそれを取り囲む長方形の溝と垣が描かれていて、今回検出された江戸時代の遺構はこの若宮神社に関連するものと考えられる。特に東西方向の落ち込み SD01・02 は絵図に描かれている神社の南を画する施設とみられる。

中世の遺構

土坑 SK07（第４－６・22・23 図）　調査地中央付近で検出された東西方向の土坑である。平面形は長楕円形で、長さ 2.9 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 m。土坑の中央部ではほぼ完形の瓦器椀が上を向いた状態で検出された。他に遺物は出土していないが、土壙墓の可能性がある。これ以外に調査地南辺部で検出された土坑 SK21 から瓦器椀の小片が出土している。

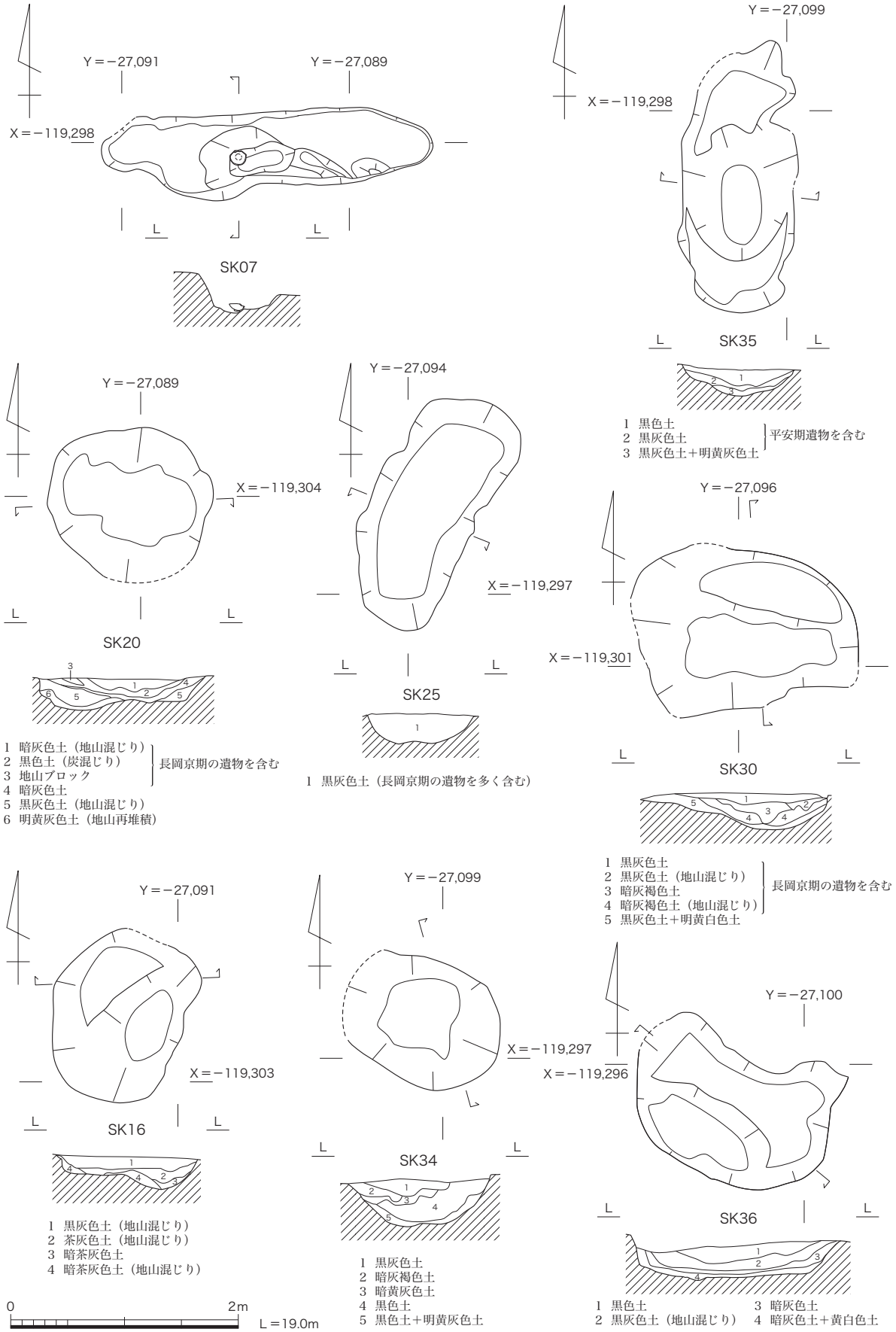
平安時代の遺構

土坑 SK35（第４－６・24 図）　調査地西側で検出された平面が不整楕円形を呈する南北方向の土坑である。中央部が一段深く落ち込んでいて、長さ 2.4 m、幅 1 m、深さ 0.25 m。少量ではあるが平安時代の遺物が出土している。墨書土器小片を含むが、性格に関しては不明である。

長岡京期の遺構

土坑 SK20（第４－６・25 図）　調査地南辺中央付近で検出された平面不整円形の土坑。南側は溝 SD01 に切られているが、東西 1.45 m、深さ 0.3 m、埋土の上層に長岡京期の遺物を含んでいる。

土坑 SK25（第４－６・26 図）　調査地西半部北寄りで検出された平面不整長楕円形を呈する土坑。埋土は 1 層で長岡京期の遺物を比較的多く含んでいる。長軸は北で東に振れており、長さ 2.1m、幅 0.95 m、深さ 0.25 m である。



第４－６図　土坑実測図（1/50）

土坑 SK30（第４－６・27 図）　調査地西寄り中央付近で検出された平面不整形の土坑である。底部は南に向かって二段に落ち込み、東西約 2.1m、幅 1.5m、深さ 0.3m である。土器片は少なく、丸瓦片が出土している。

時期不明の遺構（第４－６・28・29 図）

調査地西半部ほぼ全域で大きさ１～ 1.8m、深さ 0.3 ～ 0.5m の平面不整形の土坑群が検出されている。遺物が出土したものに関しては前述しているが、大半のものは遺物の出土がないため明確な時期は不明である。このうち土坑 SK16・34・36 の３基を図示した。これらの土坑群のベースとなっているのは段丘礫層の上に堆積している黄白色の粒子の細かい粘土層である。この粘土層は厚さ 0.4 ～ 0.6 mで、今回の調査地内では西半部だけで確認できる。（第４－17 ～ 19 図）今のところ、このような黄白色の粒子の細かい粘土層が確認できるのは本調査地のみで、周辺では調査地東半部でみられるような黄色系の粘土層が普遍的に確認できるものである。土坑群はいずれも黄白色粘土の分布域に集中し、段丘礫層面で掘削を止めている。また、調査地東部の黄色粘土層部分には土坑群は見られない。このような状況から、これら土坑群の性格としては黄白色粘土の採掘痕跡の可能性が考えられる。遺物が確認できるのは長岡京期以降のもので、弥生時代や古墳時代のものは見られない。以前の報告では土器作りに関連する可能性を指摘していたが、長岡京期を中心とした時期だとすれば建物の壁土としての利用も考えられるだろう。

（木村　泰彦）

第４－７図　溝 SD01（西から）

第４－８図　溝 SD02（西から）

第４－９図　溝 SD06（北から）

第４－10 図　溝 SD37（北から）

出土遺物

調査では、江戸時代、室町時代、鎌倉時代、平安時代、長岡京期、弥生時代の遺物が出土した。小片が多く、図示できるものは限られる。

[江戸時代の遺物]

土師器、国産陶磁器、土製品、瓦、銭貨などがある（第 4 –11・30・33 図）。

井戸 SE42 出土遺物　土師器皿（1・2）、染付碗（3）がある。1 は、口径 7.4cm、器高 1.3cm。2 は、口径 8.4cm、器高 1.5cm。口縁部に油煙が付着する灯明皿。底部の器壁は厚く、口縁部は短くひらく。3 は、口径 10.6cm、器高 5.8cm。畳付以外は全面施釉する。外面は、梅花の五弁を点描で 2 点、松葉を線描きで 2 点描いており、背後の縦線は竹垣の表現とみられる。見込みに小さな円弧状の溶着痕があり、中央に簡略化された帆掛け船とみられる文様を描く。18 ～ 19 世紀代とみられる。

溝 SD02 出土遺物　土師器皿（4）、唐津焼碗（5）がある。4 は、口径 7 cm、器高 1.7cm。口縁部は歪んでいる。5 は、内面と体部上半に濃緑色の釉を施す。高台は露胎。色調は、オリーブ 5Y5/4。17 世紀代。

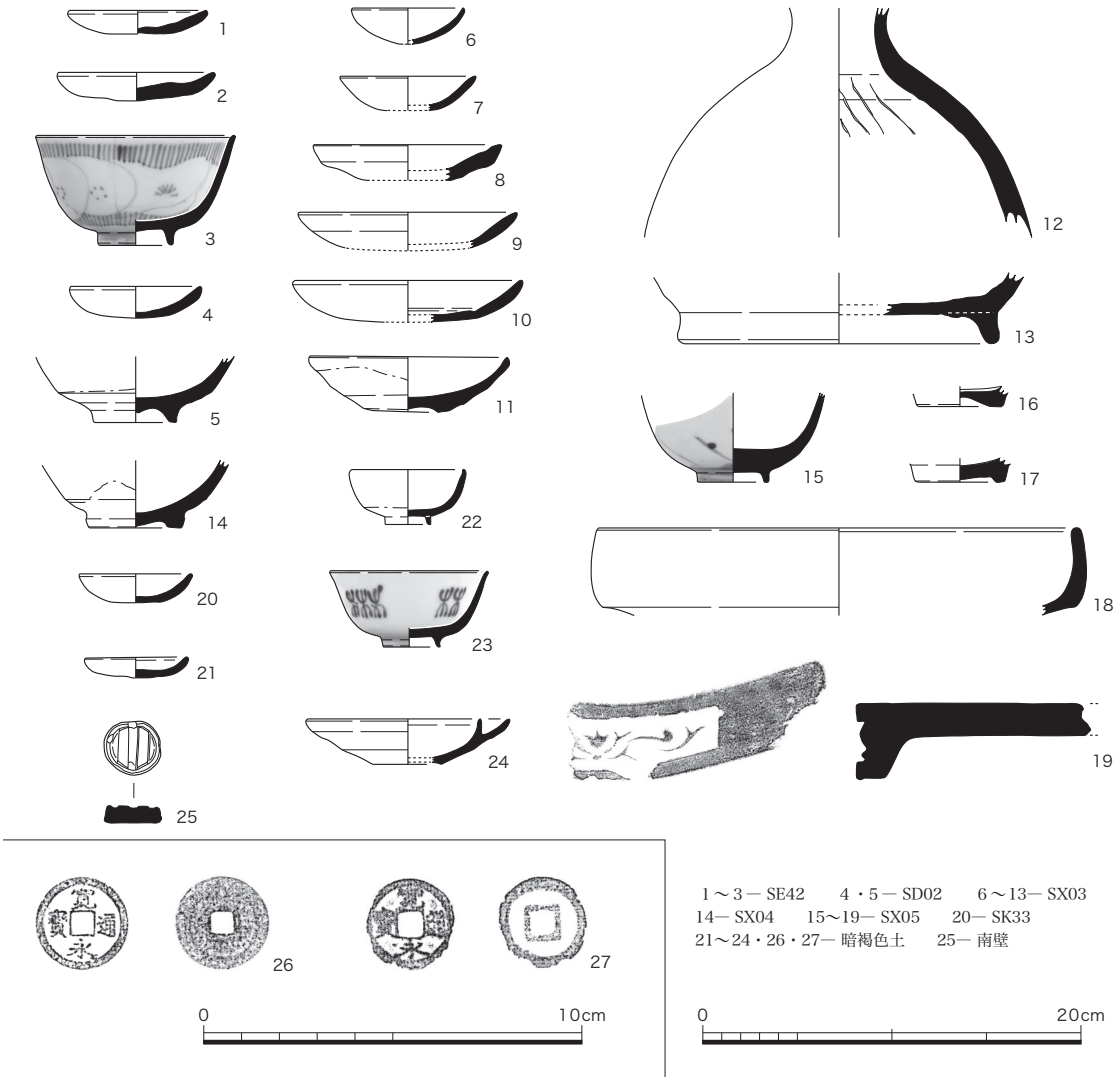
落ち込み SX03 出土遺物　土師器の皿（6 ～ 10）、壺（13）、唐津焼皿（11）、陶器壺（12）がある。6 は、口径 6.0cm。7 は、口径 7.2cm。8 は、口径 10cm。器壁が厚く、口縁端部は断面三角形状を呈する。9 は、口径 11.6cm。口縁部に油煙が付着する。10 は、口径 12.2cm、器高 2.2cm。内面に凹状圏線を施す。口縁部に油煙が付着する。11 は、口径 10.7cm、器高 2.9cm。内面と口縁端部外面を施釉する。高台内面を削って凹ませる。見込みに 3 カ所の目跡が残る。12 は、中世の焼締めか。色調は、褐 7.5YR4/4。13 は、高台付の壺。これらの遺物は、17 世紀代に比定される。

落ち込み SX04 出土遺物　陶器碗（14）がある。内面と外面上半に施釉する。高台付近を除いて施釉し、釉の掛かりには厚薄が見られる。高台は削り出し。胎土は白っぽい。17 世紀代。

落ち込み SX05 出土遺物　染付碗（15）、天目茶碗の高台（16・17）、土師器鍋（18）、軒桟瓦（19）がある。15 は、いわゆるくらわんか茶碗。畳付以外、全面施釉する。高台内に文様が描かれる。天目茶碗は、高台の形態は内面を円錐形に削る 16 と、輪高台に削り出す 17 がある。18 は、口径 25.6cm。外面に煤が付着する。19 は、瓦当の下半部を貼り付けている。16・17 は戦国期の混入品とみられる。その他は 18 ～ 19 世紀代。

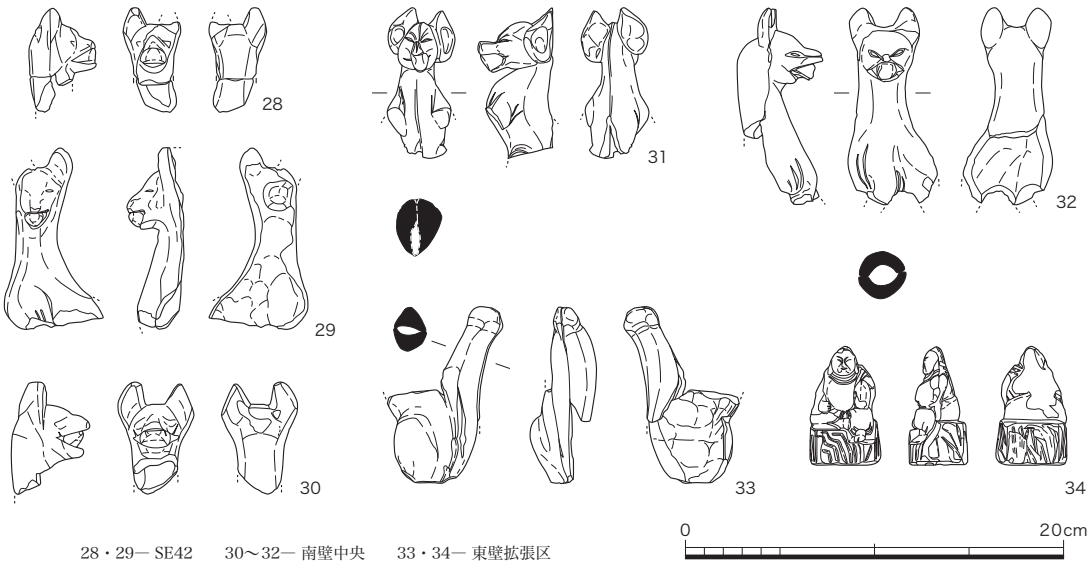
土坑 SK33 出土遺物　土師器皿（20）がある。口径 6 cm、器高 1.6cm。17 世紀代。

包含層その他の出土遺物　土師器皿（21）、京焼系陶器碗（22）、染付碗（23）、陶器灯明受け皿（24）、泥面子（25）、銭貨（26・27）がある。21 は、口径 5.6cm、器高 1.1cm。口縁部に油煙が付着する。22 は、内面と外面上半を施釉する。高台は削り出しの輪高台。色調は、灰白 5Y7/2。23 は、高台の畳付以外は全面施釉する。口縁端部に口銹を施す。24 は、口径 10.8cm。内面を全面施釉する。25 は、直径 3 cm。型抜きされた数字は「二」か。26・27 は、寛永通寶。27 は、銭文と縁がほぼ平らになるほど摩滅する。陶器類は、19 世紀代とみられる。



1～3― SE42　4・5― SD02　6～13― SX03
14― SX04　15～19― SX05　20― SK33
21～24・26・27― 暗褐色土　25― 南壁

第 4 –11 図　出土遺物実測図–江戸 1 （1/4・1/2）



28・29― SE42　30～32― 南壁中央　33・34― 東壁拡張区

第 4 –12 図　出土遺物実測図–江戸 2 （1/4）

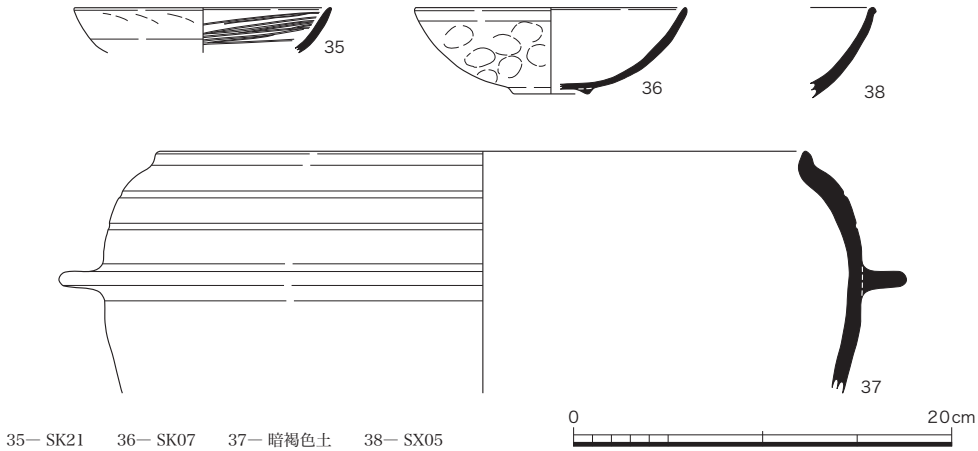
土人形（28 ～ 34・68 ～ 93）がある（第 4 –12・30 ～ 32 図）。28 ～ 33 は、狐像。稲荷神の使いとして、祠の前に 2 体一組で安置された。長方形の台座は大きいものと小さいものがある（第 4 –30 図 66）。29・32・68 ～ 70 は、胴体は左右双方が向き合い、顔は正面を向く。作りは前の像と後ろの像を別々の型で作り、型抜きしたものを貼り合わせている。69 は、背面像。33 と 71 ～ 76 は、男性器を模した狐の尻尾である。31 は、顔と胴体が正面を向いており、左の像と右の像を型作りしたものを貼り合わせて、耳を後付けする。それぞれ口には左右別々に巻物と玉をくわえている。個体により形態が異なっており、生産地が異なるものと考えられる。77 は、片足部分。78 は、尻尾。34 は、一部欠損しているが、左肩に大きな袋を背負うことから大黒天像とみられる。79 ～ 93 は、布袋像。形が大きく、比較的薄く作られている。複数の個体に分類されるが、背面の部品は不明である。大きな像については各部位を別々に作り接合したとみられる。狐像の出土量は、本地点が今までで最も多い。古市村の氏神であった若宮八幡宮境内から出土したたくさんの狐像は、当時の稲荷社の賑わいを物語っている。18 世紀後半～ 19 世紀代とみられる。

[中世の遺物]

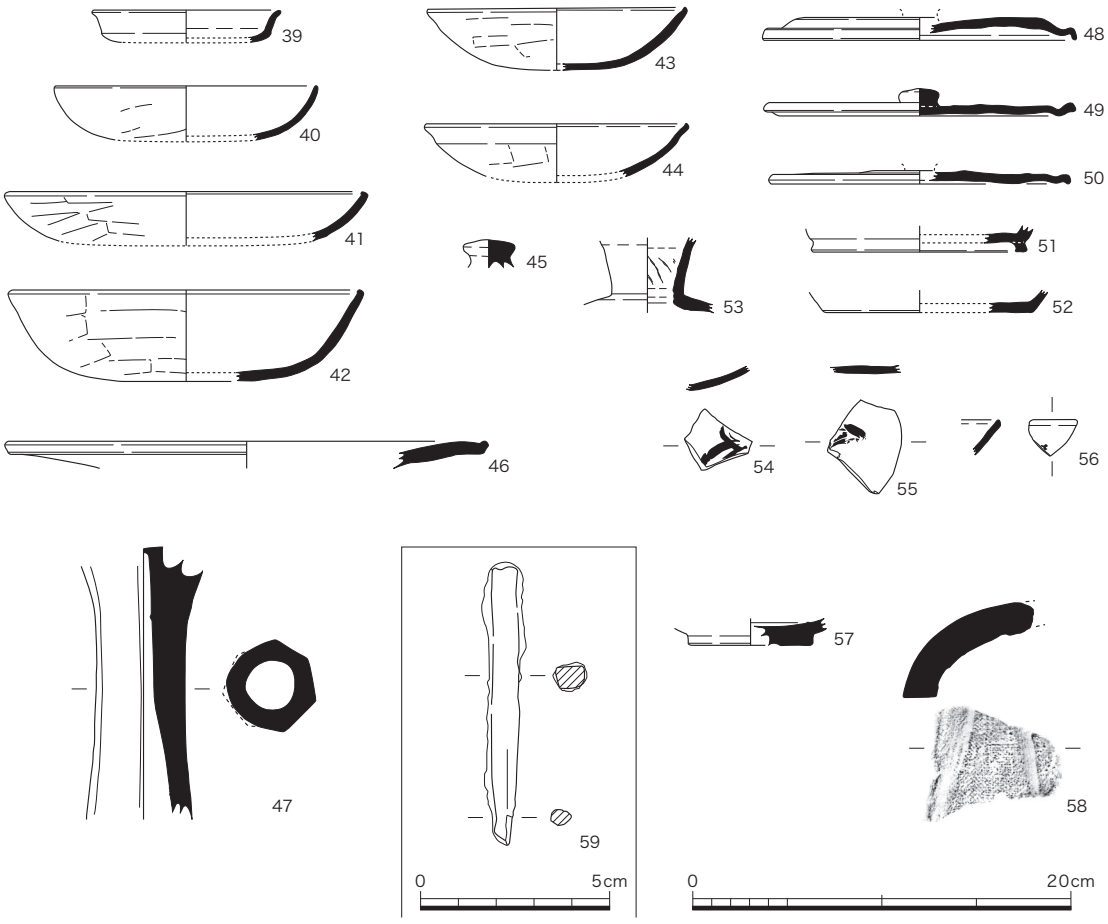
瓦器の椀（35・36）、羽釜（37・67）、青磁碗（38）がある（第 4–13・33 図）。35 は、口径 13.6cm。内面に粗い暗文を施す。36 は、磨滅しており調整不明。断面三角形の高台を貼り付ける。口径 14.4cm。器高 4.6cm。瓦器椀は、13 世紀代に比定される。37 は、口径 34.2cm。37・67 は、口縁部に 2 本の沈線を施す。16 世紀後半～ 17 世紀。38 は、小片のため口径不明。体部内外面は無文である。色調は、明緑灰 7.5GY7/1。龍泉窯系。

[長岡京期～平安時代の遺物]

土師器の皿 C（39）、皿 A（40･41）、杯 A（42）、椀 A（43･44）、蓋つまみ（45）、高杯（46･47）がある（第 4–14・34 図）。39 は、口径 10cm。口縁部は強く外反する。40 は、口径 14cm。41 は、口径 19.2cm。40 は、やや磨滅するが、いずれも外面ヘラケズリ調整。42 は、口径 18.8cm。器高 4.8cm。43 は、口径 13.8cm、器高 3.3cm。44 は、口径 14cm。椀 A は、

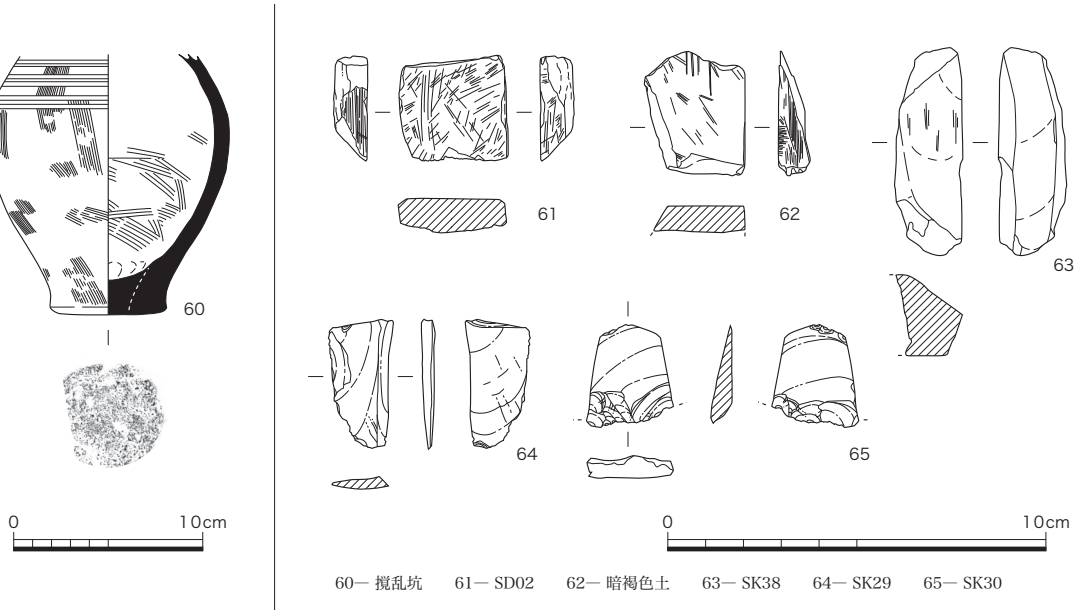


第 4 –13 図　出土遺物実測図–中世（1/4）



39～41・45― SK20　42・48・49・53・59― SK26　43― SK34　44・54～56― SK35　46・51― SK29　47― 暗褐色土
50― SK32　52― SK38　57― SX04　58― SK30

第４–14 図　出土遺物実測図–長岡京期～平安（1/4・1/2）



60― 撹乱坑　61― SD02　62― 暗褐色土　63― SK38　64― SK29　65― SK30

第４–15 図　出土遺物実測図–弥生土器・石器（1/2・1/4）

外面へラケズリ後に口縁部をヨコナデする。45 は、つまみ上面に四角い囲み線のような墨線がある。46 は、高杯の杯部片。口径 25.6cm。46 の脚柱部は、七角形に面取りする。芯棒つくり。墨書土器（54 ～ 56）は、土師器椀皿類の外面に書かれているが、小破片のため判読は難しい。

須恵器は、杯 B 蓋（48 ～ 50）、杯 B（51）、杯 A（52）、壺（53）と、蛇の目高台の底部（57）がある。48 は、口径 16.6cm。つまみが取れた跡がある。蓋内面は平滑で、縁に薄い墨痕跡がある。49 は、口径 16.5cm。高さ 1.5cm。割れた断面には粘土の重なりが層になっている。50 は、口径 16cm。口縁部外面に、重ね焼き痕がある。51 は、高台径 11.4cm。52 は、軟質で灰白色を呈する。53 は、壺頸部。57 は、緑釉陶器素地。高台は、円盤状に貼り付けた粘土を削り出し、高台内に浅い 1 条の沈線を施す。内面に重ね焼きの熔着痕が残る。9 世紀代。

瓦は、丸瓦（58）がある。内面に布目痕が残る小片。

鉄製品（59）は、残存長 7.5cm の棒状製品。元の形状は不明。

［弥生時代の遺物］

壷形土器（60）と石製品（61 ～ 65）がある（第 4–15 図）。60 は、内外面を粗くハケメ調整した後、胴部上半に 1 条 4 本の櫛描直線文を 3 帯施す。底部は平底で、細礫があらわに出ている。中期前半に比定される。

石製品は、砥石断片（61 ～ 63）と、剥片（64・65）がある。61 は、粘板岩製。重さ 76g。側面と上面は平滑な擦り面。下面は未調整。斜めは割れた面。62 は、上面と側面が擦り面。63 は、砂岩製。重さ 170g。展開した左図の上面は平らな面が研磨で凹んでいる。64・65 は、サヌカイト製。64 は、重さ 2.1g。65 は、3.6g。　（原　秀樹）

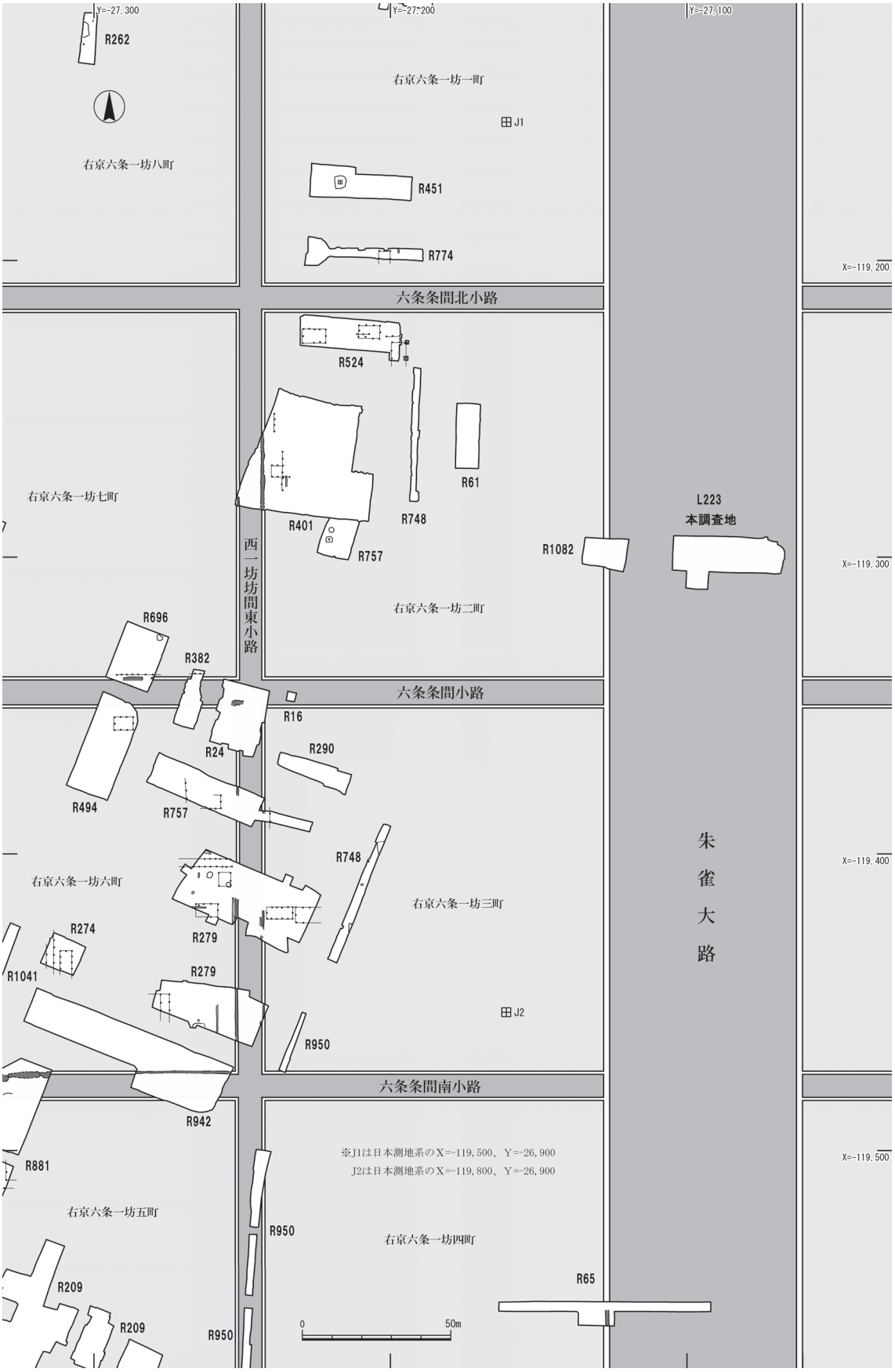
ま と め

今回の調査では、部分的に撹乱を受けていたが、ほぼ全面から遺構が検出された。このうち江戸時代では若宮神社関連とみられる遺構、遺物の検出がある。永井氏神足屋敷の一角にあった若宮神社は、1649（慶安 2）年に永井直清の転封に伴い高槻城に移されたと伝えられる。ただ、当地周辺は明治時代の終わり頃まで「若宮の森」と呼ばれており、落ち込み SX03・04 や包含層から多くの伏見人形が出土していることから、祠のような施設が存在していた可能性がある。現在は当調査地のすぐ東の小畑川にかかる「若宮橋」にその名残をとどめている。

このほかに注目されるのが粘土採掘の跡とみられる土坑群である。周辺での類例がなく、遺物も少なく時期の決定が困難であるが、検出遺構でも述べた如く、もし長岡京期頃だとすれば土器作りや建物の壁土の可能性が考えられよう。ただ、場所が朱雀大路の真ん中に当たり、そのようなことが果たして可能であったのか、検討すべき課題は多く残されている。

（木村　泰彦）

注 1）岩﨑　誠「四　弥生時代　神足遺跡」『長岡京市史資料編一』平成 3 年　1991 年
2）井ケ田良治「二　永井直清の勝竜寺領知」『長岡京市史本文編二』平成 9 年　1997 年
3）注 2 と同じ



第 4 –16 図　調査地周辺図（1/2000）

第 4 –17 図　調査地遠景（東から）

第 4 –18 図　調査地全景（南から）

第 4 –19 図　調査地全景（西から）

第 4 –20 図　拡張区全景（北から）

第 4 –21 図　落ち込み SX05 断面（南から）

第 4 –22 図　土坑 SK07（東から）

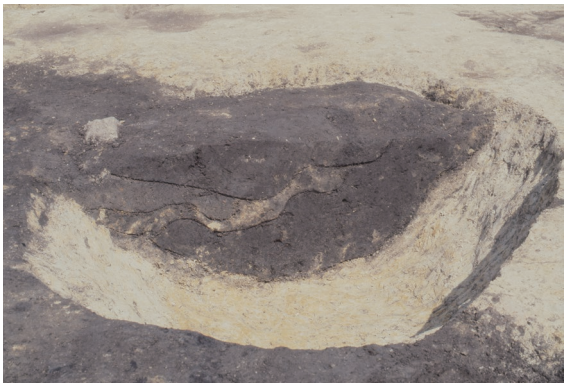
第 4 –23 図　土坑 SK07（東から）

第 4 –24 図　土坑 SK35（南から）

第 4 –25 図　土坑 SK20（北から）

第 4 –26 図　土坑 SK25（北東から）

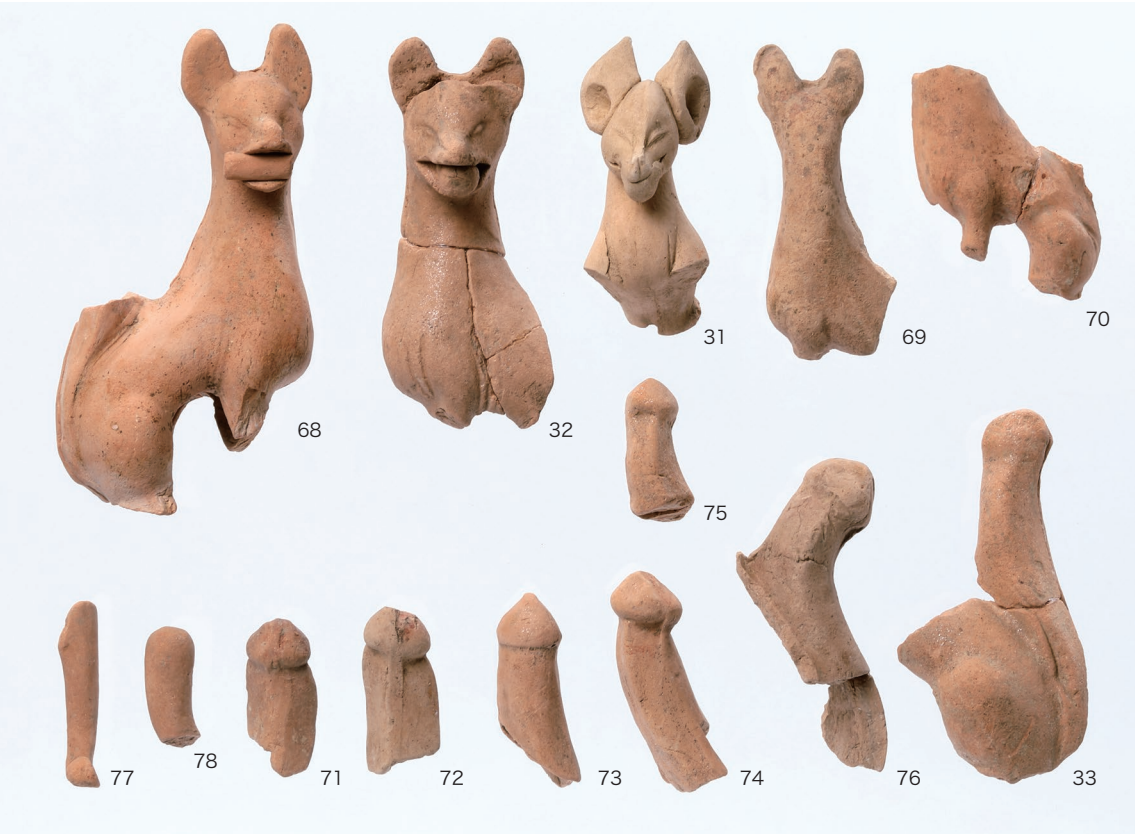
第 4 –27 図　土坑 SK30（西から）



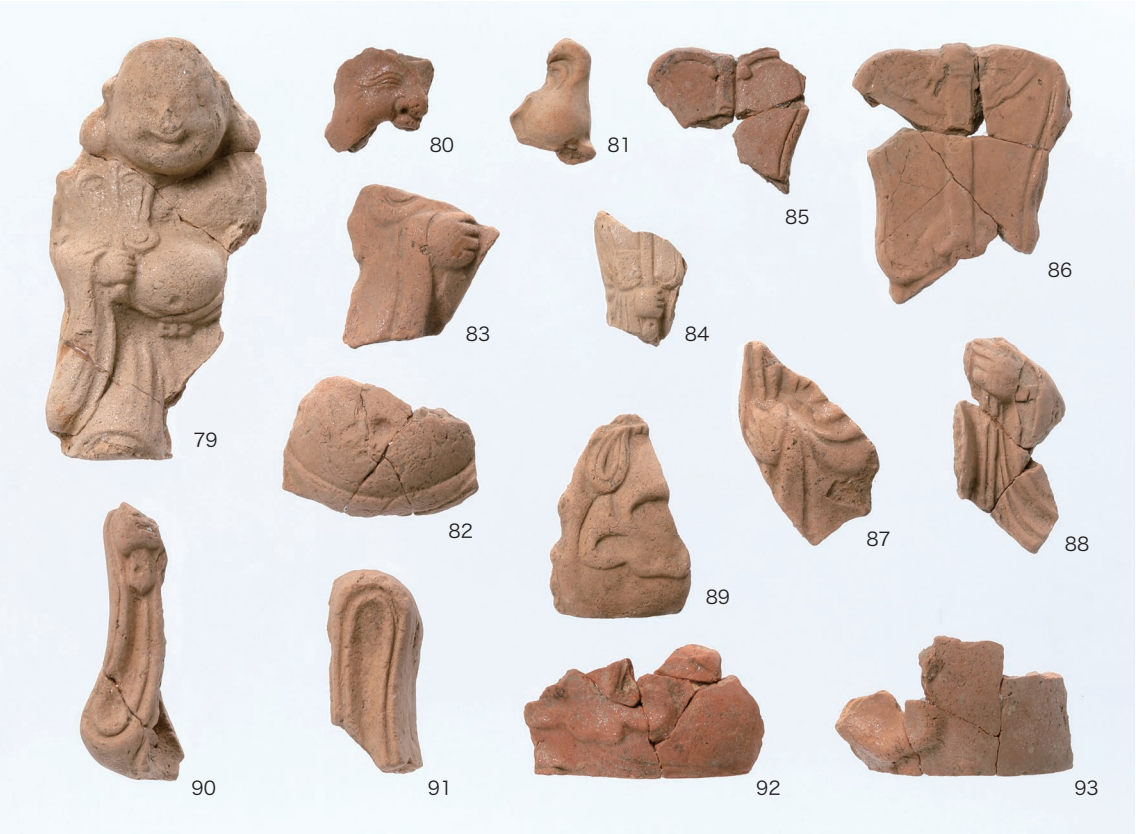
第 4 –28 図　土坑 SK34（西から）

第 4 –29 図　土坑 SK36（北東から）

第 4 –30 図　土師器・陶磁器・土人形など



第 4 –31 図　狐像の土人形



第 4 –32 図　布袋像の土人形

第 4 –33 図　瓦器・陶磁器

第 4 –34 図　土師器・須恵器

長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選（十二）

令和５(2023) 年３月 31 日　発行

編集発行　　公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617−0853　京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の１

電　話　075−955−3622
ＦＡＸ　075−951−0427

印　　刷　　山代印刷株式会社

〒602−0062　京都府京都市上京区寺之内町通小川西入
宝鏡院東町 588 番地

電　話　075−441−8177
ＦＡＸ　075−441−8179